

奇超人JUNO

祐。

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

大都市『龍明』に住む美女の探偵「葉山ユノ」は、気分で依頼を受けるマイペースな一面と、大の若い女好きで日々だらしない生活を送っていた。そんな彼女の正体は、最強の名を冠する「超人」の一人であり、その中でも異次元の戦闘力を誇る絶対強者。

——探偵事務所の雑用係として採用された男「柏島歓喜」が、葉山ユノという自由人との出会いから始まる物語。「超人」を集めたヒーロー組織にも属さないユノの、彼女が執行する自由な正義の数々を追う冒険記録である。

目次

プロローグ

その女、最強につき【4099文字】※お色気シーン有 | 1

1章1節

動き出す邪悪【2830文字】※お色気シーン有 | 7

女探偵の矜持【2963文字】※お色気シーン有 | 11

超人ユノ【2334文字】 | 15

奇超人JUNO【3133文字】 | 19

正義執行【3357文字】 | 23

流浪の救世主【4009文字】※お色気シーン有 | 28

1章2節

色欲の怪物と最上位ヒーロー【4633文字】※お色気シーン有

34

愛を知る【3880文字】※お色気シーン有 | 41

犯人像【4138文字】 | 47

超人が持つ能力【2233文字】 | 53

温もりを帯びたGPS【4192文字】 | 57

愛を執行【3185文字】 | 63

常識と正義【2374文字】 | 68

1章3節

死人と同義【2585文字】※お色気シーン有 | 72

ローリスク・ハイリターン【3649文字】 | 76

証言者【2933文字】 | 81

蓼丸菜子【3723文字】 | 85

生きているだけで【3228文字】 | 91

不公平な世界を憎む【4383文字】

96

ヒーローごっこ【3876文字】

102

英雄執行【4513文字】

108

最善の選択【2792文字】

114

1章4節

自由な正義【4032文字】※お色気シーン有

118

女探偵と助手（雑用係）【2490文字】※お色気シーン有

124

女上司の自宅に招かれて……【3235文字】※お色気シーン有

128

カツキーとチョココメント【4643文字】

133

押し寄せる動揺【2602文字】※お色気シーン有

140

銀色、摩訶不思議【3242文字】※お色気シーン有

144

楽しい、したい【4534文字】

149

超越者【3469文字】

156

1章5節

動き出す二人【3672文字】※お色気シーン有

161

プロローグ

その女、最強につき【4099文字】※お色気シーン
有

ピンポーン――

――鳴らされたインターホン。立ち並ぶ建造物に紛れた、朝の日差しを避けるビルの四階の裏側にて、それは響き渡った……。

いつの日からか、架空の生物として馴染みのあつた“モンスター”という存在が、現代に現れるようになった世界。

人類というか弱い生物を容易く屠る“それ”の登場と共にして、人類にもまた、“超人”となる常軌を逸した身体能力を持つ個体が、生まれ出るようになった。

モンスターと超人による攻防。その末に、外部からの侵略的な脅威を絶つべく、常人である人類が造り上げた百メートルほどの巨大な防壁。それに囲まれながら発展したのが、現代とそう代わりない姿で広大な平原に佇む、大都市『龍明』りゅうめいだった。

見上げる高さである防壁をも越えるビルの数々。土地の広さも相まって、防壁に囲まれた窮屈さよりも、未だ発展を続ける建造物に挟まれる形で息苦しい。その光景を横切るよう大都市の上空を駆ける、近未来的な平たいジェット機の姿。

その機体が、ビルから離されるよう設けられた、くびれのような形が特徴的なタワーの屋上に降り立った。

……乗り物の中から姿を現す、武装した数名の人間と、それらとは打って変わってラフな私服姿の人間。ラフな人間に関してはその身の身体こそが武装そのものであり、彼らは執行した正義を報告するように、迎えてくれたタワーの人間達に何かを喋っていく。

そんな光景が、大都市『龍明』ではごく当たり前の日常として成り立っていた。

——五階建ての、ひと昔前を思わせるビル。付近の住宅街からは、学校へ向かう児童達の元気な声が響いてくる。

それが背景ともなる、ひと気の無い建物の集合地。そこで鳴らされたインターホンは、反応が無いまま溶け込むよう虚しくと周囲に消えていった。

……首を傾げる青年。百七十五の背丈で、黒のショートヘアとオレンジ色の瞳が快活さをうかがわせる。彼から見て左目に刻まれた古傷が生々しいものの、藍色のアウターと白色のシャツ、黒色のパンツに同色の靴という、至って無難な格好が傷跡の荒々しさを感じさせない。

彼は腕時計を確認する。……午前の七時半。予定より三十分も早い到着だったものの、さすがにこの時間なら「部屋の主」も起きているだろうに、なんて思いつつ……。

腕時計からずらした視線。立てかけられた看板に書かれている、『葉山探偵事務所』の文字。

もう一度、インターホンを鳴らしてみようか。そんなことを考えながら手に掛けてみたドアノブに、彼は違和感を覚えてゆっくりと引いていく——

——ガチャ、リ。

開いた……。動きを止めて思考停止する彼。次にも、薄暗い中の様子うかがうようにドアの隙間から覗き込みながら、彼は心配する声音でそれを訊ね掛けていったのだ。

「あの、すみませーん。俺、かしわじまかんき「柏島歓喜」と言いますー。ドアの鍵かかってませんでしたが、あの、大丈夫でしょうかー？——てか、中に誰かいます？ その、少し失礼しますよー？」

そう言い、柏島歓喜と名乗った彼は警戒するように足音を殺しながら、玄関にあった赤いパンプスを確認しながらも、恐る恐る入っていく。

……モンスターや超人といった、常軌を逸した存在が蔓延るご時世なのだ。それらが持つ特異的な能力によっては、個室への侵入などい

とも容易い非常識なものもあり、彼はそういった脅威を警戒しつつ、ビルの一室を借りた探偵事務所のおフィスを眺めていった。

部屋の中央で存在感を醸し出す、縦長のテーブル。それらの周囲に並ぶ八つの椅子と、テーブルと並行するよう壁に沿ったキッチン。また、テーブルの奥には事務机があり、ノートパソコンや大量の資料を挟んだファイルなどが置かれている。

そして、事務机の真後ろに存在する仕切りのパーティション。この奥で何やら影が蠢くと、直後にもそこから一人の女性が飛び出してきたのだ。

赤い眼鏡と茶色のふわふわなカールが特徴的な、大人の女性。彼女は花柄のロングスカートを揺らし、どこか慌てた様子を見せながら足早に出口へと向かい始める……。

「あの、勝手に入ってきてすみません。ドアの鍵が開いてましたけど、あなたが『葉山さん』ですか——」

「し、失礼します……っ!!」

火照った頬と、柏島歓喜から目を逸らしていく様子。女性は彼の横をすり抜けるように真っ直ぐ出口へと向かうと、足元に垂れている液体に気を遣いながらも赤いパンプスを履くなり、「お、お邪魔しました……!」と短く告げて事務所から出て行ってしまった。

……啞然とする彼。すぐにもパーティションの裏から伝う足音に彼は振り向くと、そこから姿を現した『もう一人の女性』と目が合った——

「午前八時から、午前十時までの二時間の間。私が電話越しに貴方へと告げたはずの、雇い主が希望した指定の時刻。無論、行動力のある人材は探偵事務所には是非とも迎え入れたいと心底歓迎する反面、希望していない時刻にプライベートの領域へ土足で踏み込んできた新顔さんを、私はどういった面持ちで迎え入れればいいのかどうか。——ヒーロー組織を束ねる『龍明超人協会』に、アシスタントスタッフとして所属していたとても真面目な優等生くんなら、今の私の心情もきつと、手に取るように読み取れるハズよ」

身長百七十九。彼が若干と視線を上げる背丈の彼女は、灰色混じり

の白髪を腰辺りにまで伸ばし、分厚いポニーテールを揺らしながら、快活な黒色の瞳と、健康的な色白の肌が織り成す美貌を彼の前に晒していった。

ライダースジャケットのような黒色のアウターに、美乳とも呼べる適度な豊満のそれを覗かせる、はだけるようボタンを開けられた赤色のシャツ。黒色のバイクパンツも相まってクールな印象を与える容貌は、彼女から見て左目にあたる目元のほくろがそれをより印象付けていく。

大人の女性として落ち着きのある凛々しい声音が、淡々とした調子で言葉を連ねていく。それと共に、彼はふと目についた違和感へと視線を向けていった。

……彼女の右膝部分。黒色のバイクパンツを濡らす、何かしらのシミが広がる様子。そのシミの正体はすぐにも判明し、かつ、パーテーションに寄り掛かるように佇む彼女の右手にも、べったりと存在していた。

——“体液”。美しい手先を濡らす “それ” を、彼女は嗅いでいく。

そうしながら事務机へと歩き始めていくと、ペロツと出した舌で “それ” を舐め回しながら、しれつと会話を始め出したのだ。

「三十分早いけれど、ようこそ柏島歓喜くん。改めまして、ここは『葉山探偵事務所』。これから雑用係として貴方に勤務してもらおう新しい仕事環境は、従業員が探偵を本職とする私のみという、私立の探偵稼業を一人で営む女探偵と二人きりの、もの寂しい静かな職場となるでしょうね。——自己紹介が遅れたけれども、私の名前は『葉山^{はやま}ユノ』。よろしく、柏島歓喜くん」

凛々しい風貌で椅子に座る、女探偵 “葉山ユノ”。続けて彼女は長い脚を事務机に乗せていくと、その上で脚を組むようにして、柏島歓喜へと視線を投げ掛けていく。

……凛々しく麗しく、だが、ミステリアスな雰囲気をもとった女性だ。彼の記憶における断トツな美貌を誇るそれを前にして、彼はたじろいでしまう。

「ど、どうも。面と面で向き合っては、初めまして……。俺のような、怪我をしてしまったって止む無く『龍明超人協会』から撤退してきたような人間を拾ってくださって、ありがとうございます……。こんな日くつきの人間に声を掛けてくださったこと、感謝しかありません」

「雑用係兼探偵助手を希望する応募者の中で、貴方の名前と存在感は何だか際立っていた。そこでビビビツと直感が降りてきた私は個人で身元調査を行い、そこで得られた柏島歓喜という男への信用に納得して、貴方を採用した。ただそれだけ。お礼を言われる筋合いは、謝礼と報酬が関わる物事以外では全くもって無縁よ」

柏島歓喜へと投げ掛けられる、葉山ユノの真っ直ぐな視線。

それを受けた彼がどこか気恥ずかしくしていると、彼女は淡々とした調子でそれを口にした。

「残念だけれど、期待感だけは貴方に与えたくないの。私は男の人というものに興味が無いわ。だから、貴方に求めている要素は、たった一つだけ。それは、名誉的な意味合いで世間の誰もが羨むとされる、ヒーロー組織『龍明超人協会』のアシスタントスタッフを務めた貴方の、そこで培った雑用係としての技量。ただそれだけ」

「ああ、いや……。期待というか何というか。でも、これだけは言わせてください。——葉山さんって、お綺麗な方ですよね」

「どうせなら、若い女の子に褒められたかった。優しく温もりを帯びた天然の柔い肌を、この両腕で抱き抱えることこそが、私が生きる上での喜びそのものでもあるのだから」

右手をかざす彼女。既に拭き取った艶に見惚れるよう手先を眺めると、彼女はおもむろに立ち上がって歩き出すなり、彼へとそれを指示したのだ。

「そういうことで、この瞬間から貴方には雑務に徹底してもらおうから。……そうね。じゃあ、さっそくだけれど、朝食を作ってちょうだい。貴方と私の、二人前」

「え。……。え!? 雑用係って、コックもやらされるんですか!？」

「私は、事務所備え付けの浴室でシャワーを浴びてくるから。その間によろしくね」

と、彼がいる空間でシャツのボタンを開け始めた彼女。そのまま事務所の出入口近くにある浴室への扉を開いていくと、ボタンツと閉じられて静けさがもたらされる。

……参ったなといった調子で、頭を搔く柏島歓喜。ただ、一人残されたこの空間で、彼はひとまずエプロンを探すところから行動を始めたのであった。

この時にも、葉山ユノという一人の女探偵の物語が幕を開けた。

しかし、この物語は決して、探偵という立場における彼女の活躍を描くものではなかった。

それは、探偵という日常よりも、ずっと過激で、暴力的である物語だ。

……そう遠くない内にも明かされる、彼女の正体。それでいて、ここで描かれる彼女の物語は、今も彼女が世間に隠し通している、裏側に秘めた“もう一つの顔”による、冒険譚としての活躍を描くものである――

1章1節

動き出す邪悪【2830文字】※お色気シーン有

その日、一人の女子高生が殺された。

大都市『龍明』の郊外。真夜中の雑木林がざわめく道のりに、血を流す足がはみ出ている光景。それを目撃した男性が恐怖で慄きながらも、龍明超人協会へと通報したことで事件が発覚した。

無惨な姿へと成り果てた、未来ある少女。シルエツトで隠されながらも、血の量と傷跡から、原型を保つことも許されなかったことが想像できる状況。

モンスターの仕業に違いない！ 龍明にモンスターが侵入してきている！

警告を叫び上げる人間達。嚴重な警戒態勢が敷かれるその脇にて、一つの邪悪が不敵な笑みを浮かべていた。

……薄暗がりの、とある屋敷の中。ワインを注がれたグラスを片手に、豪華な施しの椅子に座るその人物。

顔が映らぬその場面。だが、体格の良い格好と、金色をベースとした民族服を身に纏う男であることが判明すると、次にも、現場で起こっているであろう混乱を妄想しながら、吟味するかのように男はそのセリフを呟いていったのだ――

「んう、もつたいない。実にもつたいない……。ああ、どうしてもつたいないと思うことは、こんなにも我をそそのめるのだろうか。あのコだつて、秀逸な美貌を持つ稀有な女の子だった。それなのに、あの美しさを冒瀆するかのような変わり果てた姿になってしまつて……。ああ、もつたいない。実に、もつたいないなあ――」

「「ユノさーん」。ご飯できましたよー。冷めない内に食べちゃってくださいーい」

事務机の脇にある薄型のテレビ。そこから流れてくるニュース番

組のナレーション。

パーテーションが日差しの進出を防ぐ早朝の空間にて、フライパンを持つ青年が壁越しの浴室へとその言葉を掛けていった。

ピンク色のエプロンが、白シャツと紺色のパンツによく似合っている。それでいて、キッチンで振るう料理の腕も、随分とこなれた様子を見せていくその彼。

綺麗な黄色のオムライスを皿に盛り、ケチャップでなみなみを描いて満足気な表情を浮かべていく。そして事務所中央の縦長テーブルにコツンと置いて一息つきながら、彼はエプロンの紐を解くために手を後ろに回していった――

「とてもイイ匂い。さすがは『柏島くん』。貴方が事務所に来てからの一週間は、食事の時間が楽しみになって、日々のモチベーションに繋がるわ。貴方は本当に、雇い甲斐のある人材ね」

声のした方向へと振り向く彼。

次にも目にしたのは、濡れた髪をバスタオルで拭いながらも、すべてのボタンを開けた赤色のシャツを羽織り、健康的に割れた腹筋を惜しげもなく晒しながら、チャックを全開にした黒色バイクパンツ姿で歩いてくる美女の光景……。

「なっ、なんて格好で人前に出てきてんすかつ!!?」

「あら、今日はオムライス。それも、柏島くんの几帳面で真面目な性格が垣間見えるような、とても綺麗な丸みが食欲をそそる豪勢な一品ね。相変わらず、貴方を雇ったことは正解だったみたい」

「だから、なんでそんな格好で人前に出てきてるんですか!? ちゃんと服を着てから俺の前に出てきてくださいよ!! ……というか俺、雑用係とコックを兼任してません? 明らかに負担が増えていますけど、その分の給与ってちゃんと考慮されていますよね?」

訝しげに目を細める、柏島歓喜。そんな彼が向けていく視線の先には、チャックから覗くピンクのショーツが目立つ女性『葉山ユノ』が、クールな面持ちで椅子に腰をかけて「いただきます」と凛々しく挨拶を口ずさむ光景。

彼は頭を掻く素振りを見せながらも、自分の分の皿もテーブルに置

いて手を合わせ、「いただきますーす」と挨拶を口にして食事を始めていく。

と、向かい合う形で食事を行う彼はふとスプーンを止め、思い出したかのようにユノへとそのセリフを投げ掛けていった。

「そう言えばですけど、ユノさんが入浴中にも電話が一本入ってきてまして」

「依頼？」

「ですね」

顔を上げるユノ。

「声は？」

「中年くらい男性でした」

「なら、後でお断りの電話を入れておきなさい」

プイツとオムライスに視線を向ける彼女。

だが、彼は記憶を巡らせるように上を向くと、そんなことを呟くように言った。

「あ、ですが、途中で電話の主が変わりました。男性の方がパニックでうまく喋れずにいたので、脇に居たのでしょうか、学生さんのような若そうな女性の方に電話が代わり、状況を説明してくれたんです。――その時の女性の方も声を震わせておりましたけど、涙をこらえているような、喉が震えるような声音だったので……」

「……若そうなの？ 学生さん？」

視線が上がるユノ。

「依頼内容は？」

「あハイ。依頼の内容は、〃妹を殺した犯人を見つけたい〃とのことでした。今朝のニュースでも報道されていましたが、昨夜にも龍明の郊外で一人の女子高校生が無惨な遺体で発見されたようでして。そちらの関係者と思われる方々からのご依頼でした」

「行方調査ね。よくあることよ。大抵は、龍明に侵入したモンスターによる捕食行動であるケースがほとんどなのだけれども……」

少しだけ間を置くユノ。

「……度し難いわね。よりにもよって女子高校生を。もしかしたら、

私の好みだったかもしれない、未来ある逸材に手をかけるだなんて」「ご依頼、受けます？ 早めの返答を心掛けたいので」

「引き受けてちょうだい。そして今すぐにも現場へ向かうわ。——依頼主の女の子が、私の到着を待ち望んでいるでしょうから」

カランツ。皿に音を響かせたスプーンが、空になったそのの上を滑っていく。

……え、もう食べたの？ 目を見開く柏島歓喜をよそにして、葉山ユノは自身の乱れた服装に手を掛け始めた。

灰色混じりの白色長髪を結って、分厚いポニーテールをつくり出す。赤色のシャツにインナーを滑り込ませ、シャツのボタンの一番上以外を止めていくと、バイクパンツのチャックをしめてシャツをインさせていき、黒色のライダーズジャケットのようなアウターに腕を通してキメていった。

「柏島くん。貴方も同行しなさい」

「え？ ——え!?! だって、俺は雑用係で事務所に残って……:というか、それ、直前になって言います!?! 俺、準備が何一つ終わって」

「現地では、モンスターとの戦闘になる可能性が極めて高いわ。私がそれを討伐するけれども、私のような『超人』とは違って、『常人』の貴方にとってモンスターという存在は、敵うことも許されない無慈悲な絶対的捕食者。有望な人材である貴方を失いたくない一方で、探偵助手の貴方には現場を経験してもらわないといけない。——オムライス、ごちそうさま。貴方の作るお料理は好きだから、貴方がモンスターのごちそうになってもらっては私が困るの」

彼女から投げられた、シオルダーバッグ。それが彼の近くのテーブルにドカッと落ちると、葉山ユノは凜々しい歩き姿で事務所の出入り口へと向かい出す。

……すぐにも準備に取り掛かった柏島歓喜。エプロンを取り払ってシオルダーバッグを掛けていくと、彼女の事務机から必要となる資料や道具を掻き集めながら、事務所の固定電話を手にとっていった。

女探偵の矜持【2963文字】※お色気シーン有

「ええ、今回のご依頼、ぜひともこの葉山ユノにお任せください。必ずや本件の主犯となる身元を特定し、亡くなられた妹さんが安らかに休めるよう、我々は尽力いたします」

黄昏の夕日が、龍明の防壁へと姿を隠し始める時刻。雑木林が目立つ郊外の地にて、依頼主である十代後半の女性の手を優しく握る葉山ユノが、そこにいた。

即行動。膝丈まである黒色のパフォーマンスブーツを鳴らしながら、彼女は聞き込みを開始した。それは実にアクティブであり、この場にいる依頼主の関係者を始めとして、探偵という職業と美貌に物を言わせた口説きで、警察と会話を交わす姿を見せていく。

また、龍明超人協会から送り込まれたヒーロー数名を相対した際には、彼女は助手としてメモをとらせていた柏島歓喜を引っ張り出してくる。すると、彼女の期待通りに、柏島歓喜は以前の経歴を活かした会話を展開していくのだ。

「あ、どうも。お久しぶりです。え、俺がどうしてここにつて？ いや俺、そちらのアシスタントスタッフを辞めてしまいました。ああいえ不祥事とかじゃなくて、純粹に怪我をしまして、引退を余儀なくされただけなんです。自己管理ができない人間が、ヒーローのアシスタントなんて務まりませんからね。いやいや本当に、厳しい世界です。あはは」

打ち解けたところで、横から葉山ユノが本題を切り出していく様子。これに柏島歓喜は再びメモを構えていく中で、ふと視界の隅に映った「それ」へと意識を奪われてしまった。

「……………雑木林の中。誰もいないところに、人影のような黒い何か……………」

視線を向けた時には、既に見当たらなくなった違和感。何となく気になった「それ」に柏島歓喜は胸騒ぎを感じてしまいがちながらも、時は過ぎてホテルへの移動を終えていく。

…………その日の活動が終了し、湯船に浸かって天井を呆然と見遣る

彼。

お湯が溢れる一步手前の、首から下を温める極楽の一時。初めての現場経験に、多大な疲労を被った彼は頭を空っぽにしていく。

そして、両手に掬ったお湯で顔を濡らそうと、お湯を顔面へと思いつつ切りぶつけていった、その瞬間に開いた浴室の扉――

「私も入れて」

「ぶッ!!! ユノさんッ!?!」

驚きのあまりに吹き出す柏島歓喜。その勢いで上げた視線に映る、彼の視界に広がった彼女のありのままの姿……。

「俺、まだ入ってますがっ!!!」

「ええ、だから柏島くんは柏島くん自由にしていてちょうだい。私は私で入浴を済ませるから」

「そういう問題じゃなくて――っ!! ユノさん、あなたが自分の世界を何よりも大切にしている方であることはこの一週間でよく分かりましたけど、だからって、どんだけ男の人に興味無いんですか!!」

彼の訴え掛けに対して、シャワーから水を流す音で答えていく彼女。そして、ポニーテールを解いてある潤い帯びた長髪をサラサラと流しながら、頭からシャワーを浴び始めた。

「大体ですね、男の俺と女性のユノさんがホテルで同室って時点でも、プライベート的な意味で色々欠いているところが――」

「柏島くん」

自分の世界を持つ葉山ユノは、思い付いたようにそれを口にしていく。

「依頼主のあの子のメールアドレスは、確保できたのかしら」

「え。まあ、言われた通りには……。――ちよつとユノさん。まさか、タイプだからって理由であの方にお近づきになろうとしているんですか? だったら、少なくとも今は絶対にやめてくださいよ。いくら何でも、親族が亡くなられたばかりの方をワンナイトラブに誘うのは、モラル的に良くありません」

「私だって、彼女を悲しませるのは本望じゃないわ」

浴槽へと視線を投げやる葉山ユノ。

「心から傷付いてしまった女性の手助けに、私はなりたいの。それが彼女の心のケアに繋がるのであれば、私は自ら望んでこの手を差し伸べたいし、彼女が誰かの温もりを必要とするのなら、私は彼女のすべてを受け止めて、気が済むまで傍に居てあげたい。——ま、実際、赤の他人である私にできることなんて何一つないけれどもね。ただ、こうして探偵としてお仕事を引き受けるのも、そんな、できることの少ない些細な手助けの一環のようなものなの」

シャワーの音が響く空間。湯船から立ち上っていく湯気が柏島歓喜と葉山ユノを包み込んでいく……。

「ユノさん……」

「貴方も、彼女から相談を持ち掛けられたら、真摯な対応を心掛けなさい。時として、異性と会話することで解決できる物事だつてあるのだから。——法律のしがらみに囚われない自由な身分を商売に、誰かに必要とされる仕事を必ず完璧にこなしてみせる陰の救世主。それこそが、我々探偵の在るべき姿よ」

と言いながら、髪をタオルで束ねるなり浴槽へと脚を投げ掛けた彼女……。

「は、え。ユノさ——」

「脚を畳んで、柏島くん。このままじゃ窮屈よ」

「い、いやいやいやッ!!! だから、男の人に興味無いからつてなんでそんな躊躇い無いんですかッ!!! ——あ、俺、ちよつとのぼせてきたんで先に失礼しますっ!!!」

ザパアッ!!

彼女の身にも降りかかる勢いで浴槽から飛び出した彼。大事なところを隠しながら逃げるよう浴室から出ていった彼の背を、彼女はかかったお湯を全身から垂らしながら見送った——

龍明を護る防壁。その根本から生い茂る雑木林に紛れ込んだ、宵闇の屋敷。

人知れず悪寒を漂わせる屋敷の内部にて、蔓延る邪悪はワインのグ

ラスを片手にセリフを呟いた。

「んう、もつたいない、もつたいない。絶世の美女も、巷で有名な美男子も、美しくあるがために損なわれるのが実にもつたいない。人間、それを欲しがり、求めるからこそ、その可能性が潰えた時に『ああ、もつたいない』と喪失感に浸り出す。そんな喪失感に、我は虜となつてしまったあ」

波を立てるようグラスを回し、中の液体を混ぜていく男。

と、次にも手を傾け、グラスの中を巡っていたワインを床にぶち撒け始めた。

——ビシャ、びちゃびちゃ!! 床を跳ねる飛沫の音に愉悦の表情を見せる男。体格の良い格好と、金色の民族衣装を身に纏うその容姿で、ニヤツと不敵な笑みを浮かべながら片方の手を突き出していく……。

「ああ、もつたいない、もつたいない……。でも、こんなもつたいないじゃあ、我は満足できないぞ。——皆の衆、我に、次なる生贄を捧げよ。ああ、ただし、かの美女がもつたいない死に様を晒したことで、ヒーローとなる正義を着飾る面々が付近を徘徊している。我ともあろう者がそのような正義に見つかるなど、断じてならないからねえ」

男の前に並ぶ、たくさんの人影。そのどれもが二メートルを超えた長身であり、かつ、シルエットは人のようであり、そうでないような、不気味な陰りで塗り潰されている。

「その者。次なる我の贄を、ここへ連れて参れ。他の者達は、この屋敷とは対になる位置に存在する街へと赴き、そちらで適当にひと騒動起こしてきなさい。そうすれば、徘徊するヒーローの面々はそちらを嚴重に警戒し、私の屋敷から遠のくだろう。——さあ、今もこうして無益な時間を過ごすことこそが、ああ、もつたいない、もつたいない。迅速な行動をお願いよ」

手に持つグラスを手放し、その場から落として割っていく。この甲高い破損の音と共に男が手を叩くと、眼前で並んでいた陰りのすべてがその場から飛び立つよう姿を消し、男の思惑に従うのだった。

超人ユノ【2334文字】

紙袋を抱え、あんぱんを片手に建物の陰で張り込み。

陽が落ちた龍明の郊外。ひと気の無い雑木林付近で身を隠す柏島
歓喜は、形から入るタイプであることを晒していく。

「昨日、雑木林で見た人影。俺の勘が訴え掛けてくる。あれこそが絶対
に怪しい、と。……それにしても、ユノさんに吊り合うような探偵
の助手になるために、あんぱんを買って張り込んでみたはいいけれど、
これ、探偵というよりは刑事だよな……」

間違えてしまったか？ そんなことで首を傾げていく彼は、片手の
あんぱんをハムツと啜えて雑木林を覗き込んでいく。

すると、彼はふと視界に入ってきた「それ」に、あんぱんを食べる
口を止めていった。

「……あれって、依頼主の女性。それと、あの人影——」

二メートルもの高さを誇る、黒い何か。暗がりかつ遠目で確認しに
くいそれに目を凝らしていく中で、その脇には依頼主の女性がくっ
付くように歩いている様子がうかがえた。

それらは、二人並んで雑木林の中へと進入して姿を消した。これを
見た柏島歓喜は、「妹さんが被害に遭われた現場に入っていくなんて。
止めなきゃ……！」と建物の陰から飛び出していき、それらの後を追
うように雑木林へと駆け込んでいく。

地面に跳ねる足音。彼は視界の中央に捉えた暗がりの雑木林に向
かって、その声を上げていった。

「二人でここに入るだなんて、危険です!! 何か用事がありでした
ら、俺やユノさんが一緒に同行します!!」

呼び止めたそれら。雑木林にできた細い道で足を止めたそれらと
彼は、上げた声から少しもの沈黙が走る。

……じきにも、依頼主の女性がゆっくりと振り返ってきた。

口に侵入する漆黒の触手に、涙をボロボロと零す様を見せながら――

「ッ、それは——!?!」

彼に飛び出す触手。足元から掬い上げるよう伸びたそれは、常人の動体視力では到底追いつけない速度を以てして、彼を拘束した。

落とした紙袋が音を立て、黒い何かのもとへと連れていかれる柏島歓喜。

二メートルものそれに近付くと、彼は目にした質感に驚きを隠せず
にいた。

……黒く、艶のある表面。人間の皮膚ではない硬化したそれが人型を
生み出した、紛れもないモンスター。それは遠目から見ると、トレン
チコートを着る長身男性に見えなくもなく、しかし、人間ならざる
表面のみで形成された身体は、どんな常人の攻撃さえも跳ね返してし
まいそうな、硬質な質感であることがうかがえる。

依頼主の女性へと向ける視線。彼の視界には、女性の口を塞ぐ触手
の他に、腹部を貫く別の触手が映り出す。

血を流しながらも、塞がれた口からは悲鳴を上げることすら許されな
い。そして触手に連れていかれる形で雑木林へと踏み出し、今に至る

「は、離せ……ッ!!!! くそ!! 俺が、俺が、非力なばかりに……ッ!!」
救い出すことができないもどかしさ。すぐにも別の触手が黒いそ
れから伸びてくると、柏島歓喜の顔面めがけて飛び出していった――

——彼の視界を横切る、漆黒とは異なる黒き軌跡。

一瞬のそれが干渉すると同時にして、この世のものとは思えない衝
撃が迸る。

樹木に打ち付けられ、豪快に跳ねながら地面に落ちた柏島歓喜。先
の衝撃でかなりの距離を飛んだことで、彼は背中に走る激痛で表情を
歪ませながらも起き上がっていく。

そして、前を見遣った。……片脚を突き出したまま静止する、葉山
ユノの姿を確認するために――

「ユノさんッ!!」

彼女の前方。吹き飛んだ黒きモンスターが雑木林から身を起こす。
次にも、それは飛び掛かるようにして彼女を強襲した。

「ユノさんッ!! そいつはあまりにも危険です!! 俺もアシスタントスタッフとして色々なヒーローとモンスターを間近で見してきましたが、こんなにも戦慄するほどのモンスターは、極めて稀ですッ!! そいつは危険すぎますッ!! 相手にするだけ、ユノさんの命が危ないッ!! 今は逃げましょう!! 生き残って、龍明超人協会に、支援を要請するんです——」

突き出される触手。柏島歓喜の目では捕捉し切れない一撃が、葉山ユノへと襲い掛かる。

彼女の脚を通り抜け、顔面めがけて放たれた攻撃。それが彼女に直撃する。その瞬間——

——最低限の動作のみで、頬を掠るように触手を避ける。そして、そのわずかな動作の中に生じた運動を右回転に転じさせ、次にも右脚による渾身の蹴りが繰り出される。

ッ。

視界がホワイトアウトするほどの、大気を揺るがす衝撃。瞬間的に巡った失神と耳鳴りが柏島歓喜に降りかかると、直後として目撃した光景に、彼は目を真ん丸にしながら放心してしまった。

蹴りの先にある雑木林の一部分が消失した、空気中に打ち付けられたクレーター。地面を抉るそれが白い煙を上げ、攻撃対象だった黒い存在が忽然と姿を消した世界をそこに作り出す……。

「柏島くん。女性を安全な場所へ連れて行ってちょうだい」

「え、あ、はい……!」

よろける彼。そんな状態で倒れる女性へと駆け出していく間にも、葉山ユノは黒きモンスターが進もうとした東の方向を見遣っていく。が、すぐにも西の方向にある街へと振り返っていき、歩き出しながら柏島歓喜へとそれを伝えていったのだ。

「女性を運び次第、現地の人間に避難を呼び掛けて。一刻でもここから離れ、地下シェルターなどの安全な場所へと逃げ込むようにと」

「は、はい! ——え、ユノさんはどうするんですか?」

「私は——」

彼の視界に一瞬ばかりとよぎった、彼女の姿を覆うよう現れた紅の

幻影。

コートのように揺らめいたそれと共に、葉山ユノは彼へと振り返りながらそれを告げていった。

「私の正義を執行するわ」

その場から跳躍し、瞬く間に姿を消した葉山ユノ。それを目で追えることなく彼方へと視線を向けた彼は、すぐにも我に返るように立ち上がり、倒れる女性を抱えながら走り出した。

奇超人JUNO【3133文字】

阿鼻叫喚の龍明の街中。意図的に起こされた騒動によって、多くの損害が被る状況。

黒い何かのモンスターが押し寄せ、瞬く間に街の一部分を制圧した。これによって上空には中継のヘリコプターなどが大量に旋回し、事の重大さを大々的に取り上げていく。

建物の屋上に降り立った葉山ユノ。そこから下を覗いていくと、黒きモンスターが徘徊する様子と共に、上空の女性リポーターが放つ言葉に耳を傾けた。

「我々は、これほどまでの命の危機を感じたことはありません!! これではまさしく、地獄と呼ぶに相応しい状況であることが一目瞭然となっておりませぬ!! 皆さんが今も目撃している現場はCGなどの作り物ではなく、今そこにあるがままの、本物の地獄を映し出しているだけにすぎませぬ!!」

建物が炎上し、多くの人間が倒れ込む悲惨な現場。その中にはヒーローとして名を馳せる実力者のメンツも揃っており、そのほとんどが眼前の脅威に力が及ばず、突っ伏した姿となって映し出されている。

「我々全人類の希望である『超人』のヒーロー達も、目の前のモンスターを相手に敗北を期した現状。本格的に訪れた龍明の危機に、超人協会は更なる強力なヒーローを即急に手配したりと、今も目撃する災厄の如き侵略に、凡人である我々は身を震わせて解決を願うばかりで——きやあつ!!!」

揺らぐヘリコプター。その機体を貫く触手が引っこ抜かれると、ヘリコプターは煙を上げながら落下し始める。

中で、シエイクされるよう転げ回る女性リポーターとカメラマン。操縦士も命の危機に苦難の表情を見せていく状況で、開けられたそれとは異なる別の穴が生じると同時に、内部の人間が一瞬にして消失する——

そう間もなく、ヘリコプターは落下して大炎上した。この光景に周囲がさらに戦慄するものの、次にも向けられたカメラは、屋上で数名

もの人間を抱える。『それ』を捉え、注目した。

ドサ、ドサドサツ。

抱えていた操縦士二名とレポーター、カメラマンが屋上に落とされる。この衝撃で彼らは意識を取り戻すと、付近で佇む『それ』へと視線を上げ、その姿を視界の中央に映していった――

――靴底を合わせ、百八十一もの背丈を誇る長身。灰色混じりの白色ポニーテールを腰辺りにまで伸ばした凛々しいシルエットは、膝丈で揺らぐ真紅の分厚いコートを纏って存在していた。

漆黒のTシャツに、同色のバイクパンツ。緩く巻かれたクロスするレザーのベルトに、膝丈までの漆黒のパンキツシユなブーツという身なりも合わせて彼らへと振り向いてきた『それ』は、瞳と口元を紅色で光らせた、漆黒の仮面越しに無事を確認していく。

そして、黒色のガントレットを装着した手を伸ばし、女性リポーターを優しく立ち上がらせた。

「……あ、ありがとうございます……っ」

呆気にとられるリポーター。そんな彼女を見下ろす形で、どこか見惚れるように眺める『それ』だったが、すぐにも名残惜しく歩き去っていくと、次にも『それ』は高く跳躍し、阿鼻叫喚の地上へと降り立っていったのだ。

積もる砂埃を巻き上げ、モンスター集団へと真つ向から向かい合った『それ』。それでいて堂々とした存在感と、凛々しく歩き進めていくその様子が、上空でカメラを向ける多くの注目を引き付けていくのだ――

「ああーっつと!!! ここまでまさかの推参ーっ!!! 誰もが災厄に絶望する中で姿を現したのは、龍明超人協会に属することなく、流浪の果てに気まぐれで我々の危機へと駆け付ける、謎多き紅の救世主!!! 正しくはヒーローではないために通り名は名付けられていないものの、以前にも姿を見せては脅威を取り払ってくれた際にも、救出した女性に持たせた石板に綴られた『JUNO』の文字から、我々は『それ』のことをJUNOとして呼んでいる、世間では話題が持ち切りの最強の助っ人だアーツ!!!」

男性リポーターのそれを一切気にすることなく、モンスターが続々と集ってくるその空間。前方の光景に皆が絶望を感じる中、“それは悠々とした様で歩き進めていくのだ。”

集まったモンスターの数は、ぎつと二十体。そのすべてが“先にも雑木林で出会った個体”と類似しており、その時にも外部から投げ掛けられた忠告を“それ”は思い出しつつ、ガントレットで拳をつくりながら即座に飛び出していった――

――刹那だ。

ひび割れる空間。音や衝撃よりも先に生じた大気のクレーターは、周囲のモンスターを悉く吹き飛ばし、炎上する街並みの炎を屠っていく。

次にも、遅れてやってきた衝撃波によって、上空に存在する多くのヘリコプターが制御不能となって揺らぎ出した。

機内で、必死となつてしがみつく面々。皆が悲鳴や驚きで上げていく声も中継で放送される中、地上では“それ”が振るう拳による、一方的な排除が展開されていく。

もはや、虐殺だった。突つ伏す英雄達をも退けた脅威が束になって襲い掛かろうとも、仮面越しの無言を貫く“それ”がひとたび拳を振るえば、前方から押し掛かる規格外のパワーによって、脅威は散り散りとなって地面に降り積もる。

“それ”の背後から飛び掛かったモンスター。だが、瞬間的な振り向きによって頭部をガントレットで掴まれると、抑える程度の握力によって弾けるスイカの如く粉碎される。

左右から触手で攻撃を仕掛ける二体のモンスターも、伸ばしたそれを容易く両手で掴まれてしまい、触手同士が絡まるように引っ張られて一つとなったところで、“それ”はモンスターを振り回して周囲を薙ぎ払っていく。

これを投げつけて粉碎すると、足元から生えるよう現れたモンスターによって、頭部を貫かれた。

かのように思えば、首だけを曲げるようにして、見下ろす形でモンスターを眺める“それ”の姿。

——わずかながらの静寂。直後にもモンスターの頭部は驚掴みにされ、“それ”は弧を描くような大振りの投げによって、地面が割れるほどの衝撃で叩き付けられる。

が、それでは終わらない。“それ”はすぐにも弧を描いて再び叩き付け、また弧を描き叩き付け、を数十回にも渡って繰り返していく。街に刻まれた地割れ。そこで削るようにモンスターを引き摺りながら持ち上げていくと、“それ”は爆発的な力を加えることによって、見せしめにするかのように、モンスターをその場で握り潰して飛散させた。

……塵となり、飛び散る黒き破片。これを最後にして静寂を迎えた街の空間と、誰もが圧倒されて口を噤むその中央で、現在を噛み締めよう微動だにせず佇む“それ”の姿——

「……………我々は時々、人類に与えられた、運命に抗うための恵まれた能力に恐怖することがあります。それは、最上位のヒーロー達による鎮圧作戦でも薄々と生じる感情ではありませんが、それ以上に、『JUNO』と呼ばれる流浪の救世主が執行する正義においては、その感情がひと際強く生じるのです。——神が、実験という名目で人類に超能力を与え出したのだとすれば、今も目の前に存在する『JUNO』という存在は、その実験における最も理想的な成功例とも言えるのではないのでしょうか……………」

淡々とした調子で解説する男性リポーター。その言葉が中継を通じて染み渡るよう響くと、“それ”は無言を貫く動作のまま、とある方角へと振り向いていった。

……彼らが集団を成して街を襲う理由が、見当つかない。おそらく、本能的な目的を持たない襲撃だった。

——となると、陽動。

「あー、『JUNO』が今、その場から跳び去りました！」

男性リポーターが上げたセリフ。それと共に倒れ込んでいたヒーロー達が起き上がると、そうして上げた視線の先には、既に静寂を迎えたひび割れの街並みのみが広がっていた……。

正義執行【3357文字】

宵闇に紛れるよう、雑木林に佇む薄汚い屋敷。人目を避けるようひっそりと存在する屋内には、座る椅子の手すりに、指の貧乏揺すりをコツコツと鳴らす男が苛立ちを見せていた。

「んう、ヤツらは何に手間取っているとしても言うのだ？ 遅い。遅すぎるぞ。こうして贄を待ち続ける時間こそが、もったいない……！」
体格の良いシルエットと、金の民族服をまとった男のぼやき。その眼前では、黒き触手を蠢かすモンスター数体が自由に歩き回っている。

——と、次の瞬間にも屋敷の屋根が突き破られた。
ッ。

突撃した爆音。これは爆発しない爆弾の如く、衝撃のみの音を屋内に轟かせ、何かが降り立つ。

風圧で吹き飛ばされてきた破片が降りかかり、男は慌てて立ち上がりながら退いた。

同時に、これを受けて周辺から黒きモンスターが集まり、降り立つた何かを包囲していく。

……天井に開けられた穴から差し込む月明り。それが薄黄色いわずかながらの光源をもたらずと、次第と鮮明になりつつある。『紅』の姿が、ゆつくりと身体を起こしていくのだ。

——真紅の分厚いコートと、紅が光る漆黒の仮面。無言を貫く『それ』はガントレットをガチガチと音立て、目の前の男を真っ直ぐと捉えながら歩みを進める……。

「な、なんだねチミはっ!? わ、私の屋敷をこんなにして——せつかくのこだわりの造形がっ、なんでもったいないっ!!」

咄嗟にかざす右腕。それを合図として黒きモンスターが一齐に『それ』へと襲い掛かると、鳴らすガントレットで拳をつくるなり振り抜いた一撃によって、屋敷共々モンスターを塵へと帰してしまふ。

——背後に現れる、龍明の防壁。隕石が横殴りに衝突してきたかのような一撃は、後方の壁に拳型の凹みを刻み込むほどのもの。

その、真横。開いた穴で絶句する男。……本能が訴え掛けてくる危険信号に、思わずと鼻水を垂らしながら一步、後退った。

瞬間、一気に距離を詰める“それ”。蹴るようにして音速の接近を図る前方に対して、男は堪らずといった具合に背中から複数の黒い触手を伸ばしながら、怒れる表情で“それ”を迎撃したのだ。

無数の攻撃を掻き分ける。だが、周囲の子分とは格が違うことを知らしめるよう、“それ”をわずかながらに足止めしたその一瞬を見極め、男は開いた穴へと飛び込むようにして脱出を図った。

それと連携するように周囲から現れた、黒きモンスターの群れ。どこに隠れていたのか、真つ黒な大波をつくり出すように“それ”へと飛び掛かる。

だが、握った拳で波は容易く打ち破られ、原型を失った黒い塵が屋敷の破片と入り混じっていく――

――逃がした。

跳躍で天井をぶち破る“それ”。屋根に降り立つて周囲の雑木林を見渡し、すぐにも再度の跳躍で宵闇に溶け込むことで、瞬く間にその姿を消していく……。

龍明の郊外。街とは異なる、村に近い環境。

ホテルの屋上を踏み台に地上へ降り立つと、そこで待ち構えていたのは、恐怖で悲鳴を上げる民衆の光景だった。

……地面に張り付く、粘液混じりの黒い跡。それは伝うように伸びていくと、先まで“男”を象っていた、体格の良いタコのような人型の黒色軟体生物が、目についたのだろう二人の人物を触手で拘束して“それ”へと向かい合っていく。

二人の男女が、まとめて触手に締め上げられる様子。女が口から流す血で絶望に打ちひしがれた表情を見せていく中、男はそのオレンジ色の瞳を真っ直ぐと“それ”へ向けながら、セリフを口にしていった。

「すみません……!! 依頼主を安全な場所へ運ぶことはできました

が、住民の避難が間に合いませんでした……！ 俺には、町の皆さんを動かせるほどの影響力が無く……！ 本当に、すんません……！」
無念。そんな様子で謝る彼の姿。それも、囚われの身となったことで、彼は申し訳なさそうにしていく。

この彼を傍らに、二人の人質をとった軟体生物のモンスターは得意げに喋り出した。

「んっふっふう、いくら貴様のような『超人』であろうとも、さすがに無関係のか弱い人間様ごと殴りにかかるだなんてことはできないだろう？ ああ、もつたいない、もつたいない。せつかく実力が伴っているというのに、こんな、地上に蔓延る虫けらのような脆弱生物に肩入れするなんて。それでは存分に、自慢の拳も振るえやしなひんじやないのかねえ？ ああ、もつたいない、もつたいない」

今にも零れそうな笑いをこらえる様子。力を持つ者に対抗する知恵を持つモンスターを相手に、『それ』は微動だにせず、ただただ佇んでいた。

……触手に拘束されている二人を見遣る。

諦めず、真っ直ぐとこちらに力強い瞳を向けてくれる男。一方で、不幸にも身内を亡くした心の傷を負い、その上に命も狙われる不運に晒された女性が次第と青ざめていく。

——ガントレットが鳴り、拳が握りしめられる。

『それ』が手出しをできずにいる様子に、軟体生物のモンスターは高らかに笑い出した。

「我らを容易く屠る力を持っていながら、有り余ったそれを手持ち無沙汰にしてだんまりを決め込むその姿!! ああ！ なんてもつたいない！ 実にもつたいないねえっ!! 我はそういう、羨まれるものを持ちながらも、それを有効に活用することのないまま、持たざる者を嘲笑うかのように秀でた才を無に帰す無駄な行為が実に大好きなのだよ!! ああ、もつたいない、もつたいない……。同胞を守る力を持っていないながら、満足にそれを振るえないなんて、実にもつたいないねえ」

触手が女性の頬を撫で掛ける。

口から流す血を拭うようにすると、その代わりとして黒くべたつく粘液を付着させていき、女性の口と鼻を覆っていく。

——と、次にも目をひん剥いた女性。窒息に陥った彼女は足をじたばたと動かし始め、苦しみもがく様子を見せながら、涙をボロボロ零して“それ”へと訴え掛けた。

助けて。

おねがい。

死にたくないよ——

「……………」

一步。無音を踏みにじる。

張り詰めた空気に身構えた、右腕を引き絞る“それ”の行動。

対象は、前方に蔓延る邪悪の権化。

今も勝ち誇り、頬まで届くニヤけ顔を晒すモンスターへと、一つの照準が合わせられた。

待ってて。今、助けるから——

空間に風穴が開く。

全身を捻じりながら振り抜かれた渾身の拳が、円盤型の立体な衝撃波を生み出した。

無を殴り飛ばす荒業。空間からくり貫くように一点の大気を殴りつけると、振り抜くと同時に標的へと到達する異次元の砲丸となつて、軟体生物のモンスターに直撃する——

「っ——。ッ、!!!!
??!」

着弾点を中心に、吹き飛ぶ周囲。悲鳴を上げていた人間達も揃って地面から浮き上がり、大気を伝った衝撃が、町の表面に走り出して埃を巻き上げていく。

——軟体生物のモンスターは、柔らかな身体に救われた形で、地面を転がっていた。

一瞬ばかりと記憶を失った刹那。気付いたら転がっている状況に、

理解が追い付かないようでハテナマークを浮かばせる。

と、次にもモンスターの姿は消え去った。

通りすがりに走り抜けてきた、音速の“それ”に連れ去られたからだ。

「なツ、貴様——」

速度をまとい、軽快な動作で斜め上へとモンスターを投げつける。

そして軽い跳躍を行うと、“それ”は容赦の無い拳の一撃で軟体の身体を殴りつけ、神経の芯にまで響く衝撃で前方へと吹き飛ばした。

その先にあるのは——龍明を護る防壁。

瞬時にして、町から離れる速度。雑木林が生い茂る見慣れた場所です。打ち付けられたモンスターは、強固なそれで跳ね返ると、この止まらぬ運動と、制御の利かない身体で、前方の光景に焦燥を見せ始めた。迫る紅。拳を握り、構えていく姿勢。

周囲を気にすることなく、気兼ねなく殴ることができる絶好の場所。

引き絞り、繰り出していく。両手にそれが垣間見え、瞬間ながらもモンスターは叫び上げた——

「な、何をする、っ、そんな、我なんぞのちっぽけなモンスターに、そんな力、もったいな——や、やめる。やめるおオオオオオオオオオオオオツツ!!!」

大気を貫く機関銃。

空間が歪むほどの衝撃を伴う拳が、連射という形で一点に集中する。

軟体を粉々に砕く破壊力。

一ミリもの原型をも残さない。そんな、殺意を凌駕した無慈悲な鉄槌の嵐——

メの一発。身体にめり込む拳が突き抜け、次の時にもモンスターだったそれは、龍明の加護である絶対的な防壁をぶち破りながら吹き飛ばされていったのだった。

流浪の救世主【4009文字】※お色気シーン有

流浪の救世主『JUNO』、龍明に推参——

朝刊の一面に相応しい文句を柏島歓喜は思い浮かべながら、龍明の防壁から覗き始めた朝日を正面から迎えていく。

共にして、後方からブーツの足音を鳴らしながら近付いてくる人影。彼はそれへと振り返っていくと、その先には、早朝の薄暗い明かりに照らされた普段着姿の“英雄”が、凜々しい佇まいで存在していた。

「誠意に溢れるご家族だったわ。聞き込みだけで終幕した事件に対して、真摯に向き合ってくれたからという理由で契約金を支払ってくれるだなんて」

「それだけ、ユノさんの探偵としての振る舞いが、皆さんにとって心強かったのかもしれないね」

そう言いながら、彼は雑木林の方へと視線を投げ掛けていく。

……龍明超人協会から派遣されてきた、警察やヒーローといった騒動の関係者でゴった返す光景。その周囲には、ホログラム状の立ち入り禁止テープが空間に張り出され、関係者以外の進入を禁ずる抑止力に集った野次馬の姿が見受けられる。

昨夜の出来事によって、注目を浴びた区域。街中に現れた災厄を討ち滅ぼした気まぐれな英雄は、龍明内に潜伏していた、その親玉となる凶悪なモンスターも討ち倒し、大都市に平和をもたらした。

ヒーローという存在は、この世界で生きる人類にとつて最も頼れる存在であり、かつ、最も近い存在でもある。

あわよくばJUNOからサインを貰おうと、色紙を抱える一般男性の姿。それを見た葉山ユノは沈黙を貫きながら踵を返し、現場を後にするように歩き出した。

「さ、依頼を完了した今、長居は無用よ。——探偵たるもの、済んだ事件に用は無し。今の我々に求められていることは、一刻でも早い事務所への帰還のみ。そして、困り事を抱えた次なる女性を、一人でも多く助けにいきましょう」

「あ、はい。わかりました。——ですが、なんかこう、ちよつとモヤモヤしますね」

前を往く葉山ユノの背に、柏島歓喜は眉をひそめながら続けていく。

「事件を解決したのは間違いなくユノさんであるはずなのに、世間からするとこれはユノさんの手柄ではなく、JUNOという通りすがりの救世主の大手柄になっているという実態が、こう、正体を知る身近な人間からすると、ユノさんの功績と見合っていないというか、本来ならばユノさんが讃えられる場面であるのに、当の本人が目の前にいるというのに誰も気が付かないという現実には、俺が寂しく思えてしまいますよ」

「それこそ無用な考えよ、柏島くん。私自身は別に、目立ちたくて人前に現れているわけではないし、ましてや、世界を救うために戦っているわけでもない。私はただ、困っている女性から請け負った依頼の解決に励むだけの、ごく一般的な私立の探偵にすぎないわ。その解決手段として私は、葉山ユノとしての姿と、JUNOとしての姿を使い分けている、ただそれだけなの」

「……ユノさんは本当に、自分の世界を大切にしている方ですよね」
苦笑しながら、彼女の信条に納得を示す彼。それに対しても葉山ユノは「ふふつ」と軽い笑みを零していくと、そんな二人の下へと駆け付けてきた一人の女性が、こう呼び止めてきたのだ。

「葉山さん!! この度は、どうも、本当に、ありがとうございます!!」
振り返る二人。

そこでは、頭部に巻いた白い包帯が目立つ依頼主の女性が、息を切らしながら近付いてくる姿がうかがえた。

服からはみ出てちらついている、腹部の包帯。そこには赤黒い染みが広がっていて、痛々しい生傷が完全に治癒していないことを暗示する。

「ユノさん、あの方——って、ちよつと、依頼主さん! 超人協会の集中治療室に向かったハズじゃ……!!」

「ご心配をおかけしてごめんなさい! でも、どうしても葉山さんと

柏島さんに個人でお礼をお伝えしたくて、人目を盗んで追い掛けてき
ちやいました……っ！」

二人の下へと到着すると、息を切らして立ち止まる依頼主の女性。
彼女を労わるように柏島歓喜が支えていくと、息を整える間もなく女
性は葉山ユノへとそれを話し掛ける――

「ハア、ハア……！ そのっ、妹の仇を討ってくださいって、本当にあり
がとうございました……。犯人こそはバラバラに消し飛んでしま
いましたが、普通に捕らえられるよりもきつと、そっちの方が妹も心残
りはないと考えると思います……！」

「ええ、今回の件は妹さん以外にも、少なからずの犠牲や被害をもたら
す凄惨な事件になってしまったけれど、結果としてはなんとか終息に
向かっているようで、ひとまずは区切りがついたと考えられるかもし
れないわね。……ただ、ごめんなさい。多額の契約金を支払ってもら
いながらも、私自身は貴女がたに吉報を届けることはできなかつた――
――」

「そんなことはありません！ だって――葉山さんがJUNOなん
ですよ？！」

え？

思わず目を丸くした葉山ユノ。

「私は――」

「柏島さんが駆け付けてくれた時の、雑木林で助けてくださったあの
時。わたしは朦朧とした意識の中で、モンスターをあつという間に倒
してしまふ葉山さんの姿を目撃しました。それから、中継で流れてい
たJUNOの戦いを見て、確信したんです……！」

柏島歓喜の支えに甘えつつ、歩みを進めて葉山ユノに近づく女性。
「妹の仇を討つだけじゃなく、残ったわたしとわたしの親族、それと、
龍明の危機を救ってくださいった。――契約金だけでは支払い切れな
いほどの感謝の気持ち、わたしをここまで駆り立てたのです！」

「いえ、私はただ……」

「なんてお礼をすればいいのかが分からなくて。でも、そんな感謝の
気持ちとはまた別に、わたし……」

瞳に浮かぶ小さな雫と、赤面を隠すように俯きかける女性の様子。
「……流浪の救世主JUNOと、葉山ユノさんのファンになっちゃいました……。今、そんなご本人が目の前にいらっしやるというのに、今も伝えたくて伝えたくて仕方のない感謝の気持ち伝えきれずにここで別れてしまったら、それこそ別の後悔が永遠にわたしに付き纏うと思うのです……!」

葉山ユノの手をとる女性。それを受けて葉山ユノもまた女性を両腕で包み込むように支えていくと、柏島歓喜は音を立てない足取りで少し距離を取りつつ、見守るように眺めていく。

「……葉山さん。わたしのこの気持ち、一体どのようにお伝えすれば葉山さんに届きますか……?」

朝日がゆつくりと射し込む空間。

次第と明けてきた世界に照らされるよう、二人はもつと身を寄せた……。

「……その決断こそが、貴女に永遠の後悔をもたらすことになるけれども。——それでも同じセリフを口にすることは、できる?」

「はい、できます。わたしは葉山さんに感謝しております。親族一同、葉山さんとJUNOに、永遠の感謝を……!」

「いいわ。それじゃあ貴女の気持ちを、誠心誠意受け止めてあげる——」

——触れ合う唇。

優しく回した両手は、女性の後頭部と背中にあてがわれていく。

……早朝に甘く響かせた、温もりと気持ちが混じり合う音。

気分が高揚してくると、二人は熱が入ったように頬を火照らせて、一層と深く味わうような熱いキスを交わし始めるのだ。

——扱いに慣れたアプローチ。それが唇にも伝わり、女性は抱きしめられる。

もう、戻れない。『彼女』という存在を知ってしまったから。滾る熱情が瞬間を求め、それでいて、この瞬間がずっと続けばいいとさえ願ってしまう……。

抱きしめられて、わずかに浮き上がった身体。地面から離れる足元

の感覚が、*「彼女」*の荒々しさと共存する特別な温もりに拍車を掛けていく。

ゆつくりと、名残惜しく離れる唇。朝日でチラつく絡まった糸が二人を繋いでいく中で、葉山ユノは恍惚とした表情を見せながら、女性への抱擁を優しく解き始めた。

「今は、怪我の治療に専念しなさい。そして、環境と気持ちの整理がついた時にでもいいから、私に連絡を寄越して。——貴女が私を求めぬのなら、私もまた、貴女に尽くしてみせる。次に会う時は、より親密な関係を築けるよう、様々な手配を進めてあげるから」

頭を撫で、ぎゅっと優しく抱きしめる。

それに対し、女性は「はい……」と答えながら目を閉ざしていくと、この一時を味わうべく彼女の胸元に収まり、しばらくもの安堵に心を休めていった——

『「貴女に、永遠の後悔をもたらす」。確かに、わたしには、永遠の後悔が付き纏い始めました。——葉山さん。貴女に会えない寂しさという、貴女の温もりを知ってしまったが故の後悔が……」

二人の背を見送る女性。胸に手を当て、今も鳴り響く鼓動にそのようなことを呟っていく。

——先を往く彼女の満足そうな背中を見て、助手である彼は先ほどまでのモヤモヤを感じさせない明るい表情でそれを口にしていった。

「色々とおつたりして、契約金という謝礼も貰ったりしましたけど、最後の最後に受け取ったお礼の気持ちこそが、ユノさんにとってが一番の報酬だったのかもしれないね」

「それ以上もの推測は、利益を生まないわ。非常に残念だけれども、今の発言で、柏島くんには推理のセンスが無いことが証明されてしまったようね」

「あはは。俺は飽くまで、葉山探偵事務所に勤めるしがない雑用係ですから。——だから、これでいいんです。俺としてもですね、ユノさんが少しでも報われたような気がして、今はスッキリした気持ち

でいるんですから」

明るい調子でそう言う柏島歡喜に、葉山ユノは微笑を浮かべながらその歩を進めていくのだった。

「アア、もつたいない……もつたいない……。私の尊き命が散りゆく
なんぞ、実にもつたいない、もつたいない……。この、我にはもつた
いないほどの礼は必ずと返してみせるさ。だから、JUNOジュノよ。これ
ほどまでに感じたこともない、我にはもつたいないほどのこの怒りの
礼は、いずれ、必ず、形にして返してやるぞオ——」

1章2節

色欲の怪物と最上位ヒーロー【4633文字】※お色気シーン有

深夜の路地裏に響かせた、粘つくように絡み合う唾液の音。

酒に酔い、浮つく感情に脳が支配されたその手つきで、その男は抱きしめる女性の衣類を脱がし始めた。

男もまた下半身を露出していくと、唇同士に触れ合いでは満足できない本能に身を任せるように、女性を壁に押し付けていく。

向き合う姿勢。ちょうどいい台に乗せられた女性の身体。

彼女もまた、男を抱きしめた。……両腕に力を加え、その男らしい身体を堪能するように、自身の肌を密着させながら。

熱い抱擁。甘える彼女に高鳴る高揚で、男は求めてくる女性に抱き寄せられていく。

力強く、相手の熱を欲するようなアプローチ。この力は次第とさらに強まっていき、女性は両脚も絡めるようにしながら、男性に引っ付き始めた。

——みしっ。バキ、バキバキッ。

その時にも、男の内部が破壊される音を響かせながら——

「ぐえ、うエ——!? おまえ、まさか」

「温かい。温かい。……人というのは、どうしてこんなにも温かいのだろう。癖になるようなこの温もりを感じると、心臓が跳ねるように強く弾けだして、身体が熱くなってくる。そう、身体の芯から、じわじわと、ぞくぞくと迫ってくるような、もどかしく、焦がされるようなこの感覚。——ああ。ああ!!!」

ナメクジのような質感の、深いピンク色の肌。ベージュ色だった全身をそれに変色させながら締め付けていくと、次の瞬間にも、男は弾け飛ぶようにして、その原型を失った——

「ああ、おかえりなさいユノさん。随分と遅いご帰宅でしたけど、何かありました?」

朝の龍明。ニュース番組がヒーロー特集を放送するナレーションが流れてくる、至って平穩な探偵事務所の空間。

ピンク色のエプロンが似合う柏島歡喜は、完成したグラタンを脇に置きながら、玄関から歩いてきた葉山ユノへとそれを訊ね掛けていった。

これを受けて彼女は、ぼさぼさにした髪を搔きながら、凜々しい様で答えていく。

「昨夜、バーで意気投合した女の子と夜通しで遊んで、さっき彼女を駅まで送り届けてきたの」

「バーで、女の子と、ですか。……ああ、そういうことか」

ピンと来たように、彼は続けていく。

「ろくに眠れてもいないんじゃないですか? 朝食は用意できていますけど、先にシャワーを浴びてから朝食にします? —— 昼には依頼主の方が事務所を訪ねてきますから、それまでに仮眠もとれるといいですね」

「あ、いいえ、睡眠は十分に取れているわ。それに、シャワーも既に済ませてあるから」

「え? —— あ、ああ、そういうことか……」

察しがついてから、彼はどこか気まずそうに視線を外していった。その間にも彼女は、ライダースジャケットのアウトターと赤色のシャツを脱ぎ捨てるようにテーブルへ置いていく。そうして、勝負の日に似合いな黒色のインナーのみの上半身となると、それさえも取っ払ってテーブルにほっぺり出してから、求めるように彼へと右手を伸ばしていったのだ。

「タオルをちようだい。汗を拭くから」

「いやいやいや、そんな急に言われましても! ……まあ、取ってきてますから、待っててください」

雑用係の宿命か。彼は取ってきたタオルを彼女へと渡していき、受け取っては裸にタオルを絡みつけ、男の視線も気にすることなくそれ

を晒しながら身体を拭っていく葉山ユノ。

その間にも、柏島歓喜は脱ぎ捨てられたアウターとシャツ、インナーを回収して洗面所へと持っていった。

もはや、専業主夫である。それらも済ませて、ふうつと玄関前で佇んでいく柏島歓喜――

――ピンポーン。

と、次の時にも、彼の真横でインターホンが鳴り出したのだ。

「おわっ!? ビックリした! ……あ、ユノさん、俺が出ますから。というか、ユノさんは早く物陰に隠れて、服を着てください! そんな姿、来客に見せられませんよ!」

「来客もなにも、朝にそんな予定は無かったでしょう? だったら活動時間外ということで、居留守でいいわよ、居留守で!」

「こうして中に人がいるのに、居留守なんてできるわけないじゃないですか! ほら、早く服を着てください!」

物陰に隠れるよう、シツシツと手で催促する彼。これを受けて面倒くさそうな表情を見せる彼女だったが、肩に掛けたタオルで美乳を隠しながら、手に持った替えの衣類と共に移動する。

彼は扉を開け、来訪者と話を交わしていく。

……男同士の声が聞こえてくる。それだけでテンションがだだ下がりの葉山ユノは、裸の上から白色のシャツを適当に身に付けては、目についたグラタンへと手を伸ばしていった。

と、次の時だった――

「お、おわあッ!?! な、なんで!?!」

玄関先から響いてきた、柏島歓喜の驚愕。

手を止める葉山ユノ。

………すぐにも、普通の話し声。やり取りに違和感を覚えた彼女は、すぐにも来訪者を迎え入れたのだろう彼の姿を捉えていく。

柏島歓喜の、その後ろ。背丈が百八十三ほどの高身長なそれは、黒色のサングラスに、白色のマスクと水色のキャップ、白色のパーカーに白色のTシャツ、それと水色のジーンズというザ・無難な格好をして探偵事務所へと上がってきた。

体格からして男なのは明らかであるものの、羽のように柔らかな白色のショートヘアと、マスクやサングラスから覗く美白の肌が、既に一般人ではないオーラを漂わせている。

その顔を見ることなく、彼が美青年であることがうかがえた。

だが、連れてきた柏島歓喜が、葉山ユノへと男を紹介するように並び立つと、その空気を察してなのか男は、彼の紹介を横目にして、それらのアクセサリーを取り除いていった――

「ユノさん。えっと、紹介します。その、まあ端的に言ってしまうえば、彼は“ヒーロー”なので信頼できる方です。それも、ヒーローの中でも、龍明超人協会の最上位に君臨する、超大物の……」

小物を取り外した男。

――毛先のカールがオシャレである、羽毛のような柔らかい白色のショートヘアが特徴的な美形の青年。

黒色の瞳が潤いを保ち、少しと微笑みを見せれば王子様の風格を醸し出す。そうして素顔を晒した瞬間にも葉山ユノは若干と眉を上げ、どこかで見たことある、程度には認知度のある周知の大人気ヒーローの訪れに、彼女は意外そうな反応を示していった。

「光栄ね。こんな小さな私立の探偵事務所に、ヒーロー活動に加えてモデルや役者も兼ねるような大物が訪ねてくるだなんて」

グラタンへと伸ばしていた手が、自然と戻っていく。

朝の日常の光景。彼女が向き合う美青年はそれを目にするなり、少しばかりと申し訳なさそうにしながらセリフを口にしていった。

「突然とお邪魔してしまって、すみませんね。事前に連絡を入れるべきだったんでしょうけど、なにぶん、今朝の予定がドタキャンとなったもので。次のお仕事までそんな時間も残されていなかっただけから、今、こちらに顔を出してみようかと思いついた次第なもので」

「それで、龍明超人協会からここまでいらつしやっただと。あちらから此処まで、四百キロほどの距離があるというのに」

「ああいや、ドタキャンになったドラマ撮影の現場から来ました。とは言っても、三百キロほどの距離はありましたけどね」

「“空中を移動できる能力”は、伊達ではないということね」

手を差し伸べ、席に座るよう促す葉山ユノ。それを受けて柏島歓喜は男に椅子を勧めていくと、男はそれに甘えるよう腰かけていった。葉山ユノと柏島歓喜もそれぞれ、向かい合う形と隣に座る形で椅子に腰を掛けていく。

「それで、世間的にも有名な実力あるヒーローが、わざわざ探偵事務所へと訊ね掛ける用件というものが思いつかないのだけでも」

葉山ユノのそれに対し、男は胸ポケットから名刺を取り出しながら、それを口にする。

「あれだ。その前に、申し遅れた分の自己紹介が必要だろうか。——既にお気付きでしょうが、俺は『タイチ』という名前でヒーロー活動をやらせてもらっている、龍明超人協会所属の、まあ、それなりに順調な人生を歩ませてもらっている超人だ。本名は、『桃空^{ももぞら}太一^{たいいち}』。依頼の際に、本当の名前も必要ですよね」

男こと、桃空太一。彼から差し出された名刺を葉山ユノは受け取る中で、桃空太一は話を続けていく。

「まあ実際、今回ご依頼したい一件は、今まで俺個人で調査をしていたものだったんだが、いやはや、その道のプロに任せた方が良さそうだと気付いてね。で、ちようどよく、そちらの方面で働いていることが発覚した『知人』の下に訊ね掛けた、というのが今に至る流れなもので。——な、カツキー」

そう言うと、隣で座る柏島歓喜の肩に腕を回した桃空太一。

「いやはや、お前急になくなったもんだから心配したんだぞ？　そしたらなんだ、先日の騒動で現場に駆け付けたヒーロー仲間から、お前の姿を見たって聞いてさ。それも、美人な女探偵さんと一緒に行動してるって言うもんだから、おお、なんだなんだと思って様子を見に来たんだぞ？」

「その件については、タイチさん、ほんとすんません。俺も困惑したんですけど、怪我や失敗が多いという理由で突然解雇されちゃいました」

「確かにな。カツキーと顔を合わせる度に、お前、新しい傷を負ってたじゃん。お前は真面目すぎて、何事もそつなくこなそうとするだ

ろ。そういうところがお前の良い所でもあるけど、俺は心配にも思っていた。——カッキーに会えなくなるのは寂しく思うが、ある意味では、協会の判断も間違っていないなかったのかもしれない。じゃなければ、この職場とも出会えなかったかもしれないからな」

背を叩き、柏島歓喜との再会を喜ぶ桃空太一。それに対して柏島歓喜自身も悪く思っていないようで、どこか照れくさそうにしている。

と、旧友との再会を惜しむように、桃空太一は葉山ユノと向き合った。

「俺の親友を雇ってくれたあんたさんに、感謝をしている。——でだ。そんな探偵さんに、俺は一つの仕事を依頼したいと考えているんですけど……依頼ってもしかして、予約とか必要だったり？」

「内容によるけれども、すでにご本人が来てしまっているから、依頼を引き受けるかどうかはともかくとして、お話だけでも聞くことはできるわ」

「ああそうか。それはよかった……」

ホッとした様子を見せる桃空太一。

そんな彼は胸ポケットから一枚の写真を取り出すと、それをテーブルの上に置いて、葉山ユノへと見せていった。

「とあるモンスターを追っておりまして。でも、ワケあって超人協会は、そのモンスターの搜索が許されない状況下に置かれているんだ」「なにか問題でも？」

「被害は確かに出ている。何なら、ここ最近と似たような事件が多発している。でも、我々ヒーローはそれを搜索してはならない。なぜなら——そのモンスターは、超人協会への忖度によって守られているからだ」

写真に写る、住宅街。一見すると、人通りの少ない真昼のそれを写しているように思われるが、よくよく目を凝らしてみると、地面に転がる何か血を流す光景という、完全な理解に至らずとも衝撃的に思える様子が、しっかりと捉えられていた。

写真を目にして、葉山ユノは「この、地面のものは？」と訊ねる。

それを聞いた桃空太一は、一瞬とばかりに苦難な表情を見せながら

も、渋っついては仕方がないと言わんばかりの抑え込まれた声音でそのセリフを言い放ったのだ。

「この地に住んでいた、住民です。……言われて初めて気が付けるかと思いますが、これら全て、人であることを見分けるためのパーツを失った、元は人間だったものなんだ——」

愛を知る【3880文字】※お色気シーン有

情熱、恋情、欲情。

心臓から送り出された血液の熱が、煮え滾るように脈打つ感覚をもたらす人間の性^{さが}である。

今宵も、焼けるほどの熱を求めて路地裏を徘徊する、一人の“人間”。

赤色のドレスに身を包みながらも、焦げ茶のウェーブが可愛らしいその女性。だが、彼女の姿は路地裏には見合わぬ艶やかが特徴であり、しかし、醸し出す色欲の雰囲気^きが、一夜を共にする相手を探し求めていることをにおわせる。

人類が蔓延る、表通り。それと繋がる、建物の照明が灯りとなった細道に訪れる彼女。そこで、外構の石壁に寄り掛かる黒ずくめの大人を発見すると、女は標的を定めたかのように接近した。

脇を通り抜けようとする素振り。

だが、その肩が相手に当たってしまう。

「あ、ごめんなさいー！」

相手の気を引く女性。慣れた声音で相手へと振り向くと、その相手もまた、女へと振り向いてきた。

——灰色混じりの、白色の分厚いポニーテール。赤色のシャツがワンピースであるクールな装いの“彼女”を見て、女は想定外といった表情を見せていった。

「あつ、いや。ホントにごめんなさい。失礼しました。じゃ——」

「男の人を探しているのかしら」

来た道に戻ろうとした途中。そんなことを訊ね掛けられ、ドレスの女は焦りながらも振り返っていく。

「そ、そうね！ 男らしい体つきの、素敵なお殿方！」

「貴女の目当てはワンナイトラブ？」

女と向き直ってくる、その人物。——百七十九の背丈は、この女から見ても高身長として映えていた。

「わ、わんないと……っ？」

「そう。一夜限りの愛を育む営みのことよ」

それを口にしながら、今度は相手から女へと接近する。これを前にして、女は若干と戸惑いを見せていった。

「あ、愛？ ……愛って、あの、ぎゅっとしてくっ付くと、心臓がとっても温かく感じてくる、あの愛？」

「そうね。お互いに寄せ合った気持ちと身体を共有し合って、それらを絡め合い、求め合う行為。貴女が想像する愛もきつと、相手と何度も交わったことよって育まれたもののハズ」

女性の肩へと、そつと伸ばした相手。

……どこか火照った頬の赤み。これに、女は一步後退するような反応を見せていく。

「あ、愛は、殿方とじゃないと、育めない……」

「あら、貴女はストレートなのね。だったら、先走ってしまつてごめんなさい」

女の対応に、相手は伸ばした手を引つ込めながらセリフを続けていく。

「失礼したわ。どうもね、私はコツチ側の人間だから、貴女のような女の子としか愛を育めない性分で、つい」

「……女としか、愛を？ ——女とも、愛を……？」

「愛の形は、人それぞれってことよ。……素敵な殿方が見つかるといいわね。それじゃ」

軽く上げた手で別れを簡単に示すと、その相手は街中へと向かって歩き出す。

と、その時にも女は、こんなことを訊ね掛けたのだ。

「……女と育む愛も、ちよつと気になる。今までそんなことがなかったから、分からなかったけど。相手が女でも、あのような温かい熱を感じられるのかどうか、知ってみたい……！」

温かい。その温もりが今、欲しい。

女と向き合う相手。足を止め、直視してくる女の視線を真つ向から受け止める。

「その最初の相手が、私ということかしら。本当にそれでいい？ 二

言は無いわね？——気持ち肯定されてしまった以上は、もう、止まれないわよ。けっこう大変な仕事を請け負ってしまったて、今、溜まりに溜まっているの」

速めた足で、吸い寄せられるように女へと近付いた相手。

そして、女の肩へと伸ばされた両手が、撫でまわすように触れていく。——我慢できない。脳みそと、心臓と、下半身のそれぞれが、目の前のパートナーを求める熱で満たされ始めた彼女のアプローチ……。

「でも、後悔はさせない。今日、体験する新しい愛の形に貴女が満足できるよう、私は尽くしてみせるから……」

「女の人なのに、手の温もりが、すごく温かい……！……温かい。温かい。この熱が、もつと欲しい……！」

「行きましょう。この近くで休める場所を、私は知っているの」

女の手を取り、すぐにも路地裏から飛び出すように歩き出す相手。次にも場面は、大きなベッドが特徴的であるホテルの一室へと移った。

「部屋の中、温かい。ピンク色の床とか壁が、見ているだけでも心臓が身体をノックしてくる……」

「今の内に飲み物を飲んでおくといいわ。ほら、これをどうぞ」

相手から差し出された、青いラベルのペットボトル。それを受け取った女は言われるままに水を飲み、そして相手に促されるままベッドへと招かれる。

相手は、女の緊張を和らげるよう頭を優しく撫でかけた。その同時進行で女のドレスを脱がせると、身に付ける赤色のインナー姿でベッドに横たわらせる。

相手もまた衣類を脱いで黒色のインナー姿となっていくと、次にも色白な手で、女の全身を味わうように撫でまわし始めた。すらりと滑らかな感触が、女の気持ちを昂らせていく。

……ああ、すごい。温かい。熱い。燃え滾る。と——

相手が、女に覆い被さるように抱きしめてきた。

これまでとまるで変わらない、全身の表面から身体の芯にまで伝っ

ああ、もつと知りたい。試したい。触りたい。探りたい。撫でたい。愛でたい。舐めたい。突っ込みたい。……愛したい」

顔を近付ける相手。未だ全力を注ぐ押し潰しに一切ものの表情を変えず、むしろ、女の拘束を意に介さない前のめりの動作と共にして、
“それ”は目の前のメインデイツシュをいただき始めたのだ——

その夜、甲高い悲鳴が鳴り止まなかった。

それは甘くも切ない響きであり、かつ、人の身体が備え持つ感覚の限りが奏でる、本能の悦びにも聞き取れた。

夜遅くまで可動する、とある工場。

巨大な球体のタンクを製造する現場では、残る作業員が目の下にクマをつくりながらも働き詰める、過酷なお勤めの様子がうかがえた。皆が帰りたいとぼやくその空間。

と、次の瞬間、工場内には高らかなサイレンが鳴り響き出した。

天井の警報ランプが、赤く回転を始める光景。工場内も赤く黒く染まる視界に、現場の皆が焦りで目を覚ましていく。

「おい!! さっきの報告には、異常は何も見つからなかったと言っていただろう!!? どこで、何が起きたんだ!?!」

中年の男性が、若い男へと怒鳴るように訊ねる。だが、その男も訳が分からないまま、パニックしながらそう返していくのだ。

「い、いえ!! だって、本当に異常なんてなかったんです!! 何なら、今だって異常が何も見受けられません!! その証拠に、工場の安全管理を行うこちらの端末には、何も——」

証拠となる端末を取り出していく男。だが、その先にいたはずの中年の男性は、端末を取り出す動作の一瞬で姿を消していた。

あれ? あれ? サイレンが鳴り響く工場内。焦りに駆られるまま男は周囲を見渡していくと、ふと、足元の違和感に気が付いて、そちらを見下ろしていく——

——転がる物体。それと、目に焼き付くよう紅く広がる、大量の鮮血によって生み出された血だまりの光景……。

工場内のあちこちから響き渡る悲鳴。それと共にドサドサと倒れ込んでいく音に、男は青ざめた顔で景色を眺めていく。

見知った顔が、何者かに粉碎されたかのような、人ならざる物体となつて転がっていく様子。

現場にいる人間ひとり残らずと変貌を遂げる地獄絵図。

……帰りたい。

そう願つた男は、既に存在していなかった。

落下する端末。それが血だまりで水没する中、赤い警告を回し続けるランプは現場を照らしていく。

……もはや、警告する相手も存在しない閉鎖的な空間。可動する機械音だけが虚しくと床を伝うその中で、サイレンだけは活き活きとした不協和音を奏で続けていった――

犯人像【4138文字】

今朝の雨が、湿気となって充満する龍明。

郊外ほどではない住宅街と、時計の針が正午を迎えようと秒数を刻む空間。

遠出として、見知らぬ地域に踏み出したそれら人物。一人の男が晴れた天気にかざしていくと、波打つ雲へとぼやくように喋り出した。

「それにしても、多大な被害をもたらすようなモンスターが、超人協会への村度によって野放しにされているだなんて、ひどい話ですよね」
憂いの声音で遠くを眺める、柏島歓喜。その前を歩く葉山ユノは、凜々しく腕を組む様子を見せながら、眼差しは真つ直ぐと向けられたままだ。

柏島歓喜が続けていく。

「あれですね、タイチさんが言うには、そのモンスターはここ龍明とは異なる地域の超人協会”で、一人の天才研究者が実験を兼ねて生み出したとされる”人工モンスター””とのことですが……なんというか、人がモンスターを作り出してしまうのもそうですし、そのモンスターが被害をもたらしたという事実を、元凶である超人協会が世間に隠すだなんて……」

空へと向けていた視線を、真正面へと戻していく彼。

「同じ人類としてと言いますか、ヒーロー組織への信頼としても言いますか。地域は違えど、同じ組織に勤めていた者として、複雑な気持ちになりますよ。——今回の事件の元凶である超人協会は、龍明超人協会よりも強い権限を持っている大きな組織みたいですし、そういった上からの圧力によって、龍明超人協会も口出しできずにいる状況というのが、こう、正義とは何なのかを考えさせられますね」

苦笑。呆れとも言えるだろうか。

やれやれといった調子の柏島歓喜。だが、すぐにも彼はやり辛そうに視線を捨てていくと、それを葉山ユノの背へと戻しながら、あることを訊ね掛けていったのだ……。

「……で、モンスターと言えはなんですけど——」

ちらつ。彼は横へと視線を投げ掛ける。

響く足音が、もう一つ。彼女を先頭に歩みを進める存在は、彼に続いてもう一人の“女”という構図を生み出していた。

「どうして、ここ最近とモンスターを連れ出して歩いてるんですか。確かにユノさん好みの女性の容貌をしておりますけど、調べたかぎりではこのモンスター、“アイナ”という名前で多くの男性を惨殺してきた、制裁の対象となる存在です。そんなモンスターを同行させるなんて危険極まりないのに、どうしてこんな——」

柏島歓喜のそれに対し、隣の女ことアイナが口を出す。

「彼女の温情が無ければ、今頃はあなたの温もりも浴びていたんだから。こうして生かされていることに感謝して」

「……人殺しのモンスターが、こうして人の言葉を巧みに操れる知能を持つことに、俺は恐怖しか感じられませんよ……」

ベージュ色の肌で人を装う女に、柏島歓喜は「うへえ……」といった表情を見せていく。

と、葉山ユノが口を開いた。

「アイナが実害を及ぼすモンスターであることは、私も百の承知よ。それでも、私はこの子が気に入ったの。とてもそつてくる容貌に、私に挫けず何度も勝負を仕掛けてくる負けず嫌いな性格。抱き心地も柔らかくて興奮するし、締まりも良いから責め甲斐がある。——大丈夫よ、柏島くん。もし柏島くんや他の人に手を出したら、私への再挑戦ができなくなるって約束してあるから、少なくとも今は、この子は私以外に手を出そうとしないわ」

「バカにしないで。『ゆの』に敗れたつもりは一度だって無いし、いつか絶対にその分厚い筋肉を押し潰して、ゆのの温かい血飛沫を堪能してみせるから」

「……そういうところが、私をより掻き立ててくるの。その熱烈なアプローチに、お仕事を放棄して今からでも抱きしめたいくらい興奮する」

恍惚。横目ながらも振り返る葉山ユノは、舌なめずりを行って女を

挑発してみせた。

そこで、柏島歡喜がツツコミを入れていく。

「まあ、ユノさんが世間の常識とは異なる世界を大切にしているとして……。——知能の他に、アイナというモンスターは、ユノさんの居場所をいつでも特定できる力を持っているということも、人類にとつては脅威と言いますか……」

彼のそれに対し、女は彼の肩に寄り掛かりながら説明した。

「『あいな』はね、『物体に温かいものを付ける』ことができるから」「あ、温かいもの……う？」

「そう。あの日、ゆのと過ごした夜、あいなは温かいものをゆのにくっ付けた。その温かいものはずっと残るから、それを目印に近付けば、簡単にゆのの居場所が分かっちゃう」

「……要は、ユノさんの身体にGPSを取り込まれたようなもんか……」

知らない単語に女がハテナマークを浮かべるものの、原理を理解した柏島歡喜は余計に憂いな表情を見せていく。

「モンスターが常に横を歩いていることの恐怖って、超人には分からないんだろうなあ……」

「カッキーは本当、何処に行っても苦勞体質だねえ」

「同じ超人だからって、からかわないでくださいよタイチさん。——タイチさん？」

三人は振り向く。

後ろから、柏島歡喜の肩に腕を掛けていく男。

——桃空太一。そう名乗ってから数日は経過していただろうか。

「タイチさん、いつから……」

「すこーし前から。どーだ、俺の隠密行動は。今も現役だろう」

「タイチさんの忍び足は、忍者よりも性質タチが悪いんですって……」

してやったり。そんな表情でタイチは腕を離し、とても興味深げに突っ込んでくる。

「で、何だなんだ。そっちの女の子はモンスターか。やけに物騒なヤツとつるんでいるな、あんたさんら」

「ああ、ユノさん。どうやらアイナとはお別れの様子ですね。タイチさんは龍明超人協会の最上位ヒーロー。その実力は、ユノさ——いや、かのJUNOにも引けを取らないと俺は思っています」

葉山ユノは、タイチを見遣る。

……ほう？ 彼女の瞳の、その奥を見透かすかのように向けたタイチの視線。

じきにもタイチはモンスターを見遣っていくと、次にもニヤツと軽い笑みを浮かべたのだ。

「カツキーの買いかぶりは置いといて、生憎と俺は生粋の刹那主義なんだ。すぐ隣に殺人モンスターがいる？ ああ、結構。まあ、始末しようと思えばいつでも戦闘できる程度には仕上げてきているが、俺はヒーローであると同時にしてな、現在を楽しく生きることが信条としているものでね」

パチンツ。軽く指を鳴らしていくタイチ。

「今まで送ってきた過去の記憶や、そう遠くない内に迎えるだろう未来を想像するよりも、俺は、現在が楽しいと思えばそれでいいんだ。——人生、『面白い』って思える時間を過ごしたいもんだろう？ だから、面白いつて思える現在を俺は大切にしていきたいし、大事に、長く、噛みしめるように過ごしていきたい。……で、殺人モンスターと行動を共にするカツキーって状況の現在が正に、その、『面白い』に当て嵌まるから、今回は見逃すことにしよう、そうしよう！」

「……あれですか。それってつまるところ、俺をからかってますよね？ ——超人ってどうして、こんな変わった人達しかいないんだ……」

変人に囲まれる状況。もはや人外に挟まれている彼は、逃げるように天井の曇り空を眺めてそんなことを呟いた——

「あの、タイチさん。それで、どうしてタイチさんもここに？」

住宅街を歩く四人。雨上がりの水たまりを踏みつけながら、タイチは前を歩く葉山ユノの背中へと指を差す。

「俺としては、どうしてこの二人が『此処』に来ているのかが不思議でならなくてな。……いや、不思議じゃないか。だって、探偵さんなんだもんな」

「あの、話が見えないんですが……」

「また出たんだ。被害が」

タイチのそれに、葉山ユノは足を止めて振り返る。

「そうなのね。——それじゃあ、私の推測は間違っていないのかも」
「その察知能力、さすがはその道のプロだ。……そうなんだ。各地で起こる、忖度によつて野放しとなったモンスターによる被害が、この付近で起きている。俺はそれの調査という名目で足を運んでみたら、偶然とあんたさんらを見つけた。——葉山さん。全くもって手がかりが見つからない今回の件だが、探偵のあんたさんはどう見ている？」

タイチの訊ね掛けに、葉山ユノはこう答える。

「ここ数日における被害状況の中で、それらの場所には共通して『建物とスピーカー』が見受けられた。そこで、被害の状況と現場周辺の動向における特徴や周期を調べ上げて、次の標的とされそうな現場を予測して割り出すことができたから、現場検証も兼ねて現地に赴いてみたところ、貴方と邂逅した。つてところかしら」

「鋭いな。いや、『面白い』ぞこれは」

興味深げ。顎に手を当てながら感心するタイチ。

「俺は、この付近にある被害の現場に向かう最中だった。でも、あんたさんは此処を、次の標的として睨んでいる。つてことなんだよな？」

——じゃあもしかして、その犯人となるモンスターも、あんたさんは既に見当がついている……？」

「いいえ、全く」

キツパリと即答する葉山ユノ。

「見当はついていないし、何なら、犯人像も思い浮かばないわ。でも、それこそが、今回の犯人像なのかもしれないわね」

「?? どういうことなんだ？」

「思い浮かばない。見当がつかない。つまり、目の前に情報が無いこ

と、それこそが今回の犯人の姿なのかもしれない」

「……………走る沈黙。考え込む様子のタイチは、少ししてうかがうような目を彼女へと向けた。」

「……………『見えない』、のか」

住宅街の一角を見遣るタイチ。

……………建物が建ち並ぶ光景と、それに馴染むよう取り付けられた野外スピーカー。その口が不気味にも思えてきたタイチが息を呑み込んでいくと、その隣にいたアイナは、じつと、聞き耳を立てて『それを呟いた。』

「……………『来る』」

……………?

柏島歓喜は、女を見遣った。

と、次の瞬間、女は柏島歓喜へと抱き着いてきたのだ。

「うわっ——ユノさ、殺される」

「違う!! 今あなたに死なれると、噴き出す温かいのを浴びれなくなっちゃう!!」

女を引き剥がそうと、咄嗟に動いた葉山ユノとタイチ。

だが、直後にも叫び上げた女のセリフに、一同が戦慄を走らせることとなる——

「『来る』!! ここに!! 温かいのが噴き出るほどの『ヤバい』のが!!」

瞬間。

——伝う波動。甲高い耳鳴りが襲い来ると同時にして、住宅街は殺戮の舞台へと変貌した。

超人が持つ能力【2233文字】

「来る!! ここに!! 温かいのが噴き出るほどの“ヤバい”のが!!」

住宅街の中。柏島歓喜に抱き着いた女アイナが、それを叫び上げる。

——次にも空間に迸った、大地の表面を伝う波動。同時に街中へと奏でるサイレンが鳴り響き始めると、甲高い耳鳴りを連れて訪れた“それ”を受け、葉山ユノ、柏島歓喜、アイナ、桃空太一の四名が神経を研ぎ澄ました。

元凶を見遣るタイチ。すぐにも目についたのは、不気味に口を開く街中のスピーカー。

目に見える波動が四人の表面を伝っていくと、その直後にも柏島歓喜は声にならない音を響かせた——

「お、ボえっ」

吐血。それも吐き出すではなく、噴き出す血飛沫。

飛び出しそうな目玉で、突如と血をぶちまける彼。その様子で危機を察したタイチがスピーカーを見遣ると、即座に右手をかざしながら“超人の能力”を繰り出していく。

手の皮が、鋭利な刃を象る。そして瞬間にも、それは無数の氷柱のような形となって発出されたのだ。

スピーカーを容易く貫く攻撃。破壊と共に波動を放つ元凶を絶つたことで、柏島歓喜はアイナに支えられる形でうなだれていく。

だが、直にも周囲から響き出した悲鳴に、四人は阿鼻叫喚の光景を目撃することとなった。

……人だったもの”。

柏島歓喜のような症状を訴える人々が、次々と粉碎されていく光景。

護るには、出遅れた。いや、自身の傍にいる人間を護ることで精一杯な状況だった。

目についた、女の子連れの母親。その二人もまた血を噴き出してい

く中で、タイチは広げた両腕から大量の刃を放ち始めた。

その刃は、翼の如く波状の連なりを成し、街中のいたる箇所に取り付けられたスピーカーを避けるように広がっていく。そして瞬く間に街中を刃の防壁で覆い囲んでいくと、途端にして症状が止まった人々がパニックを起こしていくのだ。

タイチの能力を見て、葉山ユノはセリフを口にする。

「自身の体温から刃を生成する能力——貴方と邂逅できたことに、運命すらも感じてしまえるわね」

うなだれる柏島歡喜へと近付く葉山ユノ。タイチはそちらを彼女に任せ、生成した刃越しから周囲の気配を探っていく。

……今も響くサイレン。スピーカーから放たれる波動を、刃が跳ね返す現状。

直にして、タイチは一つの結論へと至ることとなった——

「——音、か。『ヤツ』の正体は……音だ……ッ!!」

刃の防壁が牙を剥く。外周のスピーカーに向かって発出された刃の数々は、周辺の機器をすべて破壊して窮地を凌いでいく。

すぐにもタイチは刃の防壁を解除すると、駆け出しながらそれを口にした。

「この一帯が危ない!! 俺はここらの音響機器を破壊して回るから、あんたさんらは避難と誘導を頼むッ!!」

彼の足元から生える刃。彼の先を往くその上を滑るように移動を開始したタイチは、次にも地面の刃を浮き上がらせ、空間に刃の道を生成していく。体勢もスケートボードに乗るような格好となると、パキパキと音を立てながら空中に刃を走らせ、その上を彼は高速で移動し始めたのだ。

移動しながらも、『自身の体温から生成した刃』を周囲へと巡らせるタイチの姿。街中の音響機器を破壊する彼の背を後にして、アイナと葉山ユノに支えられる柏島歡喜も、血の塊を噛みながらそれを喋り出す。

「ユノ、さん。行って、くださ、いッ!!」

「いいえ、ヒーローの彼が出向いてくれた以上、私が出る幕は無いわ」

「あり、ますッ!! タイチさんだけ、じゃ、危険だ……!!」

柏島歡喜が腕を突き出し、葉山ユノの肩をどついて距離を離している。

「ここにいる、みんなが、JUNO^{ジュノ}を、待っています……ッ!! ——この場合は、俺に任せて、ください。ですから、ユノさんは、どうか、ここに住む、女性の方々や、一般市民の皆さん、のこと。それと、勇敢に立ち向かう、タイチさんというヒーローを、助けに行つて、ください……ッ!!」

訴え掛ける、彼の瞳。それを受けて葉山ユノは若干と渋る表情を見せたが、ふと聞こえてきた会話に、意識が向けられていく。

それは、先ほどの子供連れの母親。自身も重傷を負いながらも、血を噴き出して倒れた女の子を抱えながら、涙ながらに叫び上げる様子

「血が止まらない——血が止まらない……!! 誰か、この子の出血を止めてくださいッ!! このままじゃあ死んじやいます……!! この子の弟も、モンスターに襲われてこんなに血を流しながら死んでしまったんですッ!! だからどうか、お願いしますどうか……!! 誰か、助けて、誰かこの子を助けてください……ッ!!」

空虚へと溶けていく言葉。周囲の人々も自分で精いっぱいなことから、彼女の言葉を跳ね除けながら各々と救いを求めていく。

……葉山ユノは、そう時間をかけなかった。

タイチに続くよう、駆け出していく彼女。そして常人ならざる跳躍で地面を蹴つていくと、その姿は一瞬にしてくらましていった。

と、柏島歡喜を支えていたアイナは、彼を手放してドカツと落としながら走り出していく——

「ゆの!! あいなも行く!!」

彼女に付与した、温もりのGPS。その付与した“温かい”を追跡することで、葉山ユノという標的の位置を把握できる、アイナの能力。姿をくらました彼女を追って、アイナもまたどこかへと走り去ってしまった。そんな彼女らの背中を柏島歡喜は見送るなり、重傷を負った身で力を振り絞りながら、何とか立ち上がるなりそのセリフを呟い

ていった。

「……………どうか、お願いします。この龍明を、守ってください。タイチさん、ユノさん……………！」

温もりを帯びたGPS【4192文字】

龍明に無差別な虐殺をもたらす人工生命体。権力を持つ超人協会への忖度によって野放しとなった“それ”は、今日も新鮮な殺戮を求めて空間を漂う。

現に、一帯の地域を血の海で染め上げていた。

殺戮を厭わない行動。それこそが本能とも言える姿無き元凶は、次の時にも、“鋭利な殺意”を向けられたことで戦闘態勢へと移行する

「そこだろう？」

気配を殺した存在感。察知することのできなかつた背後の“彼”に、“それ”は咄嗟に透明な回避行動を行っていく。

自身がいた場所を通り過ぎる、無数の刀身。“それ”が攻撃を仕掛けた張本人を捉えていくと、次にも“それ”の視界には、生成する刃の上を滑る形で空中まで追ってきた、異能力使いの男が映し出された。

——毛先のカールがオシャレである、羽毛のような柔らかい白色のシヨートヘア。黒色の瞳が潤いを保つ中で、襟のある真白のシャツと、真白のボトムス、そして着物のようなボリユームを誇る、丈の長い白色と青色のアウトターを羽織る、一人の美青年。足元から生成される刃に、スケートボードの要領で滑りながら接近を図る姿が、“それ”の視界の中央で捉えられる。

刀剣の欠片を散らしながら、両腕をかざすなり刃の氷柱を伸ばして攻撃を仕掛ける彼。見えない対象の気配のみを頼りに繰り出した攻撃は、“それ”に回避を強要させる程度には精度の高いものだった。だが、“それ”が波動を放ち始めたその瞬間。彼は身の危険を察知するなり自身の手前に刃の束を集中させる。

ほぼ同時にして繰り出された、人体を破壊する音波の波動。目に見えて大気を伝うそれを間近で受けた彼は、鉄製の壁を介しながらも、退散と言わんばかりに波動の衝撃に乗って地上へと落とされていく。

着地し、地面を転がって体勢を立て直す彼。そうして顔を上げた、

その瞬間だった。

視界いっぱい広がる波紋。——いや、空間の歪みだと認識するそれこそが、姿の見えない敵の本体とも言えた。

「つと、ヤバいなこれは」

『面白い』。身の危険によぎった、不敵な笑み。

クロスさせた腕でガードしようとした時にも、一つの拳が上空から打ち付けられる。まるで隕石が衝突してきたかのような、この世の終わりのような衝撃が割って入ってくると、眼前の衝撃にビクともしない彼はすぐに腕を退けて、前方の光景へとその口を開いていったのだ。

「……どうしたどうした。おいおい、何だなんだ。殺るか殺られるかの瀬戸際の、とても面白い場面で豪快な乱入をかましてくれたな」

でも、それもまた『面白い』。

ニヤリと笑みを見せた彼の前方。立ち上がる砂煙から姿を現したのは、気分屋として世間に知れ渡る紅の暴風。

「心からの敬意と共に、俺からはこの言葉を送らせてもらいたい。——光荣だぜ、超人『JUNO』。ヒーローという身である以上は、あんたさんの噂はかねがねと耳にしているものさ」

紅が光る、漆黒の仮面。素顔を隠した白髪ポニーテールの英雄は、彼の言葉に耳を貸すことなく脅威へと拳を繰り出していく。

砂煙に混じるよう、迫っていた透明の『それ』。だが、紅もまた気配でその居場所を想定すると、回避行動を強要させる正確な渾身の一撃で、『それ』を退けていくのだ。

「寡黙なJUNOと連携を取れだなんて、どうやら俺は、この場の運命が用意してくれた、本物のヒーローであるかどうかが問われるザ・ヒーロー検定に試されているらしい。——なに、あんたさんのルールを変えろだなんて俺は言わない。それでいて、あんたさんは他のヒーローとの共闘なんて望んでいやしないだろ？ だから、こいつは飽くまで俺の独り言さ。そう、一方的に、あんたさんへと色々くつちやべっていくぜ。そんなもんだから、聞くか聞かないかは、あんたさん次第だ」

怒涛の攻撃。透明でありながらも、“それ”の身体の一部と思われる伸縮自在の槍が、二人に襲い来る。

それらを受け流し、反撃として刃や拳を交差させていく二人の姿。攻防一体とも言える優劣が定まらない戦況を展開する空間にて、英雄と名高い二つの希望が今、背中合わせとなつて佇んだ。

「まず、“ヤツ”の正体は音だ。音という波状の姿を成していて、それを攻撃にも運用できる素晴らしいお体の持ち主だ。そんなもんだから、おそらく物理攻撃は効かないだろ。つまり、この時点で俺の刃やあんたさんの拳は“ヤツ”に通らない。現時点で、我々は詰んでい

る」

生き残りのスピーカーから響き渡るサイレン。それにすぐ反応した彼は、腕から刃を伸ばして瞬く間に破壊していく。

「あと、どうやら“ヤツ”は、“音に反応する”らしい。俺が音もなく接近してみたところ、“ヤツ”は見向きもしなかった。だが、試しに音を出しながら攻撃を仕掛けてみたところ、“ヤツ”は真つ先とこちらを察知した。だから、敢えて呟いてみたりもした。そしたら、呟いた地点に向かつて、“ヤツ”は接近してきた。尤も、その直後にあんたさんが隕石みたいに降ってきたワケだが」

物理攻撃が通らない。その性質から、二人は一切もの反撃を“それに食らわせられずにいた。”

その間にも、世間話をするかの如く言葉を連ねる彼。余裕さえもうかがえるサマで背中中のJUNOへと話しかける様子は、もはや、紅と会話をしてみたら面白そうという、彼の信条の片鱗を感じ取れたりする。

その間にも、中継のヘリコプターが数台と現場に現れた。遠くからカメラを向けるそれらは、二人の姿を映して遠くからリポートを始めていく。

「おいおい、何だなんだ。こんな状況でも中継が大事ってことか。今も地上には、重傷を負った市民の人々が助けを求めているっていうのにな」

慣れた光景に、ボヤクよう言葉を口にする彼。だが、すぐにも意識

を目の前へと戻しながら、そんなことを背中の中へと訊ね掛けていったのだ。

「で、どうするJUNO? 今のところ何も問題ないもんだが、こんな、姿を捉え切れない透明モンスターをずっと相手にしてられるほど、俺ら人間は丈夫なんかじゃないぜ」

彼のすぐ脇を通り抜ける、気配だけ突き出された槍のような攻撃。感覚のみで回避を行っていく彼だが、降りかかる無数の攻撃に、徐々に掠り傷を増やしていく。

紅もまた、与えられない破壊の一撃を何度も空振りしていつては、一向と変わらない戦況にただただ攻防一体を繰り返すだけだった。

——いや、紅には確かに、たった一つの勝算が見えていた。

だが、その勝算が見えていようと、相手の姿が見えない以上は迂闊に繰り返すことができない攻撃……。

この状況下において、紅だけが有する勝利の可能性。

もどかしく立ち回るばかりの、進展の無い戦況。加えて、姿無き即死攻撃が襲い来る絶体絶命の状況に、実力者である二人が苦戦を強いられる、その時だった——

「ゆの!! いた!!」

!?

思わずと振り返る彼。背中の中へまた声の主へと振り向いていくと、二人の視界には共通して、ベージュ色の肌を保つ女の姿が映し出されていた。

「騒ぎに便乗してあいなから逃げようたって無駄! ゆのは、あいなが殺す! 絶対に! 必ず! あいなは腕で、ゆのの温かいを噴き出させてやるから!!」

「お、おいおい、何だなんだ? なんかよく分からないが、アイナ! あなたさんの探すユノ——葉山さんは、生憎とここにはいないぞ!」

「は? なに言ってるの? だって、あいながゆのに付けた温かいが、その人から——」

『あと、どつやらッヤッ』は、音に反応するらしい。』

紅の脳裏によぎる、彼の声。すぐにも、お気に入りの彼女へと駆け

出そうとした、直後のことだった。

「ぐエ、ぼアっ——!？」

胴体に穴が空く、女。透明であるが故に断面が晒され、生々しい音を奏でながら女は血を噴き出していく。

……ページユ色から、ナメクジのような質感を持つピンク色へと変化した表面。貫かれた攻撃が引き抜かれると、女はどこかへと手を伸ばしながら、地面へと倒れ伏した。

剛速のダッシュで駆けつける紅。彼もまた目撃した光景と、察した空気感と共に辺り一帯の民家を刃で破壊し、豪快な物音を立てていく。

このアクションによって、“それ”の気を引いていく彼。

——時間稼ぎのつもりなのだろう。彼は、民家から地面までの広範囲で次々と破壊を繰り返し、“それ”を引き付けて空中へと刃で滑り出していく。

その間にも、倒れる女を抱き抱えた紅。……モンスターである彼女の身体を容易くぶち抜いたその威力こそが、目に見えない身体を持つ“それ”の脅威を体現していたことだろう。

「ゆ……………の……………」

人ならざる質感。……多くの男を手にかけていながらも、反撃の形で半ば強引に営み、愛が芽生えた、“彼女”にとつて少なからずの存在。

「も……………う……………わか……………ら……………ない……………。 “温かい”は……………一つにしか……………付けられない……………から……………」

呼び掛けるように、女を抱き寄せる紅。

……止まらない出血。くり貫かれるよう、ぽつかりと胴体に空いた空洞。

首を横に振る紅。だが、女は最期を悟りながらも、力を振り絞って人差し指を立てていく。

「“温かい”は……………ゆの……………に、付いて……………ない……………。——刺し違えて……………やった……………から……………!」

先にも、攻撃を受けた瞬間に、どこかへと伸ばした手。それと同じ

手であることを紅が勘付くと、抱えられた女は最後に、そのセリフを口にしていった。

「ゆのを……殺すのは……あいな……。他のヤツに……。ゆのを、殺させて……。たまるもん……。か……。!!」

——『標的』を仕留める可能性を孕んだ対象。それを確実に排除してもらおうべく施した、彼女なりの最期の抵抗。

……息を引き取ったモンスターを、紅は優しく下ろしていく。

額に触れ、ガントレット越しにピンク色の独特な質感を撫で掛けた。そして、すでに帰らぬ存在となったモンスターに暫しと無言の別れを告げていくと、紅はゆつくりと立ち上がり、戦場へと振り返っていくのだ。

「JUNO! あんたさんの出番だ!! ——お得意のぶん殴りで、見えるようになったヤツ」を木端微塵にしてくれると助かる!!」

彼の声。それが耳に届く前にも紅は、視界に捉えた“太陽のような温もりのモヤ”を見据えていた。

付与した“温かい”。GPSとしての機能を果たす彼女の置き土産は今、音という波状の身体さえも浮き彫りにさせる強いモヤとなつて、紅の視界に残り続けていた——

愛を執行【3185文字】

私の正義を執行する——

女モンスター¹の亡骸を背に、無言を貫く紅は歩き出していく。

眼前では、音の体を成した姿無き波動のモンスター²が、殺戮をもたらしている。それを食い止めるべく、自身の体温を刃へと変化させる能力を持ったヒーローの彼が奮闘するものの、物理を通さないモンスターの身体に苦戦を強いられていた。

「悪いなJUNO!! どうやら俺は、この舞台の主役になれないらしい! ——超人の頂点に立つであろう孤高の一匹狼に主役を譲らざるを得ないのも、名のあるヒーローとして燃焼し切れないやるせなさばかりが募るもんだが。ま、俺の心情なんて、龍明や人類の危機が差し迫った今、本当にどうでもいいことさ!」

今も刃と交わす、波動のような「半透明」の存在。彼が作り出した刃のすべてを透かす身体を伸縮させ、強気な突きの攻撃で彼と空中戦を繰り広げていく。

だが、彼はすでに退散の準備を整えていた。背中から生成した刃の連なりを太陽へと伸ばし、パキパキと立ち上るそれに引っ張られるように、彼の身体がどんと上へ向かい出す。

「俺は、急に「見えるようになったヤツ」とあんたさんを、此処に閉じ込める!! ——なに、安心しな。これから展開する刃の巨大ドームは、透明な材質で造り上げてみせるさ。こいつは強度を誇る鉄製の防壁でありながら、外から内部を覗くことができる特別性の刃物。そいつであんたさんと「ヤツ」だけの空間を作り出すから、JUNO! その剛腕からなる正義の執行を。その腕に宿す人類の希望を。孤高であるにも関わらず勝手に託された人類の未来を、どうか、俺らに示してくれ!!」

散らす刀身の破片。立ち上る勢いで身体を投げ出した彼は太陽を背にすると、逆光となった両腕を広げ、全身から大量の刃を噴出させていく。

瞬く間とパリパリ広がる、刃の波。それがドーム状を描くように地

上を目指していくと、着地と同時に彼を中心とした、鋭利ながらも町一つを呑み込む巨大な閉鎖空間を作り出していった。

ドームの外からは、大気を混ぜるよう回されるヘリコプターのプロペラが迫る。数機と集ったそれらから女性リポーターと男性カメラマンが身を乗り出していくと、鬼気迫る表情で現場の様子を説明し始めた。

「我々が連絡を受け、駆け付けた際には、龍明へと侵入したモンスターによる大量殺戮がすでに終わりを告げておりました!! 見渡せば真っ赤に染まる町の中。高度を保つヘリコプターの中からでも、地上の悲鳴が聞こえて参ります。もはや、惨劇と呼ぶに相応しいモンスターの侵略。それも、発展した龍明の町並みのみが綺麗に残されている光景から、ここ数日と被害が報告されていた謎の虐殺事件と関係があることを予想できます! ——犯人の正体は、紛うことなき残酷無慈悲なモンスター! そして、その悪逆非道を平然と遂行するモンスターに今、超が付く名だたる二人の英雄がまさかのタッグを組んで立ち向かっているのです!!」

……優れた聴覚を持つ紅。その聴力を以てしても、外界の音は刃に弾かれ籠る音しか拾えない。

対象を前にして、足を止めていく。——向かい合う仇。透明を保つ機能を無効化されたことよって、温もりを感じさせる太陽のような橙色のモヤをまとった「それ」が、浮き彫りとなりながら紅と対峙した。

音という正体でありながら、モヤは微かながら、首の長い四足の竜を象っている。

人工モンスター。そううかがっていた話と情報を照らし合わせた紅は、その姿が、人類が認知する生物を模していることから確信した。

……沈黙が走る空間。音をシャットアウトされた無音の町並みに残され、「それら」は互いに睨み合う形でその場に留まり続けるばかり——

——と、音波が伝った町の表面。瞬間にも伸びるモヤと共にして、伸縮する音の身体で突きの攻撃が繰り返された。

目に見える。

首と上半身を逸らし、擦れ擦れで回避する紅。突きを掴もうと空を掴まされた右手は、そのまま駆け出して拳による殴りつけへと移行する。

速い。ヒーローの彼が背にいた状況よりも、あからさまに上昇した速度。音速とも呼べる紅の接近に“それ”は対応もままならないが、繰り出された拳の一突きは空を切らせる形で、攻撃を凌いでいく。

そこから、大気を殴りつける高速の殴打が繰り出された。

大気が目に見える形で凹んでいく、柔らかいクツションを殴りつけるかのような白い窪み。透明な空間が歪な形を象り始めると、明らかにその部分だけ歪んで見える目の錯覚と共にして、紅はメの一発を“それ”へと突き出していく。

だが、“それ”は全身から強力な波動を放出した。

常人であれば、爪すらも残すことを許されない震動。これを以てして大量の生物を破壊し尽くした攻撃で、紅は足を着きながら後方へと吹き飛ばされて地面を滑っていく。

だが、すぐにも接近を試みる紅。そして空を切るばかりの豪快な空振りを何度も何度も繰り返すことで、捉え切れない透明の身体を、凝りもせず何度も何度も殴打し続けるのだ。

どんなに唯一無二の剛腕を有してしようと、その物理攻撃を透かしてしまう無敵の身体。紅の攻撃に混じって突きの反撃を繰り出していく“ヤツ”の攻撃を、紅は間近に避けながらひたすらと拳を浴びせ続けていく。

あまりにもゴリ押しすぎる。ドームの天井から見守るヒーローの彼が息を呑むと、次にも紅の大振りな殴りを見計らった“ヤツ”の、破壊の震動を乗せた渦巻く突きが紅へと放たれた――

――ここだ。

握りしめる右拳。瞬間的に、上半身を捻じっていく。

引き絞られた右腕。大気の抵抗をまといながら、遅く、重く、抉るように突き出された、流れ星の如き破壊の一手――

ぶち抜かれる、破壊の震動。渦巻く突きを真正面からぶち破った紅

の一撃は、その振動すらも無に帰す破格の攻撃で、眼前の温もり帯びたモヤを跡形も無く吹き飛ばしてしまった。

世界が、二重にも、三重にも、四重にも重なる歪んだ空間。拳の一撃は空間ごと殴り飛ばし、振り抜かれると同時に、歪んだそれが一瞬ながらと引き伸ばされる錯覚を見せていく。

重なった空間は、複数もの円柱型となつて瞬間的に同じ世界を映し出した。

——それが伸び行く先。振り抜かれた拳の一撃が発出される形で、白くも透明にも見える形容し難い衝撃波が、一点に向かつて、鋭く、空間に迸った。

パリンツ！！！！

強度を誇る刃のドームに、穴が空く。

くり貫かれた、荒々しいそれ。その衝撃が遅れて周囲の刃に伝い出すと、次の瞬間にも、ドームを象る刃の防壁は、ほぼ同時のタイミングで一気に粉碎した。

背を向ける紅。——その上空から降り注ぐ、太陽光を反射する散りな欠片の雨。

なびく真紅のコートに、遮断されていた外界の光が、破片のキラキラと共に射し込む煌びやかな空間。

粉碎と共に上空を落ちるよう身を投げ出した彼は、そんな地上の紅を目にして黒色の瞳を光らせていた。

「物理で殴れないんなら、空間ごと殴りつけて、音という概念さえも吹き飛ばしてみせるってところか？ ——何だなんだ、そりゃ。こりゃとんでもない脳筋お化けが現れたもんだな」

『面白い』。ニヤつと不敵な笑みを見せた彼は、今も視界の中央で静かに佇む紅に大いなる期待感を寄せていく。

紅は、降り注ぐ刃の破片を呆然と眺めていた。……いや、「彼女」は、この破片の先にある大空を見据えていたのかもしれない。

自分を追いかけるために与えてくれた温もりは、たった今、この手で概念さえも吹き飛ばしてしまった。だが、それとは異なる温もりが、今も、「彼女」の胸と記憶に残り続けている。

もう、触れることも叶わない柔肌。それを噛みしめるようガントレットを握り締めていくと、その手を胸の前まで持ち上げて心臓の高さに合わせていき、そして、遙か彼方の大空に向かって、「彼女」は、自分なりの愛と正義を込めた敬礼を行いながら暫しと佇んだ――

常識と正義【2374文字】

雨上がりの龍明。柔らかな陽の光をもたらす早朝の時刻にて、ひと気の無い開けた木々の空間に二つの足音が訪れる。

大都市には珍しい、自然に溢れた手つかずの大地。その入り口となる山道には『KEEP OUT』のホログラムが張られており、続けて、『モンスターに注意』となる警告の板が張り出されている。

一般的には立ち入りを禁じられた区域。龍明に侵入したモンスターが度々と息をひそめる一帯として、ヒーロー関係者の巡回以外では基本、ここは踏み入れられることのない地域として知られる場所だった。

——開けた高台。龍明の町並みを眺めることができる、見晴らしの良い環境。

建てられた墓石へと歩み寄る、一つの足音。その手には水が波打つ桶を提げており、それを墓石の上からかけていっては、目の前でしゃがんで手を合わせていく。

……風に吹かれる白髪ポニーテール。瞑っていた目を開けてゆっくりと立ち上がっていくと、その後ろで待っていた助手の男へと振り返っていった、静かにこの場を立ち去った。

「何と言いますか、ユノさんってこういうところは律儀ですよね」

高台から龍明を眺める、二人の人物。内の一人である彼はオレンジ色の瞳を朝日で光らせながら、隣で凜々しく佇んでいる彼女へと言葉を續けていく。

「先日の人工モンスターとの戦闘。あれを倒すための決め手を遺してくれたファインプレーこそは大手柄ではありましたが、そもそもとして、あのアイナというモンスターもまた同様に、既に人類に手をかけておりました。つまり、MVPとも言えるアイナも、我々にとって害を為す危険な存在であることには変わりなかったということですね。それでもなお、ユノさんはわざわざアイナのお墓を作ってあげて、こうして墓参りにも訪れている……」

吹く風に髪を揺らす、柏島歓喜と葉山ユノ。撫で掛けるような心地よいそれを受けながら、柏島歓喜は疑問といった首傾げで彼女へと訊ね掛けた。

「俺が人道を見誤ってしまったているだけなのか、それとも、ユノさんが特殊なだけなのかは分かりません。ただ、それでも俺はユノさんを不思議に思えてしまふんです。——どうして、人殺しの経歴を持つアイナというモンスターに、ユノさんは、これほどの肩入れができるのでしょうか？ アイナとは、共にいた時間もぼちぼちで、先の戦いでは人類の勝利に大きく貢献してくれました。ですが、正直な話、それでも俺はアイナに対して、吊いの気持ちを抱くことができないんです」腕を組んで佇む葉山ユノ。遠くを見つめる視線は、ゆっくりと隣の彼へと向けられていく。

「貴方は、貴方のままでいいわ」

「……と、言いますと?」

「無理に、私を理解しようとしなくてもいいの」

高台からの景色へと、数歩と近付く葉山ユノ。眺め遣る光景へと投げ掛けた視線のまま、遠くを見つめるようにセリフを続けていく。

「世間の常識を重んじることもまた、その人が成せる一種の才よ。私にはそれが欠落しているからこそ、貴方には、その常識的な観点を大事にしてもらいたいと思ってるの」

「ですが、俺はユノさんについても理解したいです。ユノさんの考えを頭で理解して、共に思考を分かち合うことができれば、こんな非力な俺でもきつと、ユノさんのお役に立てるかと思えますので」

「柏島くんは本当に真面目ね」

龍明の防壁から姿を現す、昇り始めた太陽の真ん丸。それが射し込むと同時に世界に眩い光がもたらされ、彩色豊かな自然の地域が照らされ始める。

彼女の色白の肌が、光によって鮮明な白色を彩った。健康的で、美麗で、凛々しいハリとツヤが光を反射する。

——この、惨くも荒く、そして残酷かつ熾烈な世界が産み落とした、奇跡的な容姿を象る一つの存在。もしもこの世に神が存在するので

あれば、彼女はきつと、“女神”の生まれ変わりであるだろうと確信
さえしてしまえる、容姿と実力が伴った奇跡の超人……。

「私には、私なりの正義があるわ。でも、この正義は決して、世間が常識とする考えに基づくものではない。——自分自身、それを理解している。だからこそ、割り切ることができるの。……私という存在は、世間に相容れることはないイレギュラーで異端なものであるということ。」

「……………」

「私の考えや行動に理解を示す人間は、ほぼ皆無でしょうね。でも、それでいいの。現に、私は今もこうして存在している。そうして世間や私が存在する以上、世間には世間の常識と正義が存在していて、私には私なりの常識と正義が存在している。ただそれだけのことよ」

視線が絡み合う二人。次にも穏やかな笑みを見せてきた葉山ユノのそれに、柏島歓喜は若干と納得するように軽く頷いていった。

「……そうでした。俺自身、何度も口にかけていることでしたね。——
ユノさんは、自分の世界を何よりも大切にしている方だ、って」
と、彼は少し寂しそうにそんなことも口にした。

「俺は多分、この先もユノさんという人物を理解することはできない
んでしょうね」

「お互い様よ、柏島くん。私にとっても、“貴方達”を理解することは
難しいのですもの」

シリアスな雰囲気。だが、穏やかな陽の光がお互いに諦観混じりの
笑みを浮かばせていくと、葉山ユノの「探偵事務所に戻りましょうか」
という言葉と共に、二人は納得し合いながらこの場を後にしたので
あった——

「歴代の最高傑作が、いとも容易く粉碎されてしまった。この結果に、
人類にもまだまだ繁栄の余地ありと胸をなで下ろしたものだが、同時
にして、試作品を試す機会に多大なりスクが付き纏うようになってし

まった。……JUNOという存在は、この先の実験において甚大な危険因子となることだろう。……やはり、信じられるのは己が頭脳と手腕のみ。だから、許せJUNO。これも全ては我が研究のため。そして……人類が、滅びの運命に打ち勝つためなのだ——」

1章3節

死人と同義【2585文字】※お色気シーン有

人体を貫通し、臓物が音を立てる不愉快なそれ。

月明りが雲に遮られた大都市の中。廃墟の工場に蠢く影がうねりを描いていくと、ドサツと落ちた人体の惨劇に、周囲の若い声が恐怖の悲鳴を上げた。

描写することは許されない。なぜなら、この物語において不適切な損壊を負っていたからだ。ただ、顔という部位が機能しなくなつた一人の男子高校生の姿を見て、制服姿の女子生徒二名と、男子生徒一名が、砕けた腰で慄きながら後退っていく。

—— 廃れた鉄の臭いに、新鮮な鉄分が混じる。

蠢く影の後ろにできた、十数名ほどの死体の山。その全てが同じ制服を着用する地獄絵図であり、それを演出する知能を持つことを証明する、胸糞悪さを孕んだ光景が広がる。

始末した男子生徒を、蠢く影で拾い上げて山のとつぺんに投げ遣つていく。

……そして、身に纏つた液状の触手を残る三名へと向けながら、顔が腫れ上がったその男子生徒は呟くようにそのセリフを口にしていった。

「みんなもさ、つまらないって思ったことある？ 生きててつまらないって意味での、つまらない。そうだよ。だってみんなには生まれもつての才能とかあるし、やること全てが上手くいく人生の勝ち組なんだからさ。だから、何をやってもダメで、やること全部うまくいかない俺の気持ちなんか分かりやしないよね？ ……一言で言えばね。俺の後ろにある死体のようなものだ。何をやっても上手くいかない人間はね、つまり死人と同じってことなんだ。生きながら、死んでいる。それが、俺のような上手くいかない人間の特徴なのさ——」

——同時刻。

大都市の路地裏に響かせた、唇を重ね合わせる熱烈な唾液の音。激しくも気持ちの良い快樂に身を任せる二つの人影は、片方が片方に責め立てられる形で事が進んでいた。

高校の制服姿で、路地裏の石壁に押し付けられる女子生徒。その少女が身を委ねる相手もまた、黒色のライダーズジャケットとバイクパンツに身を包んだ、白髪のパニーテールが特徴的な大人の美女だった。

女性の左手は、女子生徒の右手に絡まりながら壁に押し付ける。その口で生徒の口を優しく塞ぎ、その少女の股座辺りで蠢く右手の影が、緩急をつけた手慣れのリズムを描写する。

恍惚な表情。共に頬を赤く染めていく中で、女性は背徳感による高揚で一層と息を荒げながら、目の前の若々しい唇を堪能し続けた。

そんな彼女に一方的と快樂を押し付けられる少女もまた、満更でもないサマで彼女に応えていく。すると、直にして段々と大きくする声を上げながら、蠢く影によって少女は痙攣を引き起こした。

二人の足元にできた水溜まり。そのまま少女が碎けるようにへなへたと体勢を崩していくと、女性はそれを優しく抱き留めるなり、凜々しく、たくましい、中性的な王子様のような表情と共に、繊細な芸術品を扱うかの如く少女をゆつくりと抱き寄せた……。

——カシヤツ!! パシヤ、パシヤ!!
シヤツターを切る音。

向けられる懐中電灯の光。それを受けて女性は視線を投げ掛けると、その先で、不敵な笑みを浮かべる男女の高校生の集団が歩み寄る光景を目にした。

チャラい雰囲気醸し出す男子生徒が、ニヤけた調子でそれを口にする。

「おねえさーん。お楽しみのところごめんねー。——つて、うわ。すげえ美人……。あ……」

急にどもる男子生徒。チャラチャラとしたサマで口ごもるその様子に、隣の女子生徒がからかい気味にそのセリフをしゃべり出す。

「え、なに？　そういうので緊張するタイプ？　ウケるんですけど」
その女子生徒もイケイケな様子で女性に歩み寄ると、彼女が抱いている女子生徒の襟を掴んで引き剥がしながら、続けてそんなことを口にし始めたのだ。

「あーあ、だいぶメチャクチャにされちゃって。ウチらの女にナニしてくれちゃってんのー？　ねえ？　ってかさ、あれー？　おねえさんって、大人なんでしょ？　大の大人がさ、こんな未成年を襲っちゃってイイわけー??　ねえ、そこんところどうなの？　悪いよねえ？　良くないよねえ？　これ知られちゃったらさ、おねえさんどうなっちゃうのかなあ？　社会的に死んじゃって、色々困っちゃうんじゃないのー??」

仕組まれた罠。

脅迫と共に女性を取り囲んでいく男女の生徒達。その手にはカメラを起動させたスマートフォンが握られている他、鉄パイプやナイフといった、物騒な代物までもがうかがえる。

「証拠もホラ、ここに収めちゃったし。だから、言い逃れはできないよ??　ウチらの女に手を出したその償いとしてさあ、ほら、誠意ってモンを見せてもらわないとだよねえ？　とりあえずさ、ウチらのアジトに同行してもらおうと思ってるんだけど？　まさか、断りなんかしないよね??　ね？」

と、先ほどまで女性と及んでいた女子生徒が一人の男子に引つ張られると、その男子は女子生徒に間髪容れないキスを決め、抱き寄せて肩を叩きながら、道の奥へと引き戻してしまう。

——イラッ。

あからさまに嫌な顔を見せた女性。そしてすぐにも背後の女子生徒に背中をどつかれると、女性はそれに従うように歩き出した。

集団に脅され、従う他ない状況下の大人。絵面からして、女性の身に降りかかる未来は容易く想像できることだろう。

女性の後ろを歩く男子生徒の数々が、声をひそめながらそんなことを打算する。

「なあ、なんか今回の、すげえ美人じゃん。あんなの、絶対キモチイ

「イって」

「今までの中でも、特上だよな。下手すりゃ、あれ以上のなんていないだろ」

「通りすがっただけでイイ匂いしたぜ。ありや締まりイイよ。何なら首輪付けてアジトで飼いたいくらいだわ」

「いや、さすがにそこまでは……あるか」

下劣な会話。女性の耳にも届く、不愉快極まりない性根の腐った内容。だが、一方として彼女はと言うと、目の前を歩く数名の女子生徒にばかり意識が向かっていた。

制服姿で、若々しさをアピールするそれら。チャラく、歪んだ性格が年齢の魅力さえも激減させているものの、女性は脅迫されている状況下においてもなお、下腹部に覚えた疼きでその視線は釘付けとなっていたものだ。

……胸が高鳴り、上半身に響き始めた女性の鼓動。

晩餐会はこれからか。獣のような本性を冷静さで隠し通す、端麗なサマで歩みを進めるその姿。しかし、周囲が逸らした視線の、自身への監視が絶たれた一瞬ばかりの気配を悟るなり、女性は緩んだ自制から、待ち遠しく思うばかりの舌なめずりを見せていった――

ローリスク・ハイリターン【3649文字】

通勤ラッシュを迎えた、朝の龍明。探偵事務所前の道路が車で渋滞する光景と、そんな様子を他所にして朝食を完成させた柏島歓喜は、鍋に溢れんばかりと煮え滾る具沢山のミネストローネを小皿で味見していく。

「よし、こんなもんか。ユノさんはああ見えて大食いだし、正直これで足りるかどうかは分からないけど……少なくとも、味はたぶんユノさん好みのかなり濃いトマトスープになっただろうし。我ながら、九十点ってところかな」

ピンク色のエプロンが相変わらず似合う柏島歓喜。外から鳴り響くクラクションにも一切と気に留めないまま、彼は二人分の器にミネストローネを移してテーブルに乗せていく。

その間にも、テレビからは朝のニュース番組が流れていた。それへと向けた意識と視点が、液晶に映る一つの映像を捉えていく。

先日にも猛威を振るった、音の姿を象る透明モンスターとの戦闘。中継のカメラから切り抜かれたその映像には、龍明超人協会が誇る最上位ヒーローの美青年『タイチ』と、流浪の救世主としてその素性を隠した謎の英雄『JUNO』の共闘の様子がうかがえる。

『それにしても、我々が想定し得ない奇跡のコラボを、彼らは見せつけてくれました！ 姿も捉え切れない無敵のモンスターに立ち向かったのは、『千刃鶴』の異名で知られる、我らが龍明のスーパーヒーロー・タイチと、『孤高の戦士』や、『紅の暴風』、『血濡れの一匹狼』や、『流浪の救世主』といった、様々な異名が名付けられる異例のフリーランスヒーロー・JUNOの最強超人タッグ！ 前々からも、この二人が共にモンスターへと立ち向かう様子を描いた応援イラストなんか番組に送られてきたものではありますが、まさか、そのコラボレーションが実現する日が来るだなんて、いやあ、想定し得ないサプライズでありましたね！』

興奮冷めやらない。そんなサマで語る番組の出演者達を、柏島歓喜は眺め遣った。

……すぐにも、事務机に脚を乗せながら、ご機嫌よく鼻歌を奏でる葉山ユノへと視線を投げ掛けたものだが――

「ユノさん。ユノさん。ご飯が完成しましたよー」

声を掛ける柏島歓喜。だが、彼の声は彼女に届かない。

赤と黒のヘッドフォンを装着している葉山ユノ。スマートフォンから好きな曲を聴きながら鼻歌でハモる彼女だが、その鼻歌はサラサラと透き通る心地良さを感じさせることから、耳にする周囲の人間は煩わしさどころか聞き惚れてしまうことだろう。

柏島歓喜の手を振るサインで気が付いた彼女。それを受けて、葉山ユノはヘッドフォンを外しながら立ち上がった。

「あら、とてもイイ匂い。煮込んだトマトの熟れたような香り。私、大好き」

「ユノさんって、トマトやリンゴが大好きですよね。赤色の果物や野菜、あと赤身のお肉やお刺身なんかも。……ああどうぞ、こちらに用意してありますから」

テレビの音量を下げていく柏島歓喜。その脇で葉山ユノはいつもの席に着いて、ミネストローネに手を合わせていった。

柏島歓喜も彼女と向かい合うよう席に腰を掛けていくと、それにしてもやけに上機嫌な葉山ユノの様子にそれを訊ね掛けていく。

「随分と気分が良いみたいですが、そんなに、二日ほど前の夜に良いことがあったんですか？」

「ええ、とてもイイことがあったわ。――思い出したただけでお腹がキュンキュンしてくるくらいの大豊作が、ね」

「豊作で、お腹がキュンキュン……？ 夜食か何かですか？ まあ確かに、普段口になっている食べ物でも、夜分遅くに同じものを食べると、何だかやけに美味しく感じたりしますよね」

「ええ、そうね。まったく、その通り。それも、夜遅くに食べる新鮮なディナーのフルコースは、どんなに身体に悪いと分かっているても病み付きになってしまうものよね。ウフフ……」

「?? 新鮮な食材であるのなら、あまり気になさらなくてもいいんじゃないでしょうか？ ジャンクフードとかじゃないのなら、身体に

悪そうなのは夜更かしくらいだと思いますし」

「貴方って本当に、真面目くんよね。ピュアとも言えるのかしら。フフ……」

??

なんか、話が噛み合っていない？ 不思議に思う柏島歓喜は、恍惚な表情を見せる葉山ユノに首を傾げていった。

と、気が抜けた瞬間を突くように鳴らされた、探偵事務所のインターホン——

——ピンポーン。

立ち上がる柏島歓喜。だが、そんな彼を静止するように、葉山ユノもまた立ち上がる。

「私が出るわ。柏島くんは朝食を済ませておきなさい」

「え？ いえ、俺が出ますよ」

「いいえ。貴方には今の内に、腹を満たしてもらいたいもの」

指を差す葉山ユノ。その先に置かれた柏島歓喜のミネストローネと、無意識に見比べるよう視界に映った、対面の席に置かれた空っぽの器……。

も、もう食べたんですか……。

内心で訊ね掛ける柏島歓喜。そんな彼を差し置くように玄関へと向かった葉山ユノは、開けた扉の先で待っていた三名ほどの存在を迎える。

高校の制服姿で訪れた、チャライ雰囲気醸し出す不良女子生徒達。皆がどこかもしもじとした落ち着かないサマで視線を逸らしながらも、対応する葉山ユノへとセリフを口にしていく。

「お、おねえさん。あ、朝早くにごめんなさい……。その、おねえさんに言われた通りの情報を集められるだけ集められたから、その、今ある分の報告だけしちやおつかつて、みんなで話し合つて……」

「それでわざわざ、ここまで来てくれたの？ ありがとう、可愛い子猫ちゃん達」

喋った女子生徒の顎に手を掛ける葉山ユノ。そして顎をクイツと上げていくと、恍惚な頬の赤みと中性的な王子の表情で、ゆつくりと

顔を近付けていく。

モーニング・キス。手で前髪を掻き分け、額に跳ねた彼女の唇。鳴らした音が少女らの鼓動を速めていく中で、葉山ユノは玄関でそれらの情報を記憶していった。

「よく、ここまで調べ上げてくれたわね。下手したら危険な目に遭いかねないハイリスクな私のお願いと期待に、貴女達は勇敢にも応えてくれた。そして見事、任務を成し遂げてみせたの。——ありがとう。本当に、ありがとう。このお礼ははずれ、どこかで埋め合わせしないとね」

そう言うと、葉山ユノは一人の女子生徒の頭を愛撫し、もう一人の女子生徒には抱擁を交わしていく。そして残る一人の手を取って、その甲に口づけをしていくと、三人の照れ顔を眺めながら柔らかなく微笑んでみせた。

「貴女達の好きなシチュエーション、今でも鮮明と覚えているわよ。……そうね。じゃあ今回の埋め合わせとして、都合の良い日にでも、より親密な親睦を深めるためのプライベートな時間を設けましょうか。——それも、一人ずつ。より、お互いの気持ちと身体を埋め合わせるができる、二人きりで過ごす濃密なプライベートな時間を、ね……？」

唇にあてがった人差し指。ナイショのジエスチャーに不良の女子生徒達は顔を真っ赤にしていくと、別れの挨拶を告げるなり逃げるように探偵事務所を去っていった。

鼻歌を奏でながら事務所に戻る葉山ユノ。そこで、朝食と支度を済ませた柏島歓喜が訊ね掛けていく。

「いつでも出られますよ、ユノさん。……それで、先ほどの子達は一体？」

「あら、準備がいいのね。だいぶ探偵の助手らしくなってきたじゃない。それでこそ柏島くんってカンジ」

「は、はあ……」

上機嫌な彼女に柏島歓喜は言葉を詰まらせるが、すぐにも彼女の口から答えが返ってくる。

「彼女達に、今受けてる依頼の調査をしてもらったの」

「今受けてる調査、って……最近とこの辺で増えてきている、大量の高校生が不審死している事件のことですか？」

「そう。元は、龍明西高等学校に通う娘さんを持つ依頼主さんから、例の事件の犠牲となったその娘さんの仇を討ちたいというご依頼を受けて、犯人を探し当てる行方調査の名目で色々調べていたものだけれども、この事件の真相を探るには、より身近な存在に頼ることが解明の近道だと踏んだワケ」

「それで、先ほどの子達に調査を任せていた、と」

「具体的には、彼女達に学校内で聞き取りを行ってもらった。何の偶然かは分からないけれど、事件の犠牲となっている学生達と同じ学校に通う生徒なものだったから、なおさら好都合だったわ。私や柏島くんが学校に侵入して聞き取りするワケにはいかないし、じゃあ登下校で道行く生徒に事情聴取をしようものなら、警察でもヒーローでもない私達は、この事件で神経質になっている学校関係者やヒーロー関係者に目をつけられて、怪しまれることとなる」

準備は万端。そんな決め顔で葉山ユノは佇むと、次にも腕を組んで、それを言い放っていった。

「今回、彼女達の協力あって、この事件の犯人であろう存在と接触した証言者」とアポを取ることができたわ。——事件の関係で、今日は午前で学校が終わるみたい。そのタイミングを見計らって、私達は証言者と合流する予定になってる。……今すぐにも、現地へ赴くわよ。ついでに周囲の警戒や巡回も兼ねた張り込みもするから、時間に余裕を持って行動していきましよう」

証言者【2933文字】

大都市の中でも都心部に近い、見渡すかぎりの建物と交差点が目立つ龍明の昼下がり。交通機関が忙しくなくと行き交い、多くの人々が私服から制服、正装やスーツまでの様々な事情を見せていく。

発展した環境の中を出歩いてみると、そこに紛れるようそびえ立つ広大な校庭と校舎を発見できる。それは、一番高い建物で九階もの階層にもなる巨大な学校であり、小から中、高から大までのほぼすべてを詰め込んだ、凹凸な外見に見合った充実の学習環境が整えられていた。

『龍明西高等学校』。この一貫校に内蔵された一部分。その領域内に踏み込むことは許されていない葉山ユノと柏島歓喜は、一段と嚴重である警備に怪しまれない程度に外周の巡回を行っていた。

……腕時計を確認する彼。そろそろ正午ということもあり、校門のある方角を見遣りながらセリフを口にする。

「そろそろ時間になりますね、ユノさん。——ここ最近となつて多発するようになった、高校生をターゲットにした惨殺事件。廃墟を主とした現場に彼らの死体を山積みに行っているということから、少なくとも常人には成し得ない所業であることは確かです。ユノさんが懇意にしてもらっている警察官からも、特別に死体の破損状況なんかも教えてもらえましたね。……人体を容易く破壊できるパワーの持ち主である以上は、モンスター級の脅威であることは確定。それも、もしこれが愉快犯の犯行であるのなら、最悪の場合、犯人が超人であるという可能性も……」

「柏島くん。推測は、推測に過ぎないわ。この真相を仮定するには、まだまだ情報不足。柏島くんのような仮想をより真相に近付けるための参考資料として、これからにも私達は証言者から話を聞くの。ほら、行くわよ」

「す、すみません」

柔らかな気温と、強い日差し。葉山ユノの背を追い掛けるように、柏島歓喜は小走りで駆け出す。

校門からぞろぞろと出てくる生徒の波。一貫校のほぼすべてをものけの殻にするべく、一斉となって解散を宣告されたのだろう。

それらを見分けるように、距離を置いた木陰で眺める二人。……証言者が二人の特徴を把握していることから、きつと相手側から声を掛けてくることだろう。

そして、想定通りとも言わべき一つの影が二人の下へと歩き出す。

開けっ払った鼠色のブレザーに、ボタンを三つほど外した白色のYシャツ。緩めて着用した赤色のネクタイに、白とブラウンの縞々が特徴的なスカート。黒色のストッキングに白色の運動靴を履いたその“少女”は、スカートの裾を上げた、不真面目を気取る雰囲気での前に現れた。

身長百六十ほどの背丈で、へそ辺りにまで伸ばした無造作な茶髪を揺らしながら歩いてくる。黒色の瞳は目つきが悪く、背負うように肩に掛けたスクールバッグと、ブレザーのポケットに手を突っ込んだガラの悪さを醸し出す姿。

くちやくちやと口を動かしていることから、ガムなんかを食べているのかもしれない。その第一印象に柏島歓喜が、「うわ、なんか関わりたくないタイプ……」なんて言葉を胸で呟きながら見遣つていくと、隣にいる葉山ユノへとその言葉を掛けていった。

「どうやら、あの子みたいですわね。何やら物騒と言いますか、如何にも不良なイメージのある話にくそうなカンジの女の子ではありませんが、俺としましては女の子であることに、ある意味でホツとしています。ユノさんなら、どんなに性格が悪い女の子であろうともきつと、話を合わせることができると信用している部分がありますからね。

——ユノさん？」

空気が違う。隣へと向いていく柏島歓喜。

そこでは、あからさまに動揺を隠しきれずにいる彼女の見開いた目が映し出されていた。

「ユノさん……？ どうかしましたか……？」

訊ね掛ける柏島歓喜。彼の声に、葉山ユノはハツとしながらも、視線をどこかしこ泳がせながらもっていくのだ。

「え。あ。いえ。……っ」

と、二人の前まで歩み寄ってきた女子生徒。

見上げる形で大人を見遣るその視線は、淡々と、興味無さげに向けられる。

「あなた達でいいんだよね。アタシを呼び出したの。で、なに？ 襲われた時の話をアタシから聞きたいみたいだなニューアンスで、クラスの人からお願いされたんだけど」

喋り方も淡々としており、会話を交わすことには心から興味を持たない印象を感じさせる。だが、言い捨てるようなぶつきらぼうな喋り方とは相反して、声音自体はドスを利かせることもない、どこか温かなイメージさえも感じ取れてしまう少女の言葉。

そんな少女へと、葉山ユノの代わりに柏島歓喜が受け答える。

「はい、あなたのご友人さんから伺っているとは思いますが、我々は葉山探偵事務所という、私立の探偵稼業を営む個人経営の仕事をしている身でありまして。ああ、こちらが葉山探偵事務所に勤める探偵の、葉山ユノです。彼女はプロの探偵とも言える多くの実績を有する人物でありまして、懇意にしている警察官もいらっしやるほどの、それなりと広い顔を持つ実力ある方です。で、俺はその助手みたいなものであり——ああ、名刺をどうぞ」

「ん、そういう小さい物はいらない。受け取っちゃうと邪魔になるだけだし。でも、捨てるのもなんか申し訳なくなるし。だから、最初から受け取らないって決めてる」

ん、と手で静止させる少女。ポケットから片方の手を出して、それを宙ぶらりんとさせながら少女は言葉を続けていく。

「『たでまるなこ 蓼丸菜子』。アタシの名前だから、よろしく」

「蓼丸さんですね。俺は、柏島歓喜っていいいます。よろしくおねがいします」

「カンキ？　なんか面白い名前。あと、さん付けじゃなくて普通に菜子でいいから。あと敬語も落ち着かない。アタシ、そういうタチじゃないし。かしこまられてると疲れるから、好きじゃないんだよね」

「そ、そうですか——そ、そっか。じゃあ、菜子ちゃんって呼びま……」

呼ぶね」

「ぶふっ、タメ下手すぎ」

宙ぶらりんにしていた手を口元まで持ち上げ、そう微笑してみせた
蓼丸菜子。

そんな少女に柏島歓喜は「あ、あれ……」と頭を掻くようにしたが、
すぐにも蓼丸菜子は若干と柔らかい真顔へと表情を変えながらそれ
を口にしていった。

「で、どこで話すの。この近くに、ゆつくりできるカフェとかあるんだ
けど、そこ？ ああ、お代とかはアタシ子供だから出さないよ。あな
た達は大人でしょ。アタシは情報を提供するんだから、お代はその情
報料でおねがい」

「な、なんかちやつかりしてる子だな……じゃあ、そこまで案内してく
れるかな？」

「はいはい。ちようどそこでき、キウイパフェっていう期間限定のメ
ニューが始まってんの。だからちようど良かったんだよね」

そう言うと、蓼丸菜子は二人の先を往くようにひとり歩き出して
いった。

これを見た柏島歓喜は、少女を追いかけるよう駆け足で走り出す。
だが、それでも隣の存在が微塵にも動きを見せなかったことから、彼
は振り返りながら声を掛けていくのだ。

「ユノさん？ 先ほどから、どうかしましたか？ 具合でも悪かった
りしますか？」

「え。あ、いいえ……何でもないわ。行きましよう」

何度も首を横に振る葉山ユノ。そうして彼を追い越して蓼丸菜子
についていくものだが、そんな彼女の背を、柏島歓喜は不思議に思い
ながら眺め遣るばかりだった。

蓼丸菜子【3723文字】

満席となったオシャレなカフェの店内。一貫校から歩いて十五分ほどのそこには、一気に解散を告げられた多くの学生が押し寄せていた。

自身らの通う学生に多発する、最近となって発生し始めた生徒の被害事件。しかしそこで展開された光景は、自身らには無関係と言わんばかりに早期解散を喜ぶ、外を出歩く生徒の面々がうかがえた。

……一つのテーブルに運ばれてきた、キウイをふんだんに詰め込んだ大きなパフェ。それを前にして少女は生唾を呑み込んでいくと、先ほどまで不愛想にしていた表情がわずかに崩れ、少しばかりと頬を赤らめながらスプーンでいただき始めた。

蓼丸菜子。そう名乗った少女に同行する、葉山ユノと柏島歓喜。彼は蓼丸菜子から聞いた話をメモにまとめていく中で、隣の席に座る葉山ユノは、少女の様子をじっと眺めつつ、腕と脚を組んで座っている。

メモに一通りとまとめ終えた柏島歓喜。崩した服装と相反するお行儀の良い姿勢でパフェを頬張る蓼丸菜子へと、彼は訊ね掛けるように確認をとっていった。

「では——じゃあ、菜子ちゃんが言うには、その時に出会った殺人鬼は間違いなくモンスターだったんだね。で、そのモンスターは液状のよな触手で、同じクラスである男子生徒に取り付いていたと……」

「そ。で、その触手みたいなやつで、同じ学校の生徒を次々と殺し回ってた」

「場所は、ここからだいぶ離れた所にある廃墟のビルの中でした——だったんだっけ？」

「ここから最寄りの駅に乗って、五個か六個くらい乗ってった先にある駅を降りたトコ。そこから二十分くらい歩くとビルが見えてくるんだけど、外から見てもボロっちいし、そんなところにヒトなんかいやしないだろうから、ある意味では好都合だったのかも。——告白するのにさ」

パフェを食べるスプーンをぶらぶらと振る蓼丸菜子。他所を見つ

める視線で適当な喋りをする少女の証言に、柏島歓喜は踏み込んでいく。

「その、告白っていうのは……」

「あの男子。モンスターに取り付かれてるっていう、あの」

「菜子ちゃんは、その男子生徒に呼び出されたということでしょう——ということなのかな」

「呼び出された。フツーに来てほしいってだけの連絡だったけど、あからさまに告白しようってカンジがした。でも、だからってあんなトコに呼び出す？ ムードの欠片もないのにね」

「……それで、菜子ちゃんが呼び出されたビルに向かったら、そこで……」

「なんか、同じ学校の生徒がいっぱい死んでた」

「淡々とした調子。まるで興味が無いといった声音で蓼丸菜子はそう言うと、パフェを三口ほど頬張ってから、言葉を続けていく。

「なんかね、不良グループに後をつけられてたみたい。あの男子、普段からいじめられてたから。だから、前にアタシが声を掛けてみたんだ。良かったら相談に乗るよって。それからかな、なんかやけにアタシに積極的になって。それで、告白しようってなったんじゃないのかな。で、誰もいなさそうなトコでアタシを待っていたら、何かを察していた不良グループが後をつけてきて、絡んできたみたい」

「……よくあるいじめの実態も、今回の事件が引き起こされた原因と関係あるかもしれないね。聞いているだけで胸糞悪く思いますよ」

「眩くように喋る柏島歓喜。手に持つペンの尻を唇に当てながら渋い顔をしていくと、疑問に思ったそのことを蓼丸菜子へと訊ね掛ける。

「では——じゃあ、その時には既に、その男子生徒はモンスターに取り付かれていた、と」

「じゃないのかな？ だって、アタシがビルに着いた時点で、相当な数を殺してたし。十人ちよつとくらい？」

「残っていたキウイを一気に頬張っていく少女。……と、そのセリフに柏島歓喜は新たな疑問を抱いた。」

「……それにしても、菜子ちゃん。そんな現場を目撃したというのに、何というか、すごく冷静でいるというか……そんなこと普通、こんな平然と喋ることなんかできませんよ」

「そう？」

首を傾げる蓼丸菜子。スプーンを舐めてクリームを舌で味わいながら、そうセリフを続けていく。

「別に、勝手にしてってカンジだし。誰かを殺すんなら殺すでアタシは別に構わないし、倒れてる連中の顔にアタシもムカついてたから、むしろスッキリしたよ。代わりに始末してくれてありがとうってカンジ」

「そ、それもある意味で肝が据わっているというか……。いや、それよりも菜子ちゃんが無事だったことについても不思議に思うというか……」

「そこで告白もされたかな。こんな自分ですが、どうか、お付き合いできないでしょうか。って」

「そ、それで……？」

「だから、『無理』って答えた」

パクツ。スプーンでパフェを掬って、食べていく。

「で、無理って言ったら、その男子が触手みたいなのでアタシを襲ってきてさ」

「そ、それでどうしたんですか……？」

「だから、傍に落ちてた鉄パイプで一発殴ってから、家に帰った」

え、ええ……。

言葉を失う柏島歓喜。蓼丸菜子は平然とパフェを食べ続けていく。

「菜子ちゃんって、もしかして超人だったりします……？」

「超人？ 違うけど、それが何？」

「いや……そんな局面と出くわしたら、誰もが命の危機を感じたりして怯えたりしますから……」

「別に、死ぬ時は死ぬし、生きる時は生きるんでしょ」

適当さに拍車がかかった返答。少女は言葉を連ねるようにセリフを口にする。

「アタシ、死んでも別にいいから。『あっち』に会いたい人もいるし、死ぬことなんて別に怖いだなんて思わない」

「ですが、そんな簡単に死んでもいいなんて言ったら、菜子ちゃんのご家族が心配しま——」

「柏島くん」

唐突。隣から掛けられた葉山ユノの声に、彼は言葉を止めて疑問のハテナマークを浮かべせた。

……だが、そこから言葉が繋がらない。待っていても何も起こらないこの場の空気から、柏島歓喜は持っているペンで頭を掻きながら仕切り直しをしていった。

「と、とにかくですね、菜子ちゃんはモンスターと接触しています。そして、もしもそのモンスターが嗅覚に優れた個体である場合は、菜子ちゃんの匂いをモンスターに記憶されてしまっている可能性も考えられます。その場合、菜子ちゃんの居場所の特定から、お住まいの住居が襲われてしまう可能性も十分にあり得ますので、今回の件を龍明超人協会に相談しましょう。こういった件などで身が危険に晒されている場合は、その対象となる人物やペットを超人協会に保護してもらうことができますから」

手振りを交えて説明をする柏島歓喜。そんな彼を前にして、蓼丸菜子は興味無さげにパフェを食べ続ける。

「別に、今のままでいいから」

「い、今のままって……そうすると、菜子ちゃんのご家族が危険な目に——」

「だから、それでも構わないってこと」

切り捨てるよう放たれたセリフ。

柏島歓喜は、一瞬と思考が停止した。次にも彼は、もう一度と説得を試みる……。

「そしたら菜子ちゃん、最悪の場合、菜子ちゃんのご家族がモンスターに——」

「もういいわ、柏島くん」

姿勢を直す葉山ユノ。彼女へと振り向く柏島歓喜が目で疑問を訴

え掛けるものの、そんな彼の目を一切と見ることなく、葉山ユノはそれを口にしていった。

「菜子ちゃん、私達に時間を割いてくれてありがとう。ご協力に感謝します。菜子ちゃんから教えてもらった数多くの情報は、私達が今回の事件を解決するためにどれも必要となる重要なものばかりだった」
「そう？　じゃ、今回の情報料として追加でなにか注文してもいい？」

「ええ、この場のお代は全額、こちらで支払うわ」

「うそ、ほんと!?　やった！　じゃ、いつも手が出せない高いやつ頼も」

ワクワク。興味無さげな喋り方とは裏腹である目の輝きで、メニユーを手にとってそれを眺めていく蓼丸菜子。

その少女の様子を葉山ユノはじっと見つめながらも、少し間を置いてから続きの言葉を発していく。

「ただ、今回の犯人が菜子ちゃんに少なからずの好意を持っていることも事実。それならいずれ、彼は再び菜子ちゃんの下に舞い戻ってくる。——だから、この件が落着くまで、私達は菜子ちゃんを護衛しようと考えているの」

「護衛?」

メニユーから顔を上げる蓼丸菜子。

「え、そんなのいらないよ。アタシのプライベートが見張られるってことでしょ?　やだよそんなの」

「そこまで踏み入ったものではないわ。登下校で外を移動する際に、遠目からちよつと見守るだけ。——もしも登下校の時間に暇しているのであれば、私達が話し相手にもなれるけれども、基本的には菜子ちゃんに干渉はしないつもりでいるから安心して」

「ん……………話し相手……………」

眩く少女。ちよつとだけ寂しさを含んだ声音でそれを口にすると、少しだけ考えてから、葉山ユノへと返答した。

「…………ま、それくらいなら、別にいつかな……………」

「決まりね。それじゃあ菜子ちゃん、数日間だけのお付き合いになるけれども、私と柏島くん共々、よろしくお願いね」

「ん……」

少しだけ俯く蓼丸菜子。

……と、上目遣いで前の席の二人を見つめ、すぐに視線を外して黙り込む。

——心なしか、少女の眉が少しだけ上がった。頬も少しだけ赤く染めながら口を噤んでいくと、手に持つメニューを立てて顔を隠すようにしながら、蓼丸菜子はオーダーまでに少しだけ時間を掛けていった。

生きているだけで【3228文字】

真夜中の月明りも届かない、工事中の地下道深部。響き渡った悲鳴が暗がりにも溶け込んで、それらの姿さえも見分けがつかない残骸たちを、少年は引き摺っていく。

液状の触手を中途半端に身に纏う、学生服を着崩した男の子。まだまだ未来ある少年が血濡れのそれらを運んでいくと、奥深くで蠢く何かへと献上するように手渡していくのだ。

「今日も獲ってきました……。それなりの収穫だと思っんですけど、どうでしょう……」

虚ろな目の少年。彼が触手のそれらを「何か」に渡していくと、「何か」は蠢く液状の触腕から口のような形状を象つて、残骸を次々と食らい出す。

……無言で眺める少年。まとう触手が地面に項垂れる。

直にして、「何か」は触腕で少年を突き離れた。

「え……。まだ、ですか。まだ、足りないんですか……？ 俺、こんなにも「皆さん」に献上しているのに……！」

と、次の時にも地下道に強烈な灯りが射し込んだ。

駆け寄る大勢の人間達。警察やヒーローといった面々の彼らが武器を片手に構えながら、「動くな!!」とけん制をかけていく。

眩しがる少年。——だが、彼らはむしろ、そんな異形な少年より、その後ろに存在していた「何か」に激しい恐怖を抱いたのだ。

重量のある、巨大な雫のような形状。だが、それはドス黒い赤色と、深海の如く深い青色の二色が混じり、「それ」の内部には、大量に詰め込まれた人間の姿が漂っている。

いや、泳ぐように蠢いていた。「彼ら」は生きています。精気を吸い取られたゾンビのように両腕を上げ、液状をまといながら、雫の身体から飛び出すように次々と「それ」から伸びて外敵への威嚇を始め出したのだ。

この世のものとは思えないおぞましき。目にした生命体に多くの警察関係者が慄く中、「それ」の前に立つ少年は身に纏う液状で触手

を象り、右手を構えながらそのセリフを口にした――

「現実なんて、つまらないことしかないさ。生きていても、何も良いことなんかありやしない。――そんなことを呟くと、皆が口を揃えて、同じ言葉を俺に言い聞かせる。『生きているだけで幸せ』だ？ そんな他人事のような言葉、とつくの昔から聞き飽きてんだよツ!!! ……生きているだけで幸せだと言うのなら、俺が今までに過ごしてきた人生は一体何だったんだツ!? 俺は生きていて一ミリたりとも幸せだと感じたことはねエ!! それはつまり、俺はまだ、この世に生まれてきていないって意味にもなるんだよ!! 勝手に俺の存在を否定すんじゃないエツ!!!」

昼下がりの校門で少女を待つ二人。木陰で佇む葉山ユノと柏島歡喜は、学校から出てきた蓼丸菜子の姿を捉えてそちらへと歩み寄った。

三人で歩く帰路の途中。寄り道して龍明の街を散策する彼女らは、巨大な噴水が目印であるショッピングモールへと訪れる。

人工芝の広場や、大きなフードコート。バウムクーヘンのような建物で学校帰りのショッピングを楽しむ蓼丸菜子は、着崩した不良系の制服姿をしながらも、二人の手を取ってはあちこちと店内を駆け巡っていくのだ。

「ユノさんユノさん、こういうクール系のドレスとかもユノさんに似合うんじゃない? ほら、ユノさん背がおつきいし、ほら、このマネキンと頭の高さお揃い。試着室とかないのかな。ねえカツキー見てくださいよ」

「お、俺、さつきからそういう雑務ばかりやらされてないですか……?」

「だって、雑用係で事務所に就いたんでしょ。だったらこういうコト慣れてるよね。ほら行って」

「いや、まあ確かにそうですけど……。でも俺、最近料理ばかりやらされているから、実質コックなんじゃないですかユノさん」

「探偵たるもの、多彩であるべき。私だって料理くらいできるのだから、助手の柏島くんにはそれくらい慣れてもらわないとでしょう?」
「な、なんか、上手く受け流されたような気が……というか、ユノさん料理できるんですか!? それ初耳なんですけど!?!」

「面倒だから、貴方を雇って任せているんでしょう」
「え、ええー……」

そんな二人のやり取りに、蓼丸菜子は「ぷふっ、あは」と音を捨てるように笑い声を上げた。

「あは、あはは。——あ、ねえ、アタシちよつと足が疲れた。休みたいからどつか座ろ。あ、カッキーはアタシとユノさんの飲み物買ってきて。アタシはキウイソーダ。ユノさんは?」

「俺、ユノさんの雑用係であって、菜子ちゃんのパシリってワケでは——」

「私も菜子ちゃんと同じものを貰うわ。さあ柏島くん、男の人としてしっかりと、女の人達の要望に応えなさい」

「ユノさんまで、そんなあ……」

しよぼくれる柏島歓喜。彼のその様子に女性陣二人が微笑しながら、三人は昼間の一時を満喫していった。

——巨大な噴水が視界に映る、人工芝の大きな広場。そのベンチに腰掛ける葉山ユノと蓼丸菜子の下に、三人分の飲み物を持ってきた柏島歓喜が合流する。

葉山ユノを中心に、左右に二人が座る光景。木陰のベンチで並ぶ三人は飲み物を含み、その後にも柏島歓喜がセリフを口にし始めた。

「菜子ちゃんの護衛を開始して、三日くらい経過したでしょうか。てつきり菜子ちゃんの登下校を見守るだけかと思っておりましたが、まさか毎日このように遊び歩くだなんて想像もありませんでした。——菜子ちゃん、アタシこういうのに憧れてたんだって初日に話してくださいましたもんね」

「ぎゃ!! それ忘れてって言ったでしょ! 恥ずしいな!」

「ですが、俺としましてはむしろ安心しましたよ。菜子ちゃんは不良

「貴方はまず、周囲の気配を探るスキルから身に付けた方がいいわね」
「?? どういうことですか?」

「尾行されている」

……!?

思わず立ち上がる柏島歡喜。だが、葉山ユノが彼のズボンを引っ張ってゆつくりと座らせると、持っていた二つの飲み物を彼に手渡し、その言葉が続けていった。

「護衛の初日から、ずっとつけられていた。でも、その気配がいついさつき遠のいていったわ。——これ持っててちょうだい」

彼に渡す飲み物。それらを手放したところで、葉山ユノは目星をつけた場所へと向かうよう、広場の中を真っ直ぐと走り抜けていった。

不公平な世界を憎む【4383文字】

トイレの個室。閉鎖的な空間で一息ついていく蓼丸菜子は、手に持つ小型のナイフケースを眺めながらひとり呟いていく。

「……ユノさんに渡されたコレ、違和感しなくて気持ち悪いんだよね。学校でバレないかも心配しなきゃいけないかったし、本当にコレ、要る……？」

事を済ませ、立ち上がったって衣類を身に付ける少女。その動作にナイフケースを仕込む様子をうかがわせながら、蓼丸菜子は個室から出て二人の下へと向かい出した。

ショッピングモールからトイレにまで続く、石壁が陰りを作り出す狭い通路。表のひと気とは裏腹に静まり返ったこの空間が、不気味な印象さえ抱かせる。

と、蓼丸菜子は思わず足を止めていった。

……背後の明かりが逆光となる人影。少女に立ち塞がるよう正面に佇む、見慣れた学生服の見知った少年の姿――

蓼丸菜子は、その適当そうな表情を全く変えずに訊ね掛けていく。

「なに、何の用？　ここ女子トイレなんだけど」

「もう一度だけ、告白させてください」

異常なほどに落ち着いた声音。周囲の静けさよりも冷たい彼の調子に、蓼丸菜子は肯定も否定もすることなく、ただ佇んで少年の言葉を待ち続ける。

「蓼丸さん。あなたに声を掛けられた時から、俺はあなたに惚れてしまいました。この気持ちは、この先にも変わることは生涯ありません。そう、先日にもあなたにフラれてもなお、こうしてあなたのが好きである気持ちが全く変わらないように――」

「無理」

バツサリ。突き離すわけでもなく、本当にただ少女の本音が飛び出してきただけの、あまりにも興味を感じさせない淡々さ。

「別に、アタシのタイプじゃないからとか、そういう好き嫌いの問題じゃないから。んー、なんだろ。アタシがそういうのに興味無いって

「うか、そういう付き合いが苦手なだけというか。友達のままなら別に話し相手になつたりするけど、それじゃダメ？」

「……………ダメです」

「やっぱりダメか。そんな表情で徐々に項垂れていく少年は、心を受けたダメージで決心したとも受け取れる自暴自棄で、蓼丸菜子へと飛び掛かっていったのだ。」

「服の隙間から巡り出す、液状の触手。そして飛び出すように少女へと伸びていくと、それは瞬く間に蓼丸菜子の首と脚に絡まって締め付ける。」

「一歩退くことも叶わない速さ。常人では追い付けない速度を以てして少女を拘束した少年は、蓼丸菜子の前で着地して両肩に手を掛けていく。」

「ならば、俺のために死んでください。あなたがこうして存在する以上、俺はあなたのことを諦めきれない。だから、今ここであなたに死んでもらわないと、俺はあなたのことをずっと好きでいてしまいます」

「フラれたから、その相手を殺して満足するってこと…………？ アンタ自己中すぎない…………？」

「首を絞められ、脚も強い力で締め付けられて身動きがとれない蓼丸菜子。しかし窮地に追い込まれてもなお変わらない声音で、少年へと言葉を続けていく。」

「アンタが酷い目に遭わされていたことは、アタシも知ってる。そんなアンタに同情したから、アタシは慰めようと思って声を掛けてみただけなの。だからアタシにはそれ以上の他意は無いし、アンタへの好意も無いから…………」

「だったら、なおさらのこと死んでください。俺はもう、人生が上手くいかないことにうんざりしているんです。そして俺はまた、失敗をしました。いいえ、俺は失敗しかしてきていません。…………もう、こんな世界なんて嫌いだ。蓼丸さんのような、生まれもつての勝ち組ではない人間しか得しないような、こんな不公平だらけの偏った世界、消えて無くなつてしまえばいい。——いや、それだったら俺にだってで

きるのか。……そうだ。そうじゃんか。何なら俺にはこの力があるんだから、それはつまり、俺がこの世界を直々に消し飛ばしてもいいってことなんだよなアツ!!?”

少年の首から現れる触手。それが蓼丸菜子へと向けられると、触手は躊躇うこともなく少女の顔面へと突き出された。

——と、その直前にも動き出す蓼丸菜子。

「あ、っそ……!! だったら、アタシにだって“コレ”を使う権利くらいあるよね……っ!”

スカートへと手を伸ばす蓼丸菜子。そして豪快にめくり上げて白色と水色のシヨーツを見せていくと、そのゴムに挟む形で忍ばせていたナイフケースから刃物を取り出し、躊躇う様子もなく少年へと突き付けていった。

「!?」

パキンツ。

弾かれる蓼丸菜子の手。手放したナイフが地面に転がり、それを払った触手が少女の上半身をグルグルに締め付けて窒息させていく。

息ができない。首と合わさる人外的なパワーを受けて、蓼丸菜子はその場で宙に浮かされながら遠くを見つめる。

抵抗は、全くもって行わない。……これまでに見たこともないぞ。そんな少女の様子に、少年は不思議に思いながらそれを訊ね掛けるのだ。

「……なんで、どうして蓼丸さんは、苦しんだり、もがいたりしないんですか……? 俺が殺し回ってきた憎たらしい不良グループの連中なんかは、俺の触手に怖がって命乞いもしてきたというのに」

手をかざす少年。それは、もがく様子を一切と見せない蓼丸菜子の顔へと向けられる。

そして蓼丸菜子もまた、すべてに身を委ねるかのように無気力なサマを見せながら、いつもの適当な調子でそれを口にしていったのだ。「っ……死ぬことなんか、怖くなんか、ない。アタシは、いつでも、死んでいいと思いつつながら、生きてきた……。——死んだところで、”あっち”でアタシを待っていてくれる人が、いる、から……。だから、

死ぬなら死ぬで、アタシは、別にいい……！」

睨みを利かせる蓼丸菜子。

——早く殺せ。訴え掛ける力強い目を前にして、少年は威圧さえも感じ取れてしまい一瞬ばかりと怯んでしまった。

瞬間、大気に迸った轟音。

空間が歪む、この世の終わりのような衝撃。それが少年を一直線に吹き飛ばし、伝った広範囲の衝撃波で周囲の施設が崩落し始める。

宙に投げ出された蓼丸菜子。——何が起きたのか分からない。そんな呆気にとられたサマで落ちていく自身の身体は、すぐにも抱き留められる形でその場に留まった。

「……ユノ、さん？」

右足を地面に擦り付けながら、お姫様抱っこの要領で蓼丸菜子を抱える葉山ユノ。

その間もずっと地面に靴の裏を擦り付けつつも、彼女は蓼丸菜子へとそう言葉を掛けていく。

「余計なお世話だったかしら。でも、命の危機に瀕する貴女を見捨てられるほど、私は冷酷になんかなれないの」

「いや、んと……ありがとう……？」

「お礼は、貴女の笑顔で十分よ。——さあ、騒ぎに巻き込まれない内に戻りましょう。それと、近くの水道でこの靴の汚れを洗い流したいわ。なんだか汚らわしいものを蹴飛ばしたみたいで、どうも足の裏が落ち着かないの」

「え、つと……あれ、ユノさんってそういうタイプの人だっけ……？」

——まあ、いつか」

弾かれたナイフを拾い上げる葉山ユノ。それと共に、崩落した周囲の光景を飛び越える跳躍でその場から姿を消すと、すぐにも駆け寄ってきた人々の目に映ることもなく、彼女は蓼丸菜子を元の日常へと帰していったのだった。

——腹いせ。引き摺る死体がいつもの倍近くとなった、地下の道

中。土の匂いが充満する工事中の通路を通り抜け、その深部で力を蓄え続ける「親分」に食料を献上する少年の姿。

虚ろな目は一段と濃い闇を落としている。ずっと項垂れた姿勢を液状の触手が支える中で、差し出した学生服の死体を取り込み終えた「親分」が、触腕で少年を突き離していった。

「!? ……まだ、ですか? まだ、食べ足りないと言うんですか…?!?」

ぐったり。無気力といった具合に少年は放心すると、そう直ぐにして少年は言い返すかのよう、そのセリフを言い放ち始めた。

「——俺は。俺は、怪物にさえ認められないと言うのか…?!? これだけっ、あんだけのことをしてやってきて、どんだけ、俺が頑張ってきていると思ってるんだッ!!! この力をくれた代償として、こうして地下の奥深くで隠れていなければ成長できないあんたの代わりとなつて、俺が毎日毎日、頑張つて頑張つて憎い連中を殺し回つてその死体を献上してきたというのに!! それなのにあんたも、俺という存在を全く認めようとしなないッ!!!」

溜まりに溜まつた鬱憤を、すべて解き放つていく勢い。怒号が響く地下道に少年が地団駄を踏んでいくと、もう我慢できないと言わんばかりの怒りをぶつけるように少年は言葉を続けた。

「今日限りで、俺はあんたの世話をやめるッ!! それで!! この力でこの憎たらしい世界を滅ぼして!! 俺は、新しい世界を創り上げてみせるッ!!! ——この力は、ありがたくいただいていくぞ!! だから、後のあんたの世話は、別の奴隷にでも任せておきなッ!! 本日限りで、俺はあんたの奴隷からおさらばする!! じゃあなッ!!!」

滅ぼす。滅ぼす。この世のすべてを滅ぼしてやる。

過信とも見受けられる少年の態度。そして「それ」から背を向けて歩き出す少年。

……その足取りは軽く、そして怒りに満ちた力強さで突き進んでいた。だが、それは直にも段々と重みを帯び始めていき、次第と少年が思うように上げられなくなったその足は、終いには一ミリと持ち上げることも叶わなくなる。

少年は、足元を見遣った。

——へばりつく、液状の触手。少年がこれまでに身に纏っていた“それ”は、今や錘となって少年の自由を奪っていたのだ。

「な、なんだ、これはっ。お、おい。おい!!」

少年の全身が、背後からの陰りで一層と暗くなる。自身の姿も見えなくなったそれに少年は恐る恐ると上半身で振り返っていくと、そこには、口を生やした触腕で頭からかぶり付こうとする“それ”の姿が映し出されていた。

「な、なんだよっ。役に立たなくなった駒は、用済みってことなのかよ……!!? そんな話聞いてねえぞッ!! おいッ!! おいてめえッ!!

おいゴラ、この腐れモンスターがッ!!! やめろ。やめ」

ばくっ。

ツゴク。

重量のある、巨大な雫のような形状。そこに加わった一つの人間が、スルスルと頭から突っ込んでいく。

——ドス黒い赤色と、深海の如く深い青色の二色が混じる身体。大量に詰め込まれた人間の死体が漂う透明のそれが不気味に震え始めていくと、次の時にも、ドス黒い青色の飛沫を散らしながら、“それは羽化するかのように翼を生やし始めた。

そして、地下道の中を高速で真っ直ぐ進み出す。その様子はまるで離陸前の飛行機のようにであり、そうして地下道から飛び出していった後もまた、飛行機と海洋生物のエイを融合したかのような形状を成して、夜の龍明の空へと高く飛び立っていく。

機体の下半分から伸び始める触手。それらの先端まで移動させられては、両腕を伸ばすことで自ら獲物を捕らえようとする人間の死体の数々。

あらゆる観点で恐怖を孕んだそのモンスターは今、夜空という暗がり泳ぐようにして龍明へと牙を剥き始めた——

ヒーロー(つっこ)【3876文字】

陽が落ちた龍明に点々と明かりが灯る、至って日常的な様子
の住宅街。その一部分として明かりを灯す住居の中で、制服姿の少女は二階からリビングに降りてくるとテーブルの席についていく。

平均的な住まいの光景。晚ご飯の時間として三人が集うこの空間には、少女の他、厳つい顔をした中年の男女が並んで食事を行っている。

彼は細い目つきで少女の姿を見遣っていくと、口角を歪めながらそんなことを訊ね掛けた。

「なんでまだ、そんな格好をしているんだ」

床に響くような低い声。箸を止めて睨むよう見つめる彼に視線を向けられ、少女は一切と視線を合わせないまま適当に返していく。

「別にいいじゃん、アタシがどんな格好をしていても」

「学生服は普段着なんかではないんだぞ。余計なシワがつくから、今すぐ脱ぎなさい。それと、そんなだらしのない着方をしていると学生服が可哀相だろ。せつかくの制服なんだから、もったときちんと着こなして——」

「わかったわかったわかったわかった」

「おい、真面目に聞いているのか菜子」

うんざり。嫌な顔をしながら何度も頷く少女。彼の言葉に「わかってるから」と返してだんまりを決め込み、その間にも降り注ぐ彼からの説教をシャットアウトしながら、箸を進める手と、ここ最近と巡る脳裏の記憶に意識を向けていく。

美人でカッコいい、女として憧れる要素しかない完璧な探偵お姉さん。と、その助手でイジリ倒すのが面白い、タメ口があまりにも下手な万能お兄さん。

出会ったばかりの二人と過ごした日々。今でも鮮明に思い出せる、交わした言葉の数々。すごく久しぶりに感じる事ができた、生きている中で生じる『楽しい』の体験——

……あの二人に会いたい。今すぐにも……。

離れているだけで寂しくなってくる。恵まれない環境に身を置いてきた人間として感じてしまう、人の温もりを強く求めてしまう依存の傾向。

シャットアウトする空間の中で、少女は今にも泣き出してしまいそうな表情を無意識に浮かべていった。……尤も、周囲も恐怖で慄く歪の表情を見せていたものだが――

「モ、モンスターの襲来だって……っ!？」

彼の声で、少女の意識は現実に戻ってきた。

食事中のテーブルを揺らす彼。座っていた椅子や周囲のソファなんかを蹴飛ばす勢いで、妻であろう彼女を連れて二人で家の外へと飛び出していく。

……外から聞こえてくる、悲鳴とサイレンの音。少女もまた駆け足で自宅から外に出ていくと、その視線の先、龍明の夜空から地上に干渉する、一つのドス黒い青色の“それ”を遠目で確認した――

――鼓動するよう蠢く、液状の巨大な身体。飛行機と海洋生物のエイを混ぜたかのような形状で空を飛ぶその物体は、液状の翼をゆつくりと羽ばたかせながら、遊覧飛行といった調子で不気味に暗がり泳いでいる。

だが、“それ”の体内には大量の人間の姿がうかがえた。それも、破損した人間の死体が九割方を占めるその光景。死体が液状の中を漂う衝撃的な光景に加えて、“それ”の下半分から地上へと伸びていく無数の触手が、逃げ往く新鮮な人間をひっ捕らえては己が体内へと取り込んでいく残酷な模様が、少女の視界で生々しく展開されていた。

無数の触手の先に送り出された、人間の死体。自身と同じ制服姿を身に纏い、触手からその半身を飛び出していくと、死してもなお“それ”に操られるようその両腕で生きている人間に絡みつき、そのまま触手の液体に引きずり込んで本体へと搔っ攫っていく。

宇宙からの侵略者。その言葉を彷彿とさせる光景。そして、優雅に泳ぐ“それ”が次第とこちらに向かってくる様子に、少女の周囲もまた大パニックを引き起こしながら逃げ惑うのだ。

「痛ッ、いたっ！」

立ち止まって眺めていた少女は、「それ」から必死に逃げようと疾走する周囲の人々に押し退けられた。それも、前方から雪崩のように押し寄せてくる人の波にどんどんとぶつかられ、少女は押し出されるようにしながら波に吞まれて体勢を崩していく。

直にも、触手が少女周辺の一帯へと伸び始めていった。——伸びる液状の先で両腕をかざしていく死体。身体各部位が欠損したそれらが迫り始めると共に、悲鳴や絶叫、また、？み込まれたことで連れ去られる人々や、それらを助けようとして必死に手を伸ばす人々など、阿鼻叫喚の混沌模様を描いていく地獄のような現場。

押し倒され、地面に突っ伏した少女。そこから次々となだれ込んでくる人々に容赦なく踏みにじられた少女は、土や泥だらけとなった汚れを全身に付着させながらも、何とかして立ち上がろうと、近くの存在へと手を伸ばして掴んでいく。

と、その服の裾を掴まれた人物は、少女の手を振り払うようにして力強いピンタを食らわせていったのだ。

「この、クソ——離せ菜子！ 最後の最後まで私らの邪魔をするなッ！！」

同じ屋根の下で住んでいた彼。

傍に妻らしき人物を連れながら、共に逃げようとする最中に介入してきた少女へと彼はセリフを続けていく。

「居候の分際で、よくもなめたような真似ができたなッ!! この、食費から学費までのあらゆる費用で私らの財産を食いつぶす害獣もどきがッ!! いいか!? お前を引き取ったのは、お前のご家族と縁があったからだ!! だが、今日でそれも終いだ!! お前は今から、モンスタ―に襲われる不運な事故で死ぬんだからなッ!!」

起き上がろうとする少女。だが、そんな少女の腹を彼は思い切り蹴り上げていくと、少女は「ギャッ」と声を上げながら足で薙ぎ払われ、勢いよく地面を転げ回る。

そして、逃げ惑う人々の障害物として少女は地面に倒れ込み、道行く人々に容赦なく踏まれては蹴られてを繰り返した。——背中に打

ち付ける靴の先。長髪を踏みにじる泥まみれのそれ。腰や脚を蹴飛ばして少女の身体を転がしていき、仰向けになった姿勢で腹や顔を踏みつけられ、悲鳴にもならない音を喉から鳴らしていく。

……直にも、周囲の悲鳴が大きくなってきた。

全身から血を流す少女。痛む全身でよろよるとなりながら立ち上がっていくものの、フラつく足元が少女の体勢を奪いにかかり、石壁に寄り掛からないとまともに立つことも許されない。

そうして顔を上げた視線の先。逃げ遅れた人々が触手に連れ去られる光景も、すでに間近となつて眺めることができた。

……少女へと向かつて勢いよく伸びてくる触手。ターゲットにされていることを認識した少女は決死の思いでスカートに手をかけていき、そこに仕込んであるナイフで応戦するべくショーツに挟んだそれを取り出そうとする。

だが、あるはずの感覚が、そこに無かった。

地面に転がるナイフ。ケースのみがショーツに挟まる光景に、先の人波に揉まれてナイフが飛び出してしまったことを悟る少女。

後頭部を石壁にぶつけ、脱力していくその様子。

死ぬことは怖くない。死んだところで、*“あつち”*で待つ大切な人と会うことができるから。

昼間にも口にしたセリフ。偽りの混じらない真実の言葉。だが、一方として、これまでに感じたことのない恐怖を自身が抱いていたこともまた、少女は何となく自覚していたものだ。

……生きることの楽しさを、体験してしまったから。

口や頭部から血を流す少女。そこから項垂れて視線を下げていくと、全てを受け入れるかのように体勢を崩して座り込んでいき、自身もまた*“それ”*の一部になって死んでいくことに納得しながら目を閉ざそうとした――

――衝撃波。前方から、束となつて一気に降りかかる大気の波動。

身に覚えがある。昼間と全く同じのそれに、少女は思わずと目を見開いた。

右脚を地面に打ち付け、その一本で直立する黒ずくめの姿。その長

い脚が人類の秘宝とも比喻できる美しさを放つていくと、揺らす白髪
のポニーテールを荒ぶらせながら、その場で火花を散らす横回転で踏
みつけた触手を無理やり捻じ切っていく。

そのまま小さくジャンプして触手の先の死体を踏みつけていくと、
それを靴先に引つ掛け、滞空したままの豪快な一蹴りで他所へと蹴り
飛ばしてしまう。

着地し、それと同時に踏み出した刹那のステップ。そこから間髪容
れないサマーソルトキックを繰り出していくと、その軌道に存在して
いた液状の触手は真つ二つに裂け、それは根本である本体にも届くな
り、衝撃波が走った。それは“それ”は逃げるように飛行の軌道を変えていっ
た。

夜の龍明に迸る、華麗なる漆黒が織り成す縦回転の軌跡。未だ浮い
ていた“彼女”が鮮やかに着地をしていくと、すぐにも少女へと駆け
寄ってきた一つの存在へと言葉を掛けていくのだ。

「柏島くん、菜子ちゃんをお願い」

「ええ！ 分かっています！ ——それにしても、今日の別れ際にユ
ノさんがこつそり提案した護衛の継続がまさか、このような形で生き
るなんて思いませんでした!! 本当に、菜子ちゃんの見張りを続けて
良かったですね!!」

「いいから、早く連れていきなさい」

傷付いた少女をおぶっていく彼。そして凜々しく佇む彼女から離
れるように彼は駆け出していくのだが、おぶられた少女は力を振り絞
りながら、投げ掛けるようにそのセリフを上げていく。

「ユノさんは…?!? ユノさんは、どうするの…?!?」

無意識と流していた、少女の涙。様々な感情が混ざり合った証拠と
共に声を上げると、彼女はその言葉を背中で受け止めながら、顔だけ
で振り返るようにしてそう返答した。

「私はこれから、英雄ヒーローごっこをしてくるわ」

跳躍。

夜の龍明に溶け込むよう飛び立った彼女の姿。一瞬にして姿を消
した彼女の行方に少女は遠くを見つめ、心配でも不安でもない、一種

の安堵さえも抱きながら姿無き彼女の背を見送った――

英雄執行【4513文字】

夜の街に騒ぎをもたらす飛行生物。発展する都市部の上空に姿を現した“それ”は、体内に蓄えた大勢の人間を触手に送り出して地上を侵略する。

既に、多くの人々が“それ”に連れ去られた。絡まった触手から腕を伸ばす人間の死体が、欠損した身体で生者を引き摺り込んで上空へと輸送する悪夢のような光景。

地球外生命体。まるでUMAに分類されるような外見と攻撃。飛行機とエイの姿が混じる意思を持った液状が優雅に泳ぐそのサマは、騒ぎを聞きつけた数機によるメディアのヘリコプターによつて追跡が開始されていた。

ヘリコプターから身を乗り出した女性リポーター。脇のカメラマンと共に中継を繋いで現場の様子を説明し始める。

「これは——宇宙からの来訪者とも言えるでしょうか!? 従来のモンスターとは一線を画す、我々の常識を覆すかの如く龍明に舞い降りた異質な存在……!! 不吉の象徴とも見受けられる風貌や造形に、もはや同じ世界に生きる生物とは思えない不穏さを感じさせます……!!」
声を震わせる女性リポーター。遠目から眺める“それ”に、心の底から恐怖する声音が中継に反映されていく。

と、彼女が一区切りをつけた言葉の直後。次のセリフの合間を縫うように宵闇から姿を現したのは、真紅の軌跡を描きながら龍明に降り立つ最強の超人——

地上に着地した紅は、仮面越しに見上げた視線で上空の“それ”を眺め遣る。それと同時にメディアのカメラは一気にそちらへ向けられると、「あれは——JUNO^{ジュノ}です!!」という歓喜混じりの声で流浪の救世主を迎えた。

大地を蹴り出す紅。それが逃げ惑う人々の隙間を駆け抜けていくと一気に跳躍を行い、常人の視力では追いつけない速度を以てしてピルの側面を駆け上がり出した。

そこから壁を蹴つて一直線の軌道を描いていくと、今も人間を連れ

去る触手の一本をぶち抜いて飛沫を散らし、それを身にまとう速度で振り払いながらも着地を行って、助け出した成人女性を優しく下ろしていく。

彼女のお礼は、一切と聞かない。その人が言葉を口にしようとした瞬間にも、その場から消え去るよう刹那の速度で駆け出した紅。ぶわっと巻き起こる疾走の風圧と、真紅のコートが象る残像のみを街中に残して巡り出した紅の軌跡は、上空から次々と伸びてくる触手のほぼ全てに対応し始めた。

連れ去られる寸前の男性。息子だろう小さな男の子が泣き叫ぶその脇を残像が通り抜け、子供共々その場から男性らを攫っていく。その残像が地上を駆けるなり跳ね出すと瞬く間に遠くのビルを蹴り出して高く跳び、軌道上に存在する三本ほどの触手を一気に貫いて地上に降り立った。

男性とその息子。その他の男女が呆気にとられた表情で地面に座り込んでいた。

目の前に立つ紅。目と口を紅く光らせた仮面を向け、ガントレットを装着する右手で軽く手を振ってみせるなり、その場からすぐに飛び出していつて次の対象者へと駆け付ける。

地上に伸びる触手を片っ端からぶち抜いていく紅。そのついでとして捕まった人々を抱え込んで地上を駆け抜けていき、急カーブと共に彼らを投げ出すように手放して、付近に張られたテントに跳ね返らせる。それが衝撃を吸うことで助け出された人々がほぼ無傷で済んでいく中、紅はビルの側面に一直線を描くと、発出するような勢いで上空へと飛び始めたのだ。

途中で触手に追い付き、女の子を救い出す。——だが、“それ”に目標を定められた紅は大量の触手を仕向けられ、空中という自由の利かない状況で集中砲火の突き攻撃を受けることとなった。

尤も、紅にとつては然したる問題ではなかった。上空を目指す紅の運動はそのままに、少女を強く抱きしめて触手を迎えると、迫ってきたその攻撃に合わせて液状に足を置き、不安定なそれが足に沈むその前に駆け出すことで、液状の上を走り出すという離れ業を見せ付け

る。

一本の触手を駆け抜けて、その道中に連れ去られる男性へと手を伸ばす紅。そして、彼を連れ去る死体の腕がもげるほどの勢いで男性を触手から取り出すと、すぐにも迫ってきた攻撃を寸前で避けるよう空中へ身を投げ出し、真つ逆さまとなりながら地上へと落下した。

脳天からぶつかる。眺めることしかできない皆が、肝を冷やしなから見守ることしかできない。

だが、直撃の前にも紅は高速の半回転で地上に脚を向けていくと、高所から落ちた衝撃で両脚を地面にめり込ませながら、助け出した人物らをその衝撃から守るよう抱え込み、その場で解放してあげた。

男性と女の子が、この世のものとは思えない体験に腰を抜かしたりする。それを傍に紅は両脚を地面から引き抜いて上空を見上げると、飛行する“それ”が逃げるよう離れていく様子から、数歩と歩いてみせて凛々しく佇んだ。

上空のヘリコプターから、リポーターの女性がうかがうようにそれを口にしていく。

「華麗なる救出劇……!! 人間業ならぬ超人業で、開いた口が塞がりません……!! ですが、さすがにJUNO^{ジュノ}であろうとも、我々以上の高度で飛行するあのモンスター相手には、手も足も出せないのでしょうか……?!」

雲が泳ぐ位置にまで到達する高度。夜空を気持ちよく流れる暗がりの雲を目指して突き進む“それ”を紅は眺め続けていくと、直にしてまた数歩と歩き出し、そして――

――大気に、足を掛けた。

「な?! 何ということでしょう……ッ?! JUNO^{ジュノ}が――JUNO^{ジュノ}が、空を走っています……!!」

透明な階段でもあるのだろうか。次にも展開された光景は、大地を蹴り出した紅が、大気にできた階段を上るかの如く駆け出したその様子。

落ちる前に足を動かし、大気に足を掛けてそれを踏み越えていく。規格外。常識に囚われない空中の疾走で“それ”を目指す紅へと、

液状は迎え撃たんとばかりに触手を総動員させて一斉攻撃を仕掛け始めた。

迫りくる、数の脅威。一つ一つが意思を持つかのような不規則に蠢いて惑わせてくる。

だが、紅にはまるで通用しない。段差を上る動作から、大気を一步步蹴り出すような動きへとシフトさせていくと、前方から襲い掛かるそれらを受け流す構えとして、軽い横回転を始め出したその姿。

降りかかる攻撃を、紅は上昇しながら次々と避けていく。横回転の動作で攻撃を掠めるよう華麗に避けていき、触手と触手の合間をくぐるようにして確実に距離を詰めてくる仮面の超人。

——右腕を引き絞る。

目前にした対象の腹部分。多くの死体に紛れるよう、その中を漂う連れ去られた生者の人々が紅へと手を伸ばしていく。

——ここだ。

突き出された、絶対強者の破壊的一撃。液状を突き破るように通り抜けた紅の姿と共にして、束の間、“それ”は生き物ならざることもつた音を悲鳴としながら爆発するよう四散した。

弾けだす中身。龍明の夜空に放り出された大量の人影に、駆け付けてきた地上のヒーロー達は目を疑うような見開く表情で見上げるばかり。

——両腕、両脚を広げた紅。この遙か上空であろうとも、我が身は自由自在である。そんな、解放とも見受けられる大の字で落下を始めた、その瞬間だった。

軽く回転して大気を蹴り出し、発出するよう飛び出した紅は、上空に放り出された人々や死体の救出劇を繰り返すこととなる。

一人一人落ちる人々や死体を数名と掻き集めては、テーマパークの絶叫マシンを遙かに凌ぐ高速の落下速度で地上を目指す。そして地上に降り立っては彼らを地面へと放り出し、大地を跳ねてビルを駆けでは、発射するような軌道で次の人々を掻き集めていくのだ。

多くの者は、その最中に失神していた。屋上に降り立ってはそこへと置いて空へ駆け、地上に降り立っては野次馬に任せてビルから跳

び、近くのヘリコプターへと真つ直ぐ突っ込んできては、驚きで悲鳴を上げたりポーター達に任せてすぐ身を投げ出し、団体でまとまりながら落ちる数人に対しては、彼らを一齐に地上へと投げ遣ること、地上のヒーロー達に受け止めさせていく。

……降ってくる？

生きている人々が、こちらに向かって落ちてくる彼らの視界の中――

「――お、落ちてくる!! 生存者と思しき人々が!! 一つの塊になって!! う、受け止めろ!! 受け止めろッ!!!」

一人のヒーローが叫び上げると共にして、ヒーロー達は慌ただしく動き始めた。

個々の能力を活かす場面から、凶体のでかいヒーローがその身体で受け止める場面まで、その模様は様々。その場に居合わせたヒーローの人数分だけの塊が、彼らに向かってピンポイントに落下していくと、彼らもヒーローの名を冠するだけあって見事、一人も取りこぼすことなく生存者を受け止めてみせていった。

数分にも満たない、宵闇に描かれた真紅の軌跡。空に刻まれる紅の残像が瞬く間に落ち往く人々を救出し、そんな奇跡のような様子に、地上の彼らは言葉無き感嘆で上空を見上げるばかり。

そして、最後の仕上げとして紅は、四散した液状の身体の、その一部分だけが逃げようと上空を漂っていたところへと向かって、真つ直ぐと、大気を駆け出していったのだ。

生存者や死体は全て、地上へと救出された。そうして動力源とも言える全てを失った今、その一部分を活かしているのだろう。最後の動力源が、紅の目と合っていく。

――学生服。最近になって見慣れたそれを着用する一人の少年が、おぞましいものを見るような目で視界のそれに恐怖を示した。

……だが、同時にして少年は手を伸ばしていた。

この恐怖は、紅を恐れてのものではなかった。――それは、今現在と置かれた自身の状況における、死を間近に迎えたことで湧き上がる恐怖の表れ、とも受け取れるかもしれない。

助けて。手を伸ばす少年。

液状の中、取り込まれた身体と共に迎える滅びの運命に悲観する様子。

俺も、みんなのように助けてほしい。訴え掛けるその悲痛な目。自分もまた真下の皆のように混沌の闇から救われて、いつもの平穏な日常に戻れることを心から望む生への執着を思わせる。

想いが伝わったのだろう。少年が必死になって伸ばすその手を見ると、紅もまた掴み取ろうとするかのように少年へと手を伸ばしていった――

――が、その手はすぐにも引き下がり、狙いをつけるように引き絞られる。

瞬間。夜空が歪む破裂の轟音。大気中の衝撃が地上にまで伝わる、破滅をもたらす正義の拳。

目指していた雲は、塵にもなれず宵闇へと消え失せる。同時に、その威力を直撃で食らった液状とその中身は、最期に働かせた知能によつて瞬間的な走馬灯を脳裏によぎらせた。

同級生を殺し回ってきた、殺戮を繰り返す場面の数々。冷酷かつ残忍につくり出した亡骸を捧げるそんな日々の中、自分に向かって一つの強力な蹴りをかましてきた漆黒の存在が、ふとよぎり出してくるのだ――

――自身の行いが、とある正義の怒りに触れていた。そして、このような存在に救いは要らないという世間とは異なる独自の判決を下し、信条とする己が正義に突き動かされるまま、こうして裁きの鉄槌を下しに来たのだろう……。

飛沫の一滴も残さない一撃。概念ごと屠る裁きの鉄槌が炸裂したことにより、此処に在ったハズの一つの存在は、上空の彼方と共に歴史の闇へと送られた――

最善の選択【2792文字】

繰り返す昼夜の、その中間。夕暮れの黄昏が龍明の防壁に沈む、地上よりもだいぶ高度のある地平線。日の入り時刻よりもだいぶ早い生活習慣によつて、周囲で光り出す光景に混じるようその探偵事務所にも明かりが点けられた。

鍋でぐつぐつと煮込まれるシチューの泡。それは菜箸で混ぜられて具材がゴロゴロと漂い出すと、次にもその場を離れたコック柏島はお皿に乗せられたお手製アップルパイを持ってきて、先にテーブルへと出していく。

そして出来上がったシチューを食器に取り分けていくと、普段よりも一つ多く用意した三人分の食事をテーブルに移し終えて、すぐ隣で向き合いながら座る二人の女性陣へと声を掛けていった。

「チェスに集中してる場所すみません。ご覧のように夕食の用意ができましたので、三人でいただきますよう」

ピンク色のエプロンが似合う柏島歡喜。彼に声を掛けられた葉山ユノは余裕な表情で「ええ」と答えていく中、顔に貼った絆創膏やシツプをくしゃくしゃにするほどの難しい表情で悩んでいた少女が、ふと顔をあげて驚きの声を上げていった。

「ん？——んえ?! え、これカツキ作ったの!? うそ、カツキが料理できるってホントだったんだ……」

「菜子ちゃんの中の俺って、普段どんな印象で映っているんだろ……」
呟く柏島歡喜を他所にして、シチューとアップルパイに喜びを見せていく蓼丸菜子。香りも吸い尽くすように嗅ぎまくる様子を見せつつも、葉山ユノの特等席の隣に座って三人で席につき、食事の挨拶を済ませて夕食の一時を過ごしていった。

——やりかけのチェスがそのままの空間。午後九時を指す時計を目にした柏島歡喜は、椅子に座ってテレビを覗いていた蓼丸菜子へとその言葉を掛けていくのだ。

「時間も時間ですから、そろそろご自宅に帰られては?」

「え……あ、うん……。そう、だね……」

「……大丈夫ですよ。学校帰りに、またこうして探偵事務所に寄り道してきてください。ユノさんは菜子ちゃんを大歓迎しますし、俺だつて大歓迎ですから」

「まあ、うん……」

……俯く蓼丸菜子。躊躇いを見せて動こうとしないその様子に、柏島歓喜も事情を知るからこそその申し訳なきで顔を渋らせていく。

——沈黙。二人が中々に切り出せないその空気に、事務机に脚を乗せて座っていた葉山ユノは、立ち上がる動作で物音を立て始めた。

「菜子ちゃん」

ひたひたと歩き、蓼丸菜子の後ろに歩み寄る葉山ユノ。そして少女の肩から腕を通して優しく抱きしめるようくっ付いていくと、蓼丸菜子もまた彼女の腕に手を回して離れようとしなかった。

「今日は帰りましょう。ご自宅で貴女の帰りを待つ人々がいるわ」

「……アイツらなんかが、アタシの帰りを待つてるワケがない。——あの日、アイツらアタシに何て言ってきたと思う？ 『居候の分際で、よくもなめたような真似ができたな』、『この、食費から学費までのあらゆる費用で私らの財産を食いつぶす害獣もどきが』。そんなことを言われて帰りたいと思うヒトなんか、フツーはいないでしょ……」

「それでも、彼らにとつても貴女に帰ってきてもらわないと困るのよ。色々ね」

少女の頬に、自身の頬をくっ付けていく葉山ユノ。ぴとつ、とくっ付いた温もりと、隣から香る安堵の匂いによって蓼丸菜子は唇をかみしめるようにして、堪える感情で次第と目を震わせ始めていく。

離れたくない。もつと二人と一緒にいたい。

……柏島歓喜は、頭を搔いてどうするべきかを考えていた。だが、彼が言葉を掛けるよりも先に少女へと問い掛けたのは、この探偵事務所の主である葉山ユノからだつた。

「住む場所を変えたい？」

「……え？」

頬をくっ付けたまま、少女は少しだけ彼女へと振り向いていく。

「どういふこと……？」

「もし菜子ちゃんが良しとするのなら、この探偵事務所に住居を移す
選択肢もあるわ」

……………。

葉山ユノの腕を、蓼丸菜子はぎゅつと抱きしめていく。そして目元に雫を溜めながら少しばかりと沈黙を貫くと、次第にも喉を鳴らしながら、堪えていた感情に身を任せて大粒の涙を流し始めていった。

「…………ツ住みたい。住みたい…………つ。そんなこと言われちゃったら、アタシ…………ホンキで移り住むこと考えちゃうよ…………ツ！」

「もう大丈夫よ。今まで独りにしてしまつてごめんなさい。長い間、散々と、心が押し潰されてしまいそうな強い孤独と戦い続けてきたのだと思う。——これからは一緒に過ごしましょう。私ももう、貴女を遠くから見守つたりしない。…………これからは、より近い所から貴女を護り抜くわ」

「ユノさん……………つ、ユノさあん……………うあ、うああ」

葉山ユノの、自身の座る姿勢の後ろから交わしてきた優しい抱擁に
蓼丸菜子は泣き崩れた。

彼女に寄り掛かり、我慢し続けてきた気持ちを爆発させた今。…………
蓼丸菜子という一人の少女もまた、漆黒に身を纏いし流浪の救世主に
救われた存在の一人なのかもしれない——

「じゃあ俺、菜子ちゃんをご自宅まで送り届けてきます。…………菜子
ちゃんの件は、後日ユノさんからお伺いするということで、まだしばらくは
このお見送りが続きそうですね」

そう言う柏島歓喜は玄関で葉山ユノと会話を交わし、蓼丸菜子を連れて
夜の街へと駆り出された。

二人を見送った葉山ユノは、ひとり残った探偵事務所をひたひたと
歩き進めていく。

それは真つ直ぐと窓辺へと向かつて夜景を眺めていくと、ふと踵を
返して事務机の引き出しを漁り始め、埋もれた「写真」を取り出して
は窓へと近付いてから、「それ」へと視線を落とすつつそう呟いた。

「……………これで良かったのかしら」

迷い。彼女らしからぬ不安な声音でそう言うと、手元のそれを眺めながらセリフを続けていく。

「数年の間に変化してしまっていた家庭内事情。これに気付かず、結果的により深い傷を負わせてしまったことは、私の落ち度だわ。……本当にごめんなさい。けれども、下手に私が関わってしまっても最後、あの子も逃れられない運命に晒されて、そう遠くない未来にも、より一層もの脅威と対峙して命が脅かされてしまうかもしれない。——ねえ、これで良かったのかしら……。私は果たして、あの子に対して最善の選択を選んであげることができたのかしら……」

事務所の明かりで反射する彼女の姿。写真を眺める姿に凜々しきの微塵もなく、彼女らしくない肩を下げた棒立ちのサマを映し出しながら、その顔にシワを寄せた力む表情をひとり浮かべて佇んでいた——

『今日限りで、俺はあんたの世話をやめるツ!! それで!! この力でこの憎たらしい世界を滅ぼして!! 俺は、新しい世界を創り上げてみせるツ!!! ——この力は、ありがたくいただいでいくぞ!! だから、後のあんたの世話は——』

別の奴隷にでも任せておきな——

……蠢く液状。暗がりの地べたに這いつくばる小粒の“それ”は、小さな触腕で身体を引き摺るようにしながら宵闇の深淵へと消えていった。

1章4節

自由な正義【4032文字】※お色気シーン有

煌びやかな水色。水晶のようなそれが光源となる、虚無よりも途方の無い形容し難きその空間。此処をこじつけでもいいから例えとして言葉に言い換えろと言われれば、少々と苦しいかもしれないが、暗闇の深淵の中と言えば多少なりの想像が及ぶかもしれない。

白色の、線のような何かが平たく走っている。これも床に値するものだという認識でいいだろう。そして、この空間でひとり佇む「何か」が人の影を象っていると、伸ばした腕と、指し示した人差し指のようなそれで目の前に水面のようなものを作り出す。

そこに映し出された一つの光景。——発展した大都市を往く日常の様子。世界を包む宵闇が天井の月を飾り付け、重力に従うよう地上で暮らす二足歩行の生物たちが、四角く整えられたガラクタだらけの窮屈な世界の中を歩き回っていた。

建造物から射す光。キラキラと光る街の中。ネオンとも言える視覚に訴え掛ける強い明かりは、浮かれ気分の赤い頬な人類たちを色濃く照らしている。

瓶を持ち、ネクタイを頭に巻きながら、着崩した衣類と男女が零す笑顔の顔ぶれ。今日はどうやら、皆にとつて特別な日らしい。それを理解した「何か」は手のような陰りを動かして映像をあちこちへやっついていくと、そのどれもに映る男女が並ぶ光景を見て、「何か」はか弱い少女の音を模倣するよう呟いた。

「いいな。楽しそう」

かざす腕を下げ、映像が途切れていく。

わずかな灯りが消え去って、水晶の水色のみ虚無が支配した。陰りも暗闇も見分けがつかない其処で「何か」は何処かへ歩き出すと、次の瞬間にも走り出す音がひたひた響き出し、床を蹴飛ばして跳躍したらしい短い音。そして、その先で起こった、大型の兵器が開閉する自動ドアのような、重量感ある駆動式の機械音——

——何も無い龍明の上空から、薄っすらと浮かび上がった透明の自動ドア。

そこから飛び出した、小さな女の子。百五十五ほどの小柄な背丈の身長で、銀色のパーカーと青色のホットパンツ、黒色のソックスに、白色と黒色の運動靴という無難な格好の少女が姿を現していくと、重力に全てを委ねるかのような落下を始めていったのだ。

脳天から、真っ逆さまと落ちていく少女。未だ風貌が完全に明かさないそのアングルを以てして、落下の運動を楽しむようくると回りながら落ちていくその存在は、そのまま煌びやかに光る大都市を指して真っ直ぐ進むかのように、その運動に身を任せて落下し続けたのだった——

——銀色に光る星が真っ直ぐと落ちていく、同時刻。

街中が上がった悲鳴。モンスターが現れた叫び声を合図に颯爽と推参したのは、真紅のコートに身を包んだ謎のヒーローJUNOの姿。

宵闇が似合う紅の存在に野次馬が盛り上がっていくと、街を破壊する魚人のような巨大なモンスターを相手に、もはや一方的とも見て取れる圧巻の暴力を繰り広げてみせた。

ヒレのような手の引っ掻き攻撃を鮮やかに回避し、残した真紅の軌跡に惑う相手へと、すべてを無に帰す拳で殴り飛ばしていく。そうして殴り飛ばしたモンスターへと即座に追い付いたJUNOがモンスターの背に殴り掛かっていくと、またしても吹き飛ばされたモンスターという絵面が何度も展開されていくのだ。

それも、上空のヘリコプターから眺めると、飛ばされるモンスターの軌道は星型を描いている。これが紅の残像と共に地上に象られていくと、その星型の中央でJUNOが降りかかり、これに押し潰されたモンスターがすぐにも持ち上げられて強烈なボディブローを一発。そして、打ち上げられたモンスターに向かって引き絞られた右腕と、突き出された右拳による、概念をも消し飛ばす規格外の一撃。

放たれた瞬間にも歪んだ空間と、その歪みで生じた空間と空間のズレの狭間に送られるように、その場から消滅したモンスター姿。これによって上空の雲がドーナツのように穴を開け、周囲の野次馬は、伝った衝撃によって全員が地上から浮き上がっていった。

——追加の耳鳴り。その拳は、一層と磨きがかかっている気がする。

開けた街の中央に佇むJUNOの姿。足元のクレーターを全く気にしない足取りでどこかへと歩き出していく、その最中で掛けられた男性からのとあるセリフ……。

「す、すみません……！ あ、あの！ ……今しかないと思って、あの……！」

振り向く仮面。その視界に映っただろう、スマートフォンを手に持つ男性の姿。

男性は、うかがうようにJUNOへと言葉を続けていった。

「は、初めてテレビで見た時から、その強さに惚れました……！ それで、チャンスは今しかないと思って、つい、声を……！ あの、写真、撮らせていただいても構いませんか……!?!」

差し出されたスマートフォン。だが、JUNOは興味無いと言わんばかりにピツとそっぽを向いて歩みを進めていく。

「お、お願いします……！ 俺の彼女も、あなたのファンなんです……！」

ピクツ。その足を止めた、気分屋の紅。

「俺の彼女も、前にあなたに助けられた者の一人です。でも今は、モンスターに襲われた怪我の後遺症で、とても苦しんでいます。今も入院中の彼女なんです、その彼女の病院先での唯一の楽しみが、あなたの活躍を生中継で観ることなんです！ ——今も多分、俺の彼女はあなたのことを見守っております。そして俺は、そんな彼女の生きる希望でもあるあなたの写真を、どうか、手元に送ってあげたい。……今の俺達にとって、あなたは唯一無二の希望なんです。なので、どうか……撮影をお願いできませんか……？」

彼の言葉に偽りは無い。それを確信する彼の真っ直ぐな瞳と向き

合った寡黙なJUNOは、彼に向き直ると共にその場で佇んでみせた。

「ッ！——ありがとうございます……!!」

すぐに駆け付ける男性。そしてスマートフォンで間近のJUNOを撮影していくと、一区切りというところでJUNOから男性へと歩み寄り出し、これに彼は眺め遣ることしかできずにいた。

彼が手に持つスマートフォンを、JUNOは取り上げた。突然のそれに男性が驚きで思考停止していくと、その間にもJUNOは彼の横へと位置を変え、彼の肩に左腕を回して少し寄り掛かり、右腕を前にかざして右手で持つスマートフォンを向けていく。

肩に回した左手でガントレットのピースサイン。彼も突然のそれに困惑しながら引きつり笑いをしていくと、直にもポチッと押されたカメラのボタンによって、二人はフラッシュの光を浴びていった。

——カシャツ。

スマートフォンを返していく。これに男性が困惑のまま受け取ってお礼を言っていくと、JUNOは彼の肩を数回と叩いてから上空を見上げていき、中継を繋ぐカメラに向かって軽く手を振ってみせてから、刹那の跳躍によって瞬く間とその場から姿を消していったのだ。

それとほぼ同時にして、消え去った英雄の居た地点へと、我先にと便乗する野次馬の波が押し寄せた。

……世間に影響を及ぼし始めた紅の存在。正規の英雄ではない気分屋の救世主は龍明の屋根を飛び越え地上を渡り、そうすぐにもひと気の無い路地裏へと降り立っては待ち人の女性へと歩み寄っていく。

紅の訪れに、女性は小走りで駆けつける。そうして茶色のロングスカートと黒い長髪を揺らしながら紅に近付くと、ひたつとくっつくようにして寄り添った。

くっつく女性を、両腕で優しく抱いていくJUNO。その温もりで頬を火照らせた女性は、何かのお礼らしき感謝のキスを仮面へと捧げていく。

……より一層と抱き寄せる紅の腕。背中に手を添えて女性を見下ろすその背丈と、女性の股にあてがうよう踏み込んだ美麗な右脚。そ

して、着用する仮面の下半分が突然とスライドするよう上半分へ格納されていくと、露わにした健康的な色白の肌と口元が、女性の口づけを求めだす。

すぐにも顔を近付ける女性。だが、JUNOは背に回していた手で女性の手を取っていくと、それをゆっくりと自身の胸へと当てていき、再度の確認を女性へと促したのだ。

……ふにつ。柔らかい弾力——

「……………え？ 女の人……………」

見開いて呆然とする女性。……微笑みながら頷くJUNOの様子。それでも、本当にいいの？ 寡黙を貫く「彼女」の確認。これに女性は少しばかりと考える様子を見せていくと、次にも下した決断と共にして、女性は吸い寄せられるように、「彼女」の唇を目指していった——

「……………こんな不束者でよろしければ——」

交わる唇。温もりを帯びた唾液の音と、女性の舌に絡まる「彼女」の舌。

振るう拳に相応しい攻めの姿勢が、「彼女」のディープキスにも現れる。それでいて、「こちら」でも百戦錬磨な「彼女」の責めは、直にも女性の全身を撫で掛ける両手の愛撫となつて本格的に始動する。路地裏の、建物の壁に女性を押しさえ込んだ。そして「彼女」の両手が女性の手首を押しさえて自由を奪い、股にあてがった脚で更に女性を愛撫しながら強引なキスで責め立てる。

力を持つ者による、力ずくなシチュエーション。灯りの無い暗がり二人、淫らな行為に及ぶ背徳感。

溶けるように力が抜ける女性。そんな女性を「彼女」は寄り掛かるように一層と壁に押しさえ付け、自身を覆ってくるような、自身を求めて迫ってくる力ある者から受ける抑圧に女性は昂りを見せていく。

——ロングスカートが湿り始める。温かなキスで顔を真っ赤にした女性を見下ろすようにして、「彼女」はその耳元に口元を近付けていくと、寡黙というルールを破るようにその静寂な問いかけを行ってきたのだ。

暗がりに紛れた、口を動かすその様子。これによって女性は恥ずかしがるサマを見せていくと、そんなに時間をかけることなく頷いていって、「彼女」もまた恍惚な表情の口元を浮かべながら夜食を済ませていくのであった。

女探偵と助手（雑用係）【2490文字】※お色気シーン有

「ただいま戻りましたー。帰り道でユノさんの好きな釜飯を買ってきましたので、お昼ご飯にしましょー」

探偵事務所の扉を開ける柏島歓喜。それを閉めてカギをかけていくと、足元の見慣れないサンダルに來客を悟っていく。

ひたひたと歩き、中の様子をうかがった。だが、人の気配と物音は真横の洗面所から感じられ……。

ノックして、「失礼します」と入る彼。そして洗面所の奥に繋がる浴室で蠢いた影を見ると、同時にして「おかえりなさい柏島くん」と反響する葉山ユノの声が聞こえてきた。

「シャワー中のところすみません。あの、來客がいらつしやるみたいですが……」

「ええ、気にしないで。今、対応中だから」
「対応中って……」

並べられた、衣類を入れるバスケット。そこに見慣れない女性もののロングスカートが見えたことで、柏島歓喜は「……俺、事務所で掃除してます」と一言告げて洗面所を後にしていった。

去り際にも、浴室から掛けられた「すぐ行くから」の彼女のセリフ。それと同時に響き渡ってきたのは、聞き慣れない女性の「あつ、やんっ！ まだダメ、いるから！」という甘くて甲高い声音の反響。そして蠢く二つの人影が絡み合っていくと、柏島歓喜は背にした喘ぎ声を無視するように事務所へと歩みを進めていった――

「そりゃあ、ユノさんのご活躍は俺が間近で一番見ておりますから、ユノさんに対する信頼は周囲よりも厚く、確実なものではありませんよ。……ですからってユノさん、夜に救助した女性の方を真昼から連れ込んで行為に及ぶのも、現場に勤める雑務の人間としては複雑に思うところがあるワケです」

女性が帰宅した後に柏島歓喜はそれを言い、共に釜飯を食しながら向き合うその空間で葉山ユノは凜々しくそう返していく。

「こういう息抜きは必要なの。ヒーローにも休暇は必要でしょう?」

「厳密に言えば、ユノさんはヒーローではなく探偵ですけどね」

「でも人助けをしているじゃない」

「確かに、引き受けた案件に関わるモンスターは、ユノさんがきつちりと対応しております。——昨夜も、お見事でした。俺も帰宅した後、自宅でご活躍を拝見しておりましたよ。それも、ユノさんには珍しくファンサービスもしていたじゃないですか。しかもその相手が男性だったことに、俺は驚きを隠せなかつたもんです」

「でしょう? だから、そのヒーロー活動に見合ったご褒美が用意されていてもいいじゃない」

「それとこれとは話が別でありますし、こういう時だけヒーローだという主張で納得させようとしてくるところも、何と言いますか……なんかもう、いいです」

手に持つ箸の尻で頭を搔く彼。それを前にして満足げに笑みを見せた葉山ユノがニヤアとしていく中で、柏島歓喜はふと真面目な面持ちでそんなことを口にし始めたのだ。

「俺がここに来て、それなりの時間が経ちました。最初に勤め始めた頃から今にも続いて、ユノさんの探偵としての矜持や人助けの動機は一切と変化していないという印象を抱いているものではありませんけど、それとは別にして、ユノさん最近、やけに人助けの頻度が増えましたよね」

彼のセリフを耳にして、葉山ユノは動かす箸の手を止めていく。

「近頃、そういう気分の日が多いだけよ」

「それも、最近はやけに世間との距離が近くなったように感じられます」

「だからなに?」

「ユノさん、実はヒーロー向いているんじゃないですか?」

柏島歓喜の言葉に、彼女は真顔のまま速攻で返していく。

「イヤよ。ヒーローになんかなりたくない」

「俺、そこが分からないんです。ユノさんは確かに自分の世界を大切にしている方ですし、何よりも束縛を嫌い、自由の身分で伸び伸びと活動なされるタイプであることは理解しております。ですから、こうして法律のギリギリセーフとギリギリアウトを繰り返すグレーゾーンの探偵活動を本職としているんでしようけれども、俺としましてはやはり、その有り余る力の活用方法——超人として卓越した異次元の身体能力をもっと活かせる場こそが、ユノさんにとっても、我々人類にとっても必要なんじゃないかと思ったりするんです」

それを聞き、葉山ユノはほんの少しだけの間を置いていった。

「貴方は私をヒーローだと買い被ってくれているけれども、私にはそのような意思、微塵も存在しないの。——貴女はとことん真面目な人間ね。超人協会のアシスタントスタッフとして勤めていただけあるじゃない。助手として頼り甲斐あるわ」

「ああ、いえ……」

「……まあ、今となってはこの力も持て余してしまっていて、現在における明確な使い道を決めていないのも事実ね。——必死な思いをして身に付けたのに、結果が伴わなくてこの力だけが残ってしまったから、なおさら……」

……え？

問い掛けるような視線を向ける柏島歡喜。それを受けて葉山ユノは自身が口にしたセリフで口を噤み、咳払いで空気をリセットしながら箸を釜飯に走らせ始めた。

「無駄な詮索は不要よ。時間が勿体無いもの。そんな、無益も大概な時間を設けるくらいなら、その時間でこの釜飯をもう二個追加で買ってきなさい。これは上司からの命令よ」

「……随分と強引に話題を逸らしていくんですね。しかも不可抗力の権限まで発動して、オマケに、遠回しにおかわりも要求する完璧な命令じゃないですか。まあ、俺にとって救いなのは、二個という個数の指定によって、さり気無く部下である俺の分も気遣ってくれているところでしょうか——」

「いいえ、二個とも私が食べるわ」

「ただ食べ足りないだけでしたかー」

日常。二人でテーブルを挟む光景に平和的なやり取りを交わしていく。

と、そんな会話の最中にも、葉山ユノはこんな言葉を投げ掛けた。

「それで、私の自宅は綺麗に掃除してくれたの？」

「え？ あハイ、元々そんな散らかっていなかったお部屋でしたので、床と壁を軽くピカピカにして、ダブルベッドや家具の配置などを整えて参りました」

「そう、ありがとう」

テーブルに肘をついて、その手に顎を乗せていく彼女。そして柏島歓喜へと向けた視線を真っ直ぐと投げ掛けながら、葉山ユノはそんな誘いを訊ね掛けていったのだ。

「今晚、私の自宅に泊まっていく？」

女上司の自宅に招かれて……【3235文字】※お色
気シーン有

業務を終え、定時で切り上げた葉山ユノと柏島歓喜。夕暮れも直に夜へと移り変わる時間帯の境目に、落ちる黄昏に照らされた二人は高級アパートの駐車場を歩み進めていた。

厳重な防犯機能。モンスターの攻撃からも身を守る重厚な外壁。外部からの不安因子を徹底的に対策した鋼色の七階建てアパートは、建物から香る高級感溢れる材質の匂いと、可動しているエレベーターで縦に移動できるリッチな仕様で住民を迎え入れる。

六階に位置する自宅の扉に手を掛けた葉山ユノ。そのままドアを開けて手で促していくと、柏島歓喜は軽く一礼しながら彼女の部屋へとお邪魔した。

入口から、ホテルの一室のように穏やかな空気が流れ込む。灯らない電気にも関わらず自然なオレンジ色を放つこの空間は、午前中にも訪れた彼に再びの安堵を与えてくれた。

部屋もまた、探偵事務所よりもスペースが広い。その内部もモダンな家具で統一されているものの、生活するのに最低限と必要になる物しか揃えていないことから、元々開けた空間が余計に広く感じられたものだ。

「……普通の物件に住んでいる自分が惨めに思えてきますよ。尤も、ユノさんのような、世間に夢と希望と未来を与えてくれる超人ヒーローのプライベートルームってことであるのなら、それじゃあいいかと抵抗なく心から頷けるとても素敵なお家だと思いますが」

明かりを点ける葉山ユノ。天井から下がる球体のランプが空間を煌びやかな白色で染めていき、柏島歓喜にモダンな椅子に腰を掛けるよう促していく。

そして彼女は部屋の奥のダブルベッドにドカッと座っていき、脚を組んで優雅なサマを見せ付けながら彼へと言葉を掛けていった。

「上出来よ、柏島くん。期待以上に見違えた綺麗なお部屋、これからは

安心して貴方にここの掃除を任せられそうね」

「俺、雑務とコックまでできて、次は清掃員としての称号までもついでしまいましたか……。その分のお給料つてもちろん弾んでくれるんですよね?」

「うふふ」

短い返答。もはや言葉でもないそれに、彼は「あ、これは給料増えないな」と確信する。

そして、身に付ける衣類を脱ぎ始めた葉山ユノ。ライダーズジャケットを脱ぎ捨てるようにベッドへ放り投げ、バイクパンツのベルトを緩めてぶら下げて、赤色のシャツのボタンを全て開けっ払うことでピンク色のインナーを晒していきながら、部屋の中を歩き出していく。

「飲み物を用意するわ。冷蔵庫の中に緑茶かぶどうジュースがあったはず」

「ああいえ、冷蔵庫内の飲み物は全て賞味期限が過ぎておりましたので、廃棄してしまいました。——ですが、こちらに、ほら。同じ飲み物の新しいやつを用意しておきましたので、こちらをお飲みください」

「あら、気が利くじゃない」

鞆から取り出した、購入したばかりの飲み物。そこから二人でぶどうジュースをいただきと、彼女は部屋を眺めながらそれを口にする。

「ここ最近は事務所で寝泊まりしていたから、ここに帰ってきたのは随分と久しぶりだね」

「ユノさん、俺が事務所で働き出した頃からずっと事務所で寝泊まりしていましたよね。——こんなに綺麗なご自宅がお出迎えしてくれるというのに、ユノさんはどうして帰宅しようとは思わなかったんですか?」

もはや、ボタン全開である彼女の格好にツツコまない柏島歓喜。そんな彼の問い掛けに葉山ユノはそう返していく。

「自宅から事務所までの移動が面倒なのよ」

「……ユノさんらしいと言えば、らしいですけど……。それで移動が

面倒に思い、しばらく帰宅していないご自宅の掃除を俺に頼んだと……」

「そうね。近い内にも、バーで出会った女の子を二人ここに呼んで、おもてなしをする話になっているの」

「あー、そういう。……そういうことでしたか……」

察した。彼は視線をダブルベッドへと投げ掛ける。

……高級な自宅を、ホテルのように扱うところ。一人暮らしでダブルベッドという贅沢に柏島歓喜は妙な納得をしていくと、彼が向けたベッドへと彼女は向かいだし、近くの棚をごそそと漁り始めて何かを探し始めていくのだ。

——チラリと見える、棚の中身。

ピンク色を主とした何かの玩具が、ゴロゴロと音を立てていく。そのどれもが自己満足の用途に使用される大人向けの代物であることから、彼はギョツとした目を剥いて思わずとツツコンでいった。

「な、何してんですかっ!?!」

「何、もなにも、そういう気分だから済ませようと思ってるの」「だからって、どうしてナニを今しようとしてんですかッ!!?」

ガタンツ。立ち上がる柏島歓喜。彼の様子も葉山ユノは全く気にしないでいると、取り出した一つの長い代物を抵抗感なく眺めていった。

ここには描写できない形をしたもの。だが確実に言えることは、柏島歓喜もまた、その形を自前で持っているということだろうか。

それにしても、随分とご立派な造形だ。葉山ユノはソレを手を持ってベッドへと座り込んでいくと、脱ぎ掛けのバイクパンツを下ろしてピンク色のショーツを晒しながら、彼へとそのセリフを言い放ってきたのだ。

「私は少しコッチに集中するけれども、柏島くんは気にせずゆっくりしててちょうだい。それと、うるさかったら気兼ねなく言って。あと、臭いも気になるようだったら窓を開けたりして自分で調節してちょうだい」

「い、いやいやいやっ!!! どう見たってそういう問題じゃないで

しようっ?! もっとうこう、モラル的な部分で思う所とがありますよねっ!?”

ナニが擦り付けられる様子。そして、ゆっくりと寝そべってリラックスし始めた彼女の動作に柏島歓喜は視線が挙動不審となつていくと、彼は慌てるように鞆を手に持ちながら、テーブルに置かれていた部屋のカギを拾い上げてそう叫び上げていく。

「おお、おおお俺はちよつと外の空気を吸うってきます!!! す、すぐ戻ってきますので、ユユノさんは気にせずどうぞっ!!!”

ドタバタドタバタ、ガチャツ!!

ものすごい勢いで外に出ていった柏島歓喜。彼の慌てて出ていく背をその姿勢のまま見送った葉山ユノは、何とも思わない平然とした表情を見せていたものだった。

「勢いのままに飛び出してきちやっただけど、外に出たところで何をして時間を潰そうか……”

夕暮れの余韻も残らない、完全な暗闇が街灯の光をもたらす外の空間。整えられた道が富裕層の住む区域であることを象徴するそれを、柏島歓喜は参つたなといった調子で歩き進めていく。

それから少しばかりと夜の道を散歩していると、見慣れた年季の道路が彼を迎え入れてきた。

いつもの龍明の街。特別感のないこの吸い慣れた空気こそが自分の居場所とも思われる柏島歓喜は、目についたコンビニエンスストアへと立ち寄って中を物色し始める。

雑誌コーナーへと赴くと、視界に映ったグラビアの水着姿。同時にして脳裏によぎった先ほどの光景を彼は思い出していくと、ひとり恥ずかしく思いながら引き返しつつ、こんなことを意識してしまう。「……けっこう大きかったな。——アレを、ユノさんは今も使ってるって考えると……”

手に取ったお菓子を、棚から出し入れする動作で硬直した彼。この煩惱を断ち切るべくお酒でも買っついていこうかと考えてそのコーナー

へと向かおうとした時に、彼はふと、引っ張られた裾の感覚に振り返っていったのだ――

「これがいい」

チヨコレートへと指を差していく小さな手。それは色素が薄い、生気をうかがわせない色白の肌。胸元辺りにまで伸びたもみあげに、緩く巻かれるよう絡まる黒色の紐のリボンが特徴である銀色のショーツヘアが彼の視界に映っていくと、次にも彼へと振り向いてきた水色の可憐な瞳が、柏島歓喜の目と合い始める――

百五十五ほどの、小柄な背丈の身長。銀色のパーカーと青色のホットパンツで、黒色のソックスと、白色と黒色の運動靴という無難な格好をした一人の少女は彼と目が合うと、一ミリたりとも表情が変化しない可憐な容貌で、再びそれを口にしていった……。

「これがほしい」

「……………え? ――え?」

カツキーとチョココメント【4643文字】

明日の休日に、多くの者が浮かれる龍明の夜。夕日が落ちたばかりの新鮮な闇に解放感を覚えた人々は、今宵の宴に心を躍らせながら街道を歩き進めていく。そんな彼らの向かう居酒屋が混雑を起こしていく光景の中、近くのファミレスでもまた、家族連れが賑わう繁盛の様子がうかがえた。

新たに来店した、子供連れの二名様。二人が席に案内されていくと、その彼こと柏島歓喜は連れの少女にメニューを渡していきながら、しばらくとそのサマを観察していった。

……銀色のショートヘアがひと際と際と目立つ、可憐な顔立ちの幼い少女。しかし、表情を一切と変えないその様子がまるで動くお人形のようにも感じられ、少女の表情からは思考や感情を読み取ることができそうにない、何だか透き通るような、ミステリアスな存在感をひしひしと感じ取る――

「……コンビニで急にチョコレートを買わされたと思ったら、他にもアイスやらジュースやらも流れで買わされて、これで終わりかと思ったら、店を出た俺の後をやけについてきて顔を覗き込んでくるもんだったから、どうすればいいのか分からなくなって、取り敢えずファミレスに連れてきてしまった……」

ぼそぼそと呟く彼。そんな彼に目もくれない少女は、一変とも動かさない眉で目を開きながら、メニューの文字列をじつと見つめ続けていく。

……周囲を見渡した少女。そこに映った、カップルの男女が二人でメニューを眺めるその光景。少女はこれをじつと見遣っていくと、メニューをテーブルに広げながらそうセリフを口にしていったのだ。

「どうすればいい?」

「え?」

「どうすればいい? ——言葉が違う? こう、やれば、いい?」

……??

首を傾げる柏島歓喜。だが、意図は何となく汲み取ったのか、彼は

メニューに手を添えながら返していく。

「俺も見られるように気を遣ってくれたんだな。ありがとう」

「——うん」

……嬉しそう。変わらない表情だが、頷いた少女はどこか満足げに料理の写真を指差していく。

「これ」

「デミグラスソースのオムライスか。じゃあ俺も同じの頼もうかな。

——すみませーん」

オーダーを済ませた柏島歓喜。そうして料理が出てくるまでの待ち時間を利用するように、彼は少女へと色々な質問を投げ掛けていった。

「きみ、コンビニで会った時は一人でいたみたいだけれど、親御さんとかと一緒に来たりはしていないの？」

「親御さん——は、無い」

「無い？……親御さんはいなかったのかな。だとしたら、きみ、夜の外を一人で出歩いていたってこと？」

「うん」

「それは危ないな……。変な大人に絡まれなくて良かったと思うべきか。でも、俺が保護したところであ……。やっぱり、警察へ送り届けるべきだったか。いや、でも変に疑われたくもないから、スタッフの時の顔見知りがいる龍明超人協会に送り届けるべきか……」

やけに懐かれてしまった少女をどうするか考える柏島歓喜。彼の悩むサマを眺めて少女はじつとしていくと、次の時にも、彼の動作を真似するように首を傾げてみたり、似たような言葉をボソボソと呟いたりして彼の視線と合っていく。

上目遣い。変化の無い表情と目が合った柏島歓喜は、ちよつとずつ姿勢を正しながら次の問いを投げ掛けた。

「家の場所は分かるのかな？もしここから帰れる所にあるのなら、ご飯を食べた後にもちゃんと家に帰るんだよ。そうしないと、きみの親御さんが心配するから。……ああ、買ったお菓子とかは俺が預かってるけど、それもきみにあげるから、今日はそれで大人しく帰るんだ。

「いいね？」

「家——ある。でも帰らない」

「どうして？ 何かこう、帰りたくない事情とかあるのかな……？」

「事情。——楽しい、がしたい」

「楽しいがしたい……？」

真つ直ぐと向けてくる少女の視線。それを受けて彼は少し考えると、しようがないといった若干のため息をつきながらその返事をしていった。

「じゃあ、少しだけ俺と散歩でもする？ きみの期待に応えられるかは分からないけれど、きみのような子を夜に一人放り出せるほど、俺は冷酷になれなくて。……それで勘弁してくれる？」

「散歩。する」

ワクワク。変化しない表情からも、多少なりの感情がうかがえる少女の肩の動き。

そうして頼んだ料理がテーブルに出されたことで、少女は目を輝かせながらいたただこうとした。だが、すぐにも周囲を眺めて何かを探していくと、目についた先ほどのカップルが手に持つスプーンをじつと捉えていき、少女もスプーンを手にとってそれを頬張り出していく。

……少女の視線を追う柏島歓喜。それら一連の流れに彼も何か思考を巡らせていくと、場面は切り替わって、店を後にする二人の会話が展開された。

「ここから少し歩いたところに、見晴らしの良い公園があるんだ。そこで街の夜景を眺めながら、買ったアイスを二人で食べたりしようかって考えているんだけど、それでいい？」

「——うん」

彼の提案に、すぐ頷いていく少女。そうして二人は歩き出していくと、人の通りが少ない上り坂を進み始めていく。

街灯が、一定の間隔を空けながらぼつぼつと明かりを灯している。地面の坂も割と傾斜であり、自身から提案した柏島歓喜がゼーハーゼーハー息を切らして苦しそうにしていた。

彼の真横を歩く少女。彼との足並みを揃えるよう坂を上る少女は

全くと表情を変えず、隣との温度差にその姿をじっと見据えて何かを考えていくと、少女は彼の手を取って、握りしめながらそうセリフを掛けていった。

「頑張つて」

「ハア、ハア……!! あ、ありがとう……っ!! ——俺、ホント不甲斐無いなあ……!!」

自分自身に呆れるよう空を仰ぎながら言葉を口にする彼。その間も汗は噴き出すようだくと流れ続けていき、隣の涼しい顔をした少女との差に可笑しな絵面が完成してしまっている。

と、上り坂のその道中で、少女は隣の彼を見遣りながら「それ」を訊ね掛けていったのだ——

「大変?」

「ゼエ、ハア……ああ、大変だよ……っ。むしろ、きみはどうしてそんなにへっちゃらなのかが、俺は気になるくらいだ……っ。やっぱり若さ……? それとも、俺の体力が少ないだけなのか——」

「任務も大変?」

切らす息が途絶えていく、一瞬にして訪れた無音の静寂。直にも鳴り響く虫の声が耳に入り始めてくると、柏島歓喜は不思議そうな面持ちで少女へと振り向いていった。

「……任務?」

「そう」

「それって……何の話?」

「今の話」

会話が噛み合わない。彼は首を傾げて言葉の意味を考えていくと、少しして思い付いたようにそう返していく。

「それって、俺の今のお仕事の話かな。だとしたら、大変だよ。俺は今、探偵事務所の雑用係として雇ってもらっているんだけど、そこでけっこう色んなことをやらされていて、毎日がくたくただよ。だから、任務はとて大変で——」

「敬語」

彼へと投げつけた言葉。それを受けた彼は開いた口を閉じていくと、少女は続けてセリフを投げ掛けていく。

「いつも敬語つかってる」

「あー……確かにそうだ。意識してなかったな。きみと話す時は、自然と敬語にはならないというか。それだけ、こう、きみとは話しやすいというか、少し気楽な気持ちで話すことができている気がする。——というか、きみはどうして、俺がいつも敬語で話していることを知っているの?」

「時々見てたから」

……繋ぐ手の温もりが、どこか気持ち悪く感じてきた彼。

今すぐ手を離したい。そう願い出した彼の気持ちはある意味で届いたのだろうか。無意識と歩み進めていた足は平坦を踏み入り始めており、そうして目にした見晴らしの良い開けた遊具の公園に着いたことで、彼はそちらに意識を向けるべく指を差しながら少女に喋りかけていった。

「ほ、ほら! 着いたよ! この公園の奥に、夜景を一望できるスポットがあるんだ!」

少女に気を遣いながら、走り出していく彼。そして彼の言う通り公園の奥へと進んでいくと、そこには落下防止の柵が立てられた、地形から突き出るよう出っ張った形の木製高台が二人を迎え入れてくる。

——上から眺める龍明の街。落ちた闇に灯る明かりが群れを成し、地上を行き交う人の波が煌めきに動きを与えてくれている。

柏島歓喜は、少女を連れて近くのベンチに腰を掛けていった。彼の隣に少女もちよこんと座っていくと、彼が鞆から手渡して差し出したカップのアイスを受け取って、食べようと開けたフタの先の中身を目撃するなり、少女はそれをじっと見つめだす。

それは、チョコチップの欠片が食欲を掻き立ててくる、透き通るような水色のチョコミント味。自身が選んだそれを少女は見惚れるように眺めていると、それを横で見っていた柏島歓喜は、スプーンを渡しながらそのセリフを掛けていったのだ。

「夜景よりも、アイスの方が気になるかな?」

「——どっちも綺麗。でも、キラキラはいつも見てる」

「キラキラ……？ 夜景の光のことかな」

「でも——チョコレートはいつもキラキラしない」

手に持ったアイスのカップに、少女は顔を近付けていく。

「——キラキラ。綺麗」

「……………」

とても不思議な子だ。話してみても、彼女の性格が全くもって不明瞭なままだ。

胸の内で呟いた彼のセリフ。同じ言葉を話しているハズなのに、どこか通じ合えないような、どこかが違って映る少女のその姿に彼は暫しと黙りこくっていく。

……そして直にも、彼は少女にそれを促していったのだ。

「アイスだから、早く食べないと溶けちゃうよ」

「——食べる」

「そうした方がいいよ。それとー……」

催促に乗りかかるように、勢いで切り出したその話——

「そう言えばさ、俺、きみの名前を聞いていなかったなって。名前を呼べないと、話をしていいる中で不便に思うところも出てくるから、良かったらでいいから、きみの名前を教えてくださいもいいかな？」

チョコミントのアイスを食べる少女。スプーンを口に含んだ状態で彼へと振り向いていくと、口のそれを取り払いながら表情も変えずにそう返答していった。

「名前——無い」

「え……？」

「分からない」

……参ったな。そんな雰囲気ですぐ彼を掻く。

「えつと……。名前が無いっていうのはー……その——じゃあ、きみは普段、どんな風に呼ばれているのかな……？」

「呼ばれる？ ——呼ばれない」

一ミリたりとも変えない表情。もぐもぐと口を動かす少女の返答に、柏島歓喜は一瞬もの間を置いた。

「……それじゃあ、きみは普段から誰かと一緒にいるわけじゃないの……？」

「——うん」

……考える柏島歓喜。どうするべきなのだろうか。渦巻く思考に、彼はそう時間を掛けずに一つの問い掛けを投げ掛ける——

「……でも、だからってずっと、きみって呼ぶわけにはいかないしな……。ああ、だったら、きみにニックネームを付けてもいいかな？」

「ニック……ネーム……？」

「そう、ニックネーム。名前とは少し違うんだけど、その人の個性というか、その人を親しみもって呼ぶ際に用いられる、一言でその人だつて分かる名前のような言葉のこと。俺だったら、そうだな。俺の名前は柏島歓喜って言うんだけど、その歓喜って部分をもじって、カッキーって呼ばれていたりするんだよ」

「カッキー……？」

「そう。だから、俺もきみを呼ぶ時、その言葉で、きみのことを呼んでいるって分かるような名前を付けたいんだ」

……名前。

目を光らせる少女。そしてすぐにも少女は手に持つアイスに注目をし始めると、それを彼へと差し出していきながら、少女は自身のリクエストを彼に伝えていったのだった——

「チョコ。ミント。——“チョコミント”……！」

押し寄せる動揺【2602文字】※お色気シーン有

「ただいま戻りましたー」

報告と共に、高級アパートの玄関ドアを開ける柏島歓喜。それを「おかえりなさい」と言葉で迎えた葉山ユノは、ボタンを開けっ払った赤色のシャツのみを羽織る開放的な姿で佇んでいた。

彼女が手に持つ、ぶどうジュースの入ったコップ。所々が汗だくながらも清々しい顔をした葉山ユノは、一方で疲れたような表情で帰ってきた彼にそれを問い掛ける。

「萎びたシイタケの茎の部分のような顔をしてるわ。貴方も聖なる夜を楽しんできたのかしら」

「何ともまあ、ピンポイントな顔をしていますね俺……。それに、俺はユノさんほどアクティブにはなれませんよ……」

「それでも適度な発散は必要よ?」
「ほんと、ユノさんはその拳でモラルという概念も吹き飛ばしてしまっただんですか?」

椅子に座り、テーブルに鞆を置いていく柏島歓喜。彼の尋常じゃない消耗の様子に、葉山ユノは傍まで寄りながら訊ね掛けてくる。

「何かあったの?」

「何かあったどころではなく、何もかもありすぎて色々と疲れました。

——あの、その格好で目の前に立たれるのも色々と困ります。主に、俺の身体に悪いので」

「男の人は、こういうので元気が出るんでしょう?」

「あのですね……まあいいや」

彼がこうして反撃を諦めると、葉山ユノはしてやったりといった具合にニヤアと笑みを浮かべてくる。しかし彼女のそれにさえも反応しない柏島歓喜は一息ついていくと、つい先の出来事をそう説明し始めたのだ。

「最寄りのコンビニエンスストアで、一人の少女が俺に絡んできました。その子はとても不思議な少女でありまして、なんともミステリアスな空気を身に纏った、この世の者ならざる神秘的な存在感で俺の前

に現れたんです。俺はどうすればいいのか分からなくなって、取り敢えずその子をファミレスや見晴らしの良い公園に連れて行ったりしてみました。そしたらその子はとても満足そうにしてくれまして、その最中にも俺は、その子との他愛のない会話を交わしていく一時を過ごしていたものです」

「へえ、羨ましい話」

「ユノさんはあの現場を見ていないものですから、そう言えるんですよ。俺はなんかもう、すごく疲れちゃいました……」

「それで、その子はご自宅に送り届けてきたの？　ここに連れてきていない様子だけれども、ぜひともご尊顔を拝んでみたいものだわ」

部屋を見渡す葉山ユノ。それも守備範囲であるがため彼女は彼の返答を心待ちにしていたものであったが、そう少しして、柏島歓喜は頭を抱えながらその返しを口にしていったのだ。

「その子は、その……。消えました」

「消えた？」

「はい……。二人で公園のベンチに座っておりまして、俺が夜景を眺めるためにちよつとだけ視線を外したら、次に振り向いた時には、隣にいたハズのその子が忽然と姿を消していました……」

少しずつ俯いていく柏島歓喜。その不思議体験で動揺する彼を葉山ユノが見つめていく中で、彼はふと彼女へと視線を投げ遣りながらそれを訊ね掛けていく。

「あの子は一体、何だったんでしようか……？　その子の口ぶりとかも、俺のような常人にとっては不気味に感じられてしまっていて、何を考えているのかも分からない、どんな性格なのかも分からない、あの子という存在について何もかもが分からない、この世ならざる何かに触れてしまったかのような言葉にし難い不思議な体験に、俺、なんかもう色々と分からなくなってしまう……」

「へえ。——ぶどうジュースでも飲む？」

「あ、いただきます」

コップを用意した葉山ユノ。そこにジュースを注いで柏島歓喜へと渡していく。シャツのみを羽織ったその姿のまま。

彼はそれを一気に飲み干して、テーブルに置いていった。そしてふうつとため息まじりの一息をついていくと視線を彼女に投げ掛けながら、改めてといった調子で彼はそれを問い掛けてみる。

「ユノさんだったら、この話を聞いてその子をどう捉えますか？ 俺は、あの子は果たして超人だったのか、はたまたモンスターだったのか。それか、超人やモンスターが存在するこのご時世ですから、あの子はもしかしたら、それらには該当しない新たな種族——宇宙人とか……そういう常人ではない何かだったのかなってばかり考えてしまっています……」

「情報がまだまだ不足しているから、断定するには時期尚早といったところかしら。とにかくお疲れ様。今日は私の自宅でゆっくり休んでいきなさい。ただ、ダブルベッドは男子禁制の特別な聖域だから、柏島くんの寢床は文字通りの床になるけれども」

「いやもう、こんなに高級なお部屋ですから、むしろ床で寝られるのもありがたいとすら思えてきますよ……」

くたくたといった感じにイスから立ち上がる彼。そうして歩き出しながらダブルベッドを見遣っていくと、そこには昼に整えたシーツがくしゃくしゃになり、なんだか飛沫のような湿り気も感じさせる変わり果てた姿を目にしてセリフを口にする。

「……ユノさんもお疲れ様です」

「シーツを変えておいてちょうだい。あと綺麗に整えて」

「もう慣れたもんですよ、はい」

と言ってシーツを剥がそうと手を掛けていく彼。で、シーツを引つ張っていくその中で、彼はシーツの上から転がってきた二つのピンク色を目撃することとなる……。

……ここには描写できない大人向けの玩具。だが、先ほど見た立派なそれとは異なるのであろう二つの物体に、これも処理するのかと柏島歓喜は掴もうとした。

しかし、違和感を抱いた。——断面。真つ二つ？ それを不思議に思った彼は二つのピンク色を手に取りながら振り返っていき、未だ下半身を露出したまま凜々しく佇む葉山ユノへと訊ね掛けていったの

だ。

「あの、こちらの玩具も棚に戻しておきますよ」

「ああ、いいえ。それは処分しなさい」

「処分？」

「ええ、壊してしまったから使い物にならないわ」

それを聞き、まじまじと見つめた柏島歓喜。

と、二つのピンク色の断面を合わせてみた時、確かにそれは、
ニ”の形となつてピッタリくっ付いたのだ。

「少し熱中しすぎてしまつて、力みすぎたのよ」

「え……力みすぎて……？」

「そうよ。——なに、どうしたの？」

見遣る葉山ユノ。その視線を感じ取つた柏島歓喜は、途端に“自前”
のソレが一気に縮み上がる感覚を覚えていった。

……堪つたもんじゃない。こんな真つ二つに……。

最強の超人として名が知れ渡る彼女の力は、なにもその拳や脚だけ
ではないという証明でもあつたのだ——

銀色、摩訶不思議【3242文字】※お色気シーン有

月下の露天風呂。湯煙が白く空間へと立ち上り、周囲に植えられた深い緑の垂れる木々に絡まり枝分かれます。前方に広がる一面の湖は、落ちた夜を反射して深海の如く黒い水面を揺らしていき、そして天井に吊るされた月明りを複製してその黄色を描き出す。

カポーン。桶の音が風情を奏でる。その音を鳴らした柏島歓喜は露天風呂へと足を入れていくと、全身に染み渡る名湯の温もりに「ああ〜」と抜けるような声を出していった。

浸かる身体。骨の芯まで届く心地良さ。彼は蕩けるように石へと寄り掛かって空を仰ぎ始め、上る煙を見送りながら隣が存在へと言葉投げ掛ける……。

「極楽とはよく言ったものですね。それも、龍明という大都市にこれほどまでの風情ある環境をこしらえるだなんて、まず目の付け所が違いますよ。——今も防壁の向こうで溢れかえっているであろう、手つかずの大自然を忠実に再現とは、よく言ったものです。そして、これらの自然豊かな環境を本格的に整えてしまえる技術の進歩には、常日頃から驚かされてしまいます。……尤も、混浴という形式とは思いませんでしたけど」

のびーつと腕を伸ばしていく柏島歓喜。そして姿勢を直しながら前のめりになっていくと、隣に目をやって彼女の様子をうかがった。

彼の言葉に、無言で答える葉山ユノ。腰に布を巻く彼とは相反し、完全な全裸で堂々と湯に浸かる大胆なその彼女は、お湯にほっぴり出した長髪を浮かばせながら脚を組んで途方を眺めていく。

「まあ、悪くないわね」

「それにしても、今回の案件もユノさんのご活躍によってみごと解決しましたね。山奥に現れた、山姥のような厳つい肉食モンスター。一目で寒気が走るほどの末恐ろしい外見と大きさではありましたが、あれほどの凶悪なモンスターであろうとも、ユノさんにとっては朝飯前といったところでしょうか」

「そのおかげで、こちらの若女将さんともお近づきになれたものだけ

ら、私としても収穫のあるイイお仕事ができて満足よ」

「ユノさんはやっぱり、極楽な露天風呂よりも好みの女性を取りますか。——ある意味で、花より団子と言えそうですね」

花より団子。その言葉を口にした柏島歓喜は、ふと脳裏によぎった一つの記憶が瞬時にチラついていく。

——目の前の夜景に目もくれず、口にしたアイスの味に可憐ながらも目を光らせた、一人のいたいけな少女。銀色がよく似合うその存在を思い出した彼が、神妙な顔つきで隣の彼女へ向いていくと、訊ね掛けるようにそうセリフを投げ掛けたのだ。

「……あの、先日にもお話した少女のことなんですけど」

「ええ、私の方で調査はしてみたわ」

「それで、どうでした……？ あの子について、何か分かったりしましたか……？」

おそるおそる。そんな様子で訊ねる柏島歓喜。しかし葉山ユノは首を横に振りながら、そのような返答と共に彼へと視線を向けていく。

「簡潔に言ってしまうえば、成果は皆無に等しいわね。私なりに目星をつけて調査してみたりしたけれど、その子に繋がる手がかりは全く見つからなかった。その末に辿り着いたオカルトサイトの掲示板でも、柏島くんの言う少女の特徴と一致する、摩訶不思議な女の子との出会いと思われる書き込みを何とか発見したものだけでも、私がコンタクトを取ったすぐにもその書き込みは削除されてしまって、けっきょく有力な情報を得られることはできなかった」

葉山ユノの現状報告に、柏島歓喜は「そうですか……」と短く呟いた。

「そんなに、その子のことが気になるの？」

「まあ、そうですね。あの子が無事に家へ帰ることはできたのかとか、つい考えてしまいます」

「柏島くんらしいわね。私としても、一目でもいいからその子を拝んでみたいものだわ。——もしも接触することができたのなら、どのようにして自宅へ連れて帰ろうかしら……」

恍惚。とんでもないことを考え始めている彼女に「さすがにそれはマズいですって……」と低いツツコミを入れていく柏島歡喜。そうして露天風呂を満喫した二人は共に湯から上がっていき、ここが旅館ということもあつてか二人は宿泊することを決めていった。

湯上りでホカホカな柏島歡喜。相部屋で葉山ユノと分かれた彼はひとり出歩いていき、土産を扱う物販コーナーに入り浸るように内部を物色していつては、目の前に詰まれた豊富な土産に頭を抱えて思考を巡らせる。

「こんな種類を取り揃えられちゃっていると、どれを選ぼうか悩んじゃうな……。ユノさんはこのあと夜食を食べたがるだろうから、おつまみになりそうな菓子類を買って戻ろうかな。お土産としては、この、笹が中に入っている笹大福つてやつは、タイチさんきつと面白いと言つて喜んでくれそうだし、ニワトリの形をしたこのお饅頭は多分、包みの表紙のもちつとした可愛さとか菜子ちゃん気に入ってくれそうだし……。うむむむむ」

顎に手を当てて、全力で悩み続ける柏島歡喜。彼が唸りながらしばらくそこに佇んでいると、ふと横を通りかかった人の気配に、場所を譲ろうと彼が動き出した、その時だった――

「――これ」

差し出された、赤鬼のストラップ。携帯端末に付けられるそれを目にした彼は、目の前で何事もなく向き合ってきた“少女”の姿を見るなり、真ん丸な目玉を剥き出しにしながら言葉を失った……。

銀色のショートヘア。胸元辺りまで伸びたもみあげに軽く巻いてある、黒色の紐のリボンがひらひらと揺れている。百五十五の背丈で彼を見上げるその少女は、可憐ないたいけさで柏島歡喜におねだりをしていくと、反応を示さない彼に対して再びとセリフを投げ掛けた。

「これ」

「え。あ……それが欲しいの？――つて、いやいやいやいやー」

どうしてここに？ 驚きで言葉が喉に突っ掛かる。

「チョコ、ミント、ちゃん……。ちよつと長いか……。えつと、ミント

ちゃん……?」

「——チョコミント。アイス。ニックネーム……。……名前」

キラキラと光らせる瞳。一切と変わらない表情でも、どこか嬉しそうにしている様子はうかがえる。

「これ。ほしい。——買つて……?」

「……これが欲しいんだね。分かった、買つてあげるけど……」

摩訶不思議な存在感。この世の者ならざる神秘的なオーラを醸し出すそれ。

……柏島歓喜は、どこか恐れるようにしながら少女からストラップを受け取った。しかし、それをお会計する前にも、確認としてそう訊ね掛けてみる。

「どうして、ミントちゃんがここにいるのかな……?」

彼の問い掛けに対して、じっと見つめるような視線を送り続けるその少女。

顔の筋肉が、一ミリも動かない。ただ見つめてくる瞳が彼を捉え続けるその様子は、まるで人形のように生氣らしきものを感じさせない。

直にして、少女は上目遣いでそう答えてきた。

「楽しいを、しにきた」

「楽しい、を……?」

「——うん」

こくこく。少女は何度も頷いていく。

「散歩」

「また、俺と散歩したいの? 俺と散歩したいから、ここに来たつていうことなのかな……?」

「——うん」

意図が伝わった。少女の目がわずかに見開き、どこか期待の眼差しである視線をぶつけるようにして彼をじっと見つめ続けていく。

……頭を搔く柏島歓喜。そんな様子に目もくれず少女は手を出していくと、彼の手を握るようになってしっかりと掴みながら横に並び、ワクワクとした視線を送りながらうずうずしていくのだ。

「——いつも見る。楽しそうな人が二つ。ぎゅってして、並んでる」

「えつと……今みたいになかな？」

「うんうん」

「……つまり、ミントちゃんは誰かと手を繋いで歩きたいってことでいいのかな……？」

「手を繋ぐ。——手を繋ぐ。手を繋いで……歩きたい。いつも見てる。楽しそう」

ぴよんぴよん。早く行こうと言わんばかりの小さなジャンプを繰り返す少女。その姿を見た柏島歓喜は、どことない恐怖が未だ拭えぬ反面、こんな子を放つてなんかおけないという気持ちにも苛まれることで、この場は領いてみせたのだ。

「分かった。それじゃあ、外を軽く散歩しよう。その前に、まずはこのストラップを買わないとね」

楽しい、したい【4534文字】

灯籠が並ぶ、砂利道が目立つ山道。訪れた者を妖しく導くよう暗がりをほつぽつ灯すそれらの道しるべは、和風テイストが放つ独自の不気味さを演出していて専ら評判でもある。その代物だけでたいへん雰囲気醸し出す光景が好奇心を掻き立てられて、物珍しさを噂した知る人ぞ知る人々が、これら周辺の地域と旅館に足を運ぶのだ。

しかし、現在ではモンスターの出現によって人の足が途絶えた一時の静寂。だがそれも葉山ユノによって討伐されたことから、近い内にも観光客は戻ってくることに違いない。そんな静寂を貸し切ったかのように訪れた柏島歓喜と謎の少女は、彼が若干と不安そうな面持ちを見せたところから会話のキツカケが生まれ出す。

「……モンスターもユノさんが倒してくれたものだし、おそらくは大丈夫だろうと思って足を運んできたもんだけど……こうして夜に訪れてみると、今までに体験したこともないような怖さを感じられてしまつて、前に進むのも恐ろしく思えてくるもんだ……。この、石造りの灯りだけでこれほどまでの雰囲気を作り出すことができるなんて、考えた人は本当に天才としか言い様がないな……」

灯籠を眺める柏島歓喜。だが、その足は中々、前に進もうとはしない。

と、手を繋ぐ少女は表情ひとつ変えないサマで彼を見遣つていくと、その手を引っ張るようにしながら少女は山道を歩き出していく。

「――散歩」

「あ、ああ……それは、そうだったね……」

早く行こう。それを促すよう弱い力で彼の手を引っ張る少女。これにつられるまま柏島歓喜も歩き出していき、灯籠と暗闇に囲われるよう二人でその道を上り出す。

……周囲にばかり気を取られる柏島歓喜。落ち着かない首の動きと、今にも何かが飛び出してきそうな雰囲気ある山道に不安を募らせていきながらも、一方で平然としたまま前を見つめ続ける少女へとそんなことを切り出した。

「……連れてきておいてアレなんだけど、俺、いま相当ビビってるんだよ。手の震えも多分、ミントちゃんに伝わってるかもしれないけど。——ミントちゃんは、ここ怖くないの？ 大丈夫かな……？ 無理してない……？」

彼の問い掛けに、少女は彼へと振り向きながらそう答えていく。

「楽しい」

「そ、そうなんだ……」

肝が据わっているなあ……。内心でそんなことを呟きながら、柏島歓喜はただただ少女に感服することしかできなかつたものだ。

……二人で歩み進める、灯籠ともる妖しい山道。その道中にもふと思いつ出したように柏島歓喜はハツとすると、それを確認するべく少女に言葉を投げ掛ける。

「そう言えばさ、この前もこうしてミントちゃんと歩いたりしたけれど、あの後ミントちゃんが急に消えちゃって、俺、心配してたんだよ」

「——心配？」

「そう、心配。ミントちゃん帰ったのかわらなくて。夜なのに女の子一人で帰ったのだとしたら、ミントちゃんは無事にお家に帰れたのかわらなくて、気にしてたんだ」

「気にする……」

ぎゆう。彼の手を握り締める少女の手が、少しだけ強くなった。

「——ごめん、なさい……？」

「ああ、謝らなくてもいいよ！ たださ……ミントちゃん、あの後どうやって帰ったの？ほんと、まるで消えるかのようにいなくなつたもんだから、俺、それも気になつちやっつてね……」

踏み込んだ話。そうして彼は少女の顔をうかがうようにしていくと、次にも思い切つたようにそう訊ね掛けていったのだ——

「……ミントちゃんつてもしかして、超人とかだったりするのかな……？ ああそれとも、実は瞬間移動できるモンスターだったりして……？ あはは、なんちやっつて——」

「——楽しくない」

「……え？」

繋いだ手を離す少女。そうして逃げるように彼との距離を空けていくと、一切と変えない表情ながらも、どこか避けるような様子で彼のことをまじまじと見つめていく。

「——楽しい、できると思った。でも、楽しくない。それ、やだ……」
「……ミントちゃん？」

「人、違う。楽しい、できない。いつも、ひとり。——カッキー、いやになる……!」

と、少女は一瞬ばかりと悲しげな表情を見せた途端に、柏島歓喜を置いてその先へと向かって走り出してしまった。

それには思わず、彼も「ま、待って!」と言ってすぐさま追い掛ける。だが、見かけによらず足が速い少女は目先の暗がりにも紛れ込んでしまうと、柏島歓喜は真っ直ぐ追い掛けた末に辿り着いた、見通しの良い空間で立ち止まってその様子を眺めていったのだ。

数個の灯籠が続く先に、立派な鳥居が建てられたその空間。石を敷き詰めた道がそちらに向かって真っ直ぐと伸びていくと、この山道のゴール地点とも言うべき大きな神社が来客の“二人”を迎え入れてくる。

……神社の前で、俯きながら佇む銀色少女。寂しげとも見受けられる小さな背中に、柏島歓喜は声を掛けながら歩み寄っていく。

「ごめん、ミントちゃん!! 俺、まだミントちゃんのことをよく分かっていないんだけど、多分、俺はミントちゃんが嫌がるようなことを口にしたんだと思う……!! でも、俺はミントちゃんを嫌な気持ちにさせるためにそれを言ったワケなんじゃなくって……!!」

石の道を駆ける彼。コツコツと音を立てながら彼は少女に近付いていくのだが、鳥居をくぐった辺りにも彼が石の音を立てた、その瞬間だった——

——薙ぎ倒される木々。厚みのある大木をもへし折って現れたのは、全長三メートルにもなる巨大な筋肉質の生物。

人型である“それ”は、歪んだ骨格の顔と萎びた灰色の長髪で現れると、すぐにも目についた柏島歓喜へと、手に持つ巨大な包丁のような武器を振り下ろして攻撃を仕掛けてきた。

「ッ!? あれは、ユノさんが倒したハズのモンスター……!? どうしてここに……もしかして、別の個体——!!」

油断した。反射的に両手で防御するよう、彼は受け身の姿勢で目を瞑っていく。

刹那によぎる、死んだ、の言葉。

……だが、最悪の想定をしていた彼がしばらくと佇んでいると、ふと、自身に降りかかるはずの痛みが訪れないことに気が付いた。

目を開ける彼。様子をうかがうような瞳で彼はゆっくりと目の前を見遣っていくと、その開けた視界の中央に展開されるひとつの光景を目にするなり、言葉を失いながらその両腕を下ろして立ち尽くしてしまうのだ——

何も無い空間を殴りつける、筋肉質なモンスターの姿。一步としてその場から踏み込んでこない様子に彼はよくよく目を凝らしてみると、その目の前には、透明な質感を持つ分厚い壁が進行の妨げとなって忽然とそびえ立っており、しかも、それがモンスターの前後左右、加えて天井となる上も含んだ長方形の四角形となってそれを閉じ込めている。

そして、四角形の上に着地する少女。ふわっとした浮遊感と共に柏島歡喜の視界の上から少女が降りてくると、少女はそのまま何事もなかったかのようにしやがみ込んでいき、かと思えば、足元で壁を殴りつけまくるモンスターに一切の興味を示していかない。

と、その時にも、前後左右の透明な壁が、モンスターに向かってゆっくりと動き始めたのだ。透き通った質感が故に距離感がつかめない防壁だが、筋肉質なモンスターの攻撃でさえまるでビクともしない。これによって完全な強度の証明となったそれらが着実にモンスターへと迫り出していくと、直にもそのモンスターは挟まれる形となつて、振り回していた腕もその場で固定されて自由が奪われるサマを目撃することとなるのだ。

壁の進行は止まらない。巨体を持つモンスターが圧迫され始めたことで、それは苦しげな顔を見せていく。だが、それでも止まらない壁はどうとう中身のモンスターを押し潰し始めていき、次にもモンス

ターは、プレスされる形で人型の原型を崩していきながら、途端に噴き出した血肉や骨をぶちまける形で、辺り一面を真っ赤に染め上げていった――

――壁に飛び散った、広がる血痕。透明であるが故に、ぐちゃぐちゃになった肉や骨といった内部の様子も丸々とうかがえる中で、壁の進行はそれでも止まらずにプレスを続けていく。

透明な壁は、それらが干渉してもすり抜けるように進行を続けていた。そうして四枚の壁がすり抜け終えて中の空間を広げつつあると、上に乗っていた少女はしゃがんだ姿勢から平然と立ち上がり、それと共に透明な壁の全てを消すなり少女は地上に降り立って彼の下へと歩き出す。

――少女の背後には、何も残っていないかった。強いて言えば地面に付着した生々しい血痕がそれと言えたものではあったが、中身が噴き出したタイミングでもその周囲は四角形で囲まれていたことから、血痕もまた綺麗な四角形を象ってしまっていて、元からあった地面の模様ともうかがえてしまえる。よってそのバックグラウンドを持つことから、この血痕はとても、生き物から噴き出したそれであることを認識されないことだろう。

柏島歓喜へと歩み寄る少女。……表情を変えない物静かな接近に、一種の不気味さも孕んでいた。だが、それを前にしても一歩たりとも少女から退くことのなかった柏島歓喜は、目の前の存在に対して視線を逸らすといった動作は一切と見せず、むしろ少女と見つめ合う形で向かい合うことで、少女から逃げ出す素振りは全くもつてうかがえなかったものだ。

……目の前で立ち止まる少女。それでも一歩も動くことのない彼を上目遣いでじっと見据えて首を傾げると、次にも少女は、とても不思議そうにそれを訊ね掛けていく。

「――怖、かった？」

微塵も動かない表情。ただ口のみが動く少女の問い掛けに、彼は少しばかりと視線を逸らしつつそう答えていった。

「……正直、もうダメかと思った。でもまさか、ミントちゃんに救われ

るだなんて想像もしていなかったよ」

「——？」

彼の返答を耳にして、少女は首を反対へ傾げながらそう言葉を投げ掛ける。

「——怖く、なかった？」

「え？ ……いや、怖かったよ。あのモンスターに襲われた時はさすがに、あつ俺死んだなって思っちゃったくらいだし」

「？ 違う。——チョコミント、怖かった？」

え？

少女の問い掛けに、彼は思いもしないといった意外そうな顔を見せていった。

「ミントちゃんが、怖い？ いやいやいや、そんな、怖いなんて思わないよ。——むしろ、ものすごく頼もしく思った。だって、あのバリアみたいなやつ、ミントちゃんが出してくれたんだよね？ おかげで俺、ミントちゃんに助けられちゃった。本当にありがとう、ミントちゃん」

「——ッ」

彼がお礼を口にしてから、その時初めて少女は嬉しそうに眉と目を上げていった。

そして、少女は少しもじもじとしながらも、何かに躊躇いつつ彼へとそんなことを訊いていく。

「——ともだち」

「？ なになにに？」

「ともだち、ほしい。楽しい、いっぱい。……カッキー、なれる……？」
……ああ、そういうこと。

笑みを見せた柏島歓喜。そのまま屈んで少女の視線に合わせていくと、その小さな存在の頭に手を乗せながら優しく撫でていき、彼は頷きながらそう返事をしていったのであった——

「俺でいいのなら、喜んで友達になるよ。じゃ、俺とミントちゃんは、今日から友達だ。これからもさ、ミントちゃんの都合の良い日でも、俺のところに来てよ。そしたら、俺とまた散歩でもしよう。——

だから、これからもよろしくね、ミントちゃん」

超越者【3469文字】

昼間の炎天下、小型のデジカメでシャッターを切る。それを、覗き込む壁の向こうへ向かって数回と繰り返し、先にいる二人の男女が部屋へ入る様子を盗撮していくのだ。

二人が完全に姿を消した、閉じられたドアの様子。その動向をうかがい、赤色のシャツに黒ずくめの彼女が白髪ポニーテールを揺らしながら早足で歩み寄ると、メにドアのナンバープレートを撮影してから敷地外へと速やかに歩き去っていった……。

遊具が置かれた、広大な公園。子供たちも数名と集まってキヤツキヤと遊ぶ様子を背景に、彼女は脚を組みながらベンチに座って悠々と存在し、遊ぶ子供の女の子を眺めていっては、獲物を捉えるかのような瞳で頬を染めていく。

しかし、手元にあるデジカメも忘れていない。業務に戻って撮影した写真をすべて目視で確認していき、その内容に満足といった様子で頷いていくと、彼女は立ち上がって背を伸ばし、脱力させて腕をぶらぶらさせながら戻るべき場所へと足を向かわせ始めた、その時だった。

……歩む先の、自動販売機。飲み物と並んでアイスクリームも販売しているその機械の目の前で、一人の少女が物欲しげな視線を送ってただただ佇むその光景。今の季節には珍しい炎天下であることからか、はたまた対象が少女であったからかは彼女のみが知る動機だったものだが、彼女は凛々しい歩き姿でそちらへ向かっていくと、少女もまた彼女の存在に気が付いてそちらへと駆け寄っていったのだ。

「——アイス」

色素が薄い、生気をうかがわせない色白の肌。胸元辺りにまで伸びたもみあげに、緩く巻かれるよう絡まる黒色の紐のリボンが特徴である銀色のショートヘア。

透明感のある存在感に、彼女はふと眉を上げて屈んでいった。そうして視線の高さを合わせた彼女の目を見ると、少女は自販機に指を差

しながらそれを続けていくのだ。

「アイス、欲しい。チョココミント。チョココミント……！」

「チョココミント？ チョコチップが散りばめられた、ミント味のアイスのことね。——アイス、食べたいの？」

「——うん。うん」

「そう。それじゃあ、お姉さんが買ってあげる。今日はすごく暑いものだから、貴女のような可愛い女の子が倒れちゃったら、とっても大変だわ」

ニツと笑みを見せて立ち上がる彼女。そして棒付きのチョココミントアイスを購入して少女へと手渡ししていくと、少女もまたパアツと嬉しそうな表情を見せながら、それをもぐもぐと食べ始めて彼女へと視線を投げ掛ける。

そんな彼女はと言うと、少女と合った視線に、もう我慢できないといった調子で頭を撫でながらそんなことを訊ね始めたのだ……。

「お外はこんなに暑いと言うのに、貴女はずっとひとりで居たの？ お父さんやお母さんは一緒じゃないの？」

「——いっしょ、無い。ひとり、ずっと」

「たとえ明るいお昼であっても、お外に一人でいるのはとても危ないわ。だから、今は私が傍についてあげよう」

少女の肩に手を乗せて、彼女は恍惚といった具合に赤く染めた頬の表情で続けていく。

「ハアハア、それにしても貴女、本当に可愛いわね……。でもね、こんなに可愛い女の子がお外に一人で居ると、すごくアブないのよ？ じゃないと、貴女のような可愛い可愛い女の子が大好きで仕方のない、とっても危険な大人の人に連れて行かれちゃうんだから……」

「——？ ひとり、だめ？」

「そうよ、一人でいるのはアブないの。だから、私がついてあげてる。ハアハア……。それにしても貴女、綺麗なおめめをしているのね。顔立ちも可憐ながら不思議系の透明感あるたいけさで可愛らしいし、ほっぺたも、吸いつきたいくらいもちもちで可愛らしい……。こんなにカワイイ子が一人で歩いていちゃあ尚更、ワルい大人に連れ

てかれちゃう……!! そんなのはダメよ絶対! だから、私が保護してあげる! そうしましょう!!」

「? ——怖、い……」

少し離れようとする少女。だが、彼女は少女へとそれを続けていく……。

「大丈夫よ、安心して。私なら、ワルい大人の人なんてすぐにやつつけちゃうんだから……!! ——あ、アイスならいっぱい買ってあげる!! 貴女が望むなら、ここにある全種類のアイスも買ってあげるわ……

!! あ、でも、全部食べちゃったらお腹が冷えちゃって大変かも……。でも大丈夫よ!! おトイレならあっちにあるから、おトイレに行きたくなったらすぐ私に言ってね!! そしたらお姉さん、急いで貴女をおトイレのままで連れて行ってあげるから……うふふ……」

にじりにじり。妖しく光らせた彼女の瞳に、少女は圧倒されるかのようにゆっくりと退いていく。

だが、それでもなお表情を一切と変えないその様相。アイスを食べる口を止め、少女はしばらくと暴走気味の彼女を見遣っていくと、そんな少女に見つめられて余計に興奮する彼女に対して、そのセリフを放っていったのだ。

「——気を付けて」

「? 気を付けて? ……私なら大丈夫よ。どんなに強くて怖いモンスターが貴女に襲い掛かってきたとしても、私が絶対に、貴女を守ってあげるから——」

「強いの、来る。 —— “あなたが負けた、あの男も”」
——ッ。

見開く目。全身に迸った寒気を受けて、炎天下に紛れる冷や汗を流した彼女は数歩と退いて少女を見遣っていく……。

「………貴女」

「—— “超越者”」

一言を告げる少女。手にアイスを持ちながら、それを続けていく。

「五人の超越者、ここに狙ってる。 ——ひとりは、ここにいます」

そう言って、自分を指差す少女。

「でも、壊すのやだ。だから、教えにきた。——あなただけ。四人を、止められるの」

「……その、貴女も含めた『超越者』って呼ばれる五人の中に、『あの男』もいるのね……？」

口元を手で押さえ、恐ろしく低い声音で少女へと訊ね掛けるその彼女。これを受けて少女はうんうんと頷いていくと、説明を続けるよう口を開き始める。

「いる。——『あの男』は、あなたの因縁。でも、三人も強い。『あの男』と、同じくらい」

「………ッ」

その時初めて、彼女は青ざめた。だが、色素の薄い健康的な色白が動揺を隠し切っていくと、彼女は荒げた興奮を何とか整えながらも冷静さを装って、未だ息切れる呼吸を抑え込むよう静かな声音で訊ね掛ける。

「……貴女はどうして、ここを壊したくないと考えているの？ 『あの男』の存在を引っ張り出してきて、それも同類である事実をほのめかした以上は、私は貴女のことを信用することはできない」

「——友達」

一言を口にする少女。そして少女はアイスを見つめながら、そのセリフを彼女へと伝えていくのだ。

「ここで、友達できた。初めての、楽しい。——人としての、楽しい。とても、嬉しかった。ずっと、ひとり。寂しかったから……」

「………」

「人に、なれた。やっと、楽しい知れた。その人、友達になった。ずっと、楽しいしたい。——でも、ここ壊れたら、友達消える。だから、あなたに教えた。友達のために……」

「………」

無言。炎天下の猛暑も忘れるほどの冷や汗で全身を冷やし、眼前に存在する脅威と相對することで持続した警戒を表情に乗せながら、彼女は腹部辺りで軽く腕を組んでそう言葉を口にする。

「……ありがと、少し考えさせて。……でもね、先に貴女に伝えておく

のだとすれば、本来なら私にはもう、戦う「動機」というものが存在しないの。その様子なら貴女も知っているでしょうけれども、以前の私には「動機」があったものだから、どんなに強い相手だろうと私は命を懸けて戦うことができていた。でも、その「動機」は既に、この世に存在しない。それが失われてしまった今の世界には価値を感じられないものだから、私としてはもうね、この星が消し飛んでしまおうとも別に構わないの。——ただ、「あの男」だけには個人で用があるから、これだけは約束してあげる」

そう言い彼女は、少女という幼い女の子に対して低い声音で伝えていくと、次にもドス黒く、しかし瞳孔のみを真紅に染め上げた魔獣の如き眼光を宿しながらそれを口にした——

「——気が向いたら、手伝ってあげる。ただそれだけよ」

滾る力。今にも地盤を叩き割りそうな感情を秘めた彼女のセリフを耳にして、少女は一切と変えない表情で「——ありがとう」と呟くと、瞬間にもフツと消え去って跡形も無くその姿を晦ましていった。

……空を見遣る彼女。真紅と漆黒の目をそのままに見上げた真っ直ぐな視線で大空を貫いていき、太陽の強い日差しをも遮る視界中の黒い靄で彼方を眺めていきながら、握りしめた拳の力で両手にドロドロと血を流し始めて、彼女は暫しとその場に佇み続けていった——

1章5節

動き出す二人【3672文字】※お色気シーン有

月夜に鳴り響く警報。二十五階にもなる高層ビルの一角にて、赤く回り出すサイレンを合図にして武装した集団が一室に押し寄せる。そしてマシンガンの銃口を向けてその先へとけん制を掛けていくと、デスクのPCから光る薄いブルーライトを浴びた一人の男が、手にしたUSBをしまつて窓辺へと向かいだした、その時だった。

一斉に発砲された、十数にも渡るマシンガンからの容赦ない弾幕。それを全身に浴びた男が衝撃で背後の窓を破っていくと、その男は二十五階の高さから身を投げ出すようにして、真つ逆さまと落下していったのだ。

すぐにも、男が落下したであろう地上へと駆け出していく武装集団。その間にも落下する男は全身から大量の血をまき散らしながら地面に打ち付けられると、真つ暗な路地裏の、ひと気の無い静寂な暗がりにひとり、肉が飛び散る音を鳴らしてその場で絶命した。

——のだが、次にもその肉片はひとりでに震え始め、落下した地点に向かって引き寄せられるよう集合する。

そして、それらが浮き上がって人の形を形成していくと、服までも再生したその肉体で、男は拳を握っては開いてを繰り返しながら身体の感触を確かめてから、路地裏の闇へと紛れるよう走り出していったのだ……。

朝方。閉められたカーテンが、日光で光を帯びていく。傍のダブルベッドには三名の女性が裸の状態で眠りについていると、真ん中で仰向けになる白髪の彼女がふと目を覚まし、普段は結っているその長髪をさらさらと流していきながら、上半身を起き上がらせてブーツと空虚を見遣っていった。

……黒色の瞳。色白の肌。美貌に溢れたその造形で自身の裸体を

手でなぞりつつ、先日にも告げられた少女の言葉が何度も脳裏をよぎらせて、その度に彼女は憂いの感情を表情に落とし込んでしまうのだ

『強い、来る。——“あなたが負けた、あの男も”』

『——“超越者”』

少女の口元。そこから放たれた、自身にとって少なからずの忘れ難き因縁の記憶……。

「葉山、さん……？」

と、彼女の隣で眠っていた一人の女性が、眠り目で訊ね掛ける声が耳に届いた。

そちらに振り向く彼女。そんな彼女と目が合った女性は「おはようございます……」と寝起きの調子で口にする、次の時にも彼女は女性に覆い被さるように四つん這いになり、目の先の女性を少しばかりと驚かせていく。

お互いに裸の姿。それも、覆い被さるように手をつけて身体を接近させていくと、彼女は無心のまま女性の唇を軽く啜えていき、それを離しては、またつえばむように口づけをしてという、間隔を空けた短いキスを繰り返す。

突然のそれに、驚きを隠せない女性。だが、彼女と交わす口づけに幸福感を見出していくと、女性は蕩けた眼で彼女のキスを受け入れ続け、乳を垂らした彼女の寝起き攻めに頬を赤らめていくと、直にも彼女は女性の頭を優しく撫でていきながら、そう言葉を掛けていったのだ。

「貴女は今も、夢の中。だから、私のベッドでもうひと眠りしていきなさい。私はずっと、貴女の傍にいてあげるから」

交わすキス。長めに口づけした彼女からの温もりに、女性は微笑みながら目を瞑って眠りについていく。

……それを確認した彼女は身体を起こし、そしてベッドから足を下ろして立ち上がってから歩き出す。

その歩き出した先にて場面は変化して、着こなしたいつもの服装で事務所のイスに腰を掛けていくと、脚を机にほっぴり出して組んでい

きながら、憂いの表情をそのままに葉山ユノは空虚を見遣っていた。

いつもの日常。既に昼間である時刻の探偵事務所では、備え付けのキッチンで何やら賑やかにやり取りを交わす柏島歓喜と蓼丸菜子の光景が展開されていく……。

「な、菜子ちゃん！ 確かに力強く混ぜるって教えはしたけど、それはちよつと強すぎちやつて生クリームが周りに飛び散っちゃつてるって!!」

「え、だつてゼンリョクで混ぜろつてカッキー言つたからやつてるんだけど!？」

「いや力加減はそのままでもいいんだけど、飛び散つた分の生クリームが勿体無いから、もうちよつと周りに気を遣いながら混ぜていつて!!」

「それ割と無理あるじゃん!? カッキーいつもどうやつてるのそれ!？」

「ああじやあお手本見せるから俺に貸して!!」

「あー!! やあーつ!! ここでカッキーに任せたら女子力で負けちゃうからやだーつ!!」

「ちよ、ちよつとボール振り回さないで!! こ、零れちゃうつて!!」
「やあああああーつ!!」

意地になる蓼丸菜子。涙目で彼からボールを死守していく様子と、そんな少女から必死になってボールを取り返そうとする柏島歓喜。その二人はエプロンを身に付けて、蓼丸菜子は頭巾まで着けてやる気満々なサマを見せていたものだったが、女子力修行という名目で始まった二人のお菓子作りは、常に破天荒な騒々しきで賑やかにしていたものだ。

と、その時にも鳴らされた事務所のインターホン。そのチャイムが室内に鳴り響くと騒ぎ立てる二人はハツとして入り口を見遣つていき、柏島歓喜が「俺、出てきます」と言いながら玄関に向かってその扉を開けていく。

その間も、葉山ユノは無反応に近い様子で呆然としていたもの

だ。こうして彼が事務所に戻ってきて案内の素振りを示していくと、すぐにも廊下からはサングラスをかけた王子のオーラ放つ男性が現れる。

羽毛のような、真白のショートヘア。白いジャケットに白いシャツで、青色のジーンズという格好をした男性がサングラスを外しながら葉山ユノへと向いていくと、挨拶と共に眩しいイケメンパワーを放ちながら得意げな笑みを見せてきた。

「どうも、またしてもお邪魔しますよ葉山さん」

桃空太一。龍明超人協会のトップに君臨するスーパーヒーロー。モデルやドラマとしての活躍も兼ねる龍明の有名人がその素顔を晒していくと、それを見た蓼丸菜子は「うえ?!?!」と裏返った声を出しながら、思わずとボールを投げ出してタイチへと駆け寄った。

「た、た、たたたたタイチさんっ?!?!?」 なな、なんでっ、なんでっ——え、うそ、ホントに本物。え、あの、アタシいつもドラマとか観てて、その、ふ、ファンと言うか……応援してるっていうか……っ!!」

感極まる。駆け寄るなりタイチの顔をまじまじと見つめる蓼丸菜子。あの有名人が、どうしてここに。そんな、あまりにも信じられないといった様子で顔を赤らめた少女を前にして、タイチは視線を合わせるよう屈みながらセリフを口にする。

「お、カツキーに続く、葉山さんとの新しい助手の子かい?」

「えっ! あ、いやっ。ちが——……でも、いずれはそのつもり、……でしゅ」

緊張する少女は、目の前にしたスーパーヒーローに蕩けたような滑舌で答えていった。

これに微笑みかけたタイチ。少女へと手を差し伸べて握手を求め、自信に満ちた表情で蓼丸菜子にサーブスをしてあげる。

「おお、そうかそうか。それじゃあこれから、どうぞごひいきに。そういうことで、初めましてとよろしくの握手でもするかい? ほら」
「ふえっ?!?!? あ、ああアタシなんかタイチさんと握手するなんて、そんな——」

「そうか? じゃあ、また次の機会にでもするか?」

「え、それもヤだ!!! 今するっ!!!」

ガシツ!! 勢いよく手を握り締めた蓼丸菜子。それを受けてタイチは微笑ましく思いながら少女と握手を交わしていくと、終わり次第にも少女は顔を真っ赤にして口元を手で押さええていきながら、そのまま顔を隠すようにしてポフツと蒸気を噴き出してから暫しと佇んでいたものだ。

ボールを回収し、何気なく生クリームをかき混ぜていく柏島歓喜。タイチの様子へとその視線を投げ掛けながらそのセリフで訊ねていき、本来の目的であろうタイチの“それ”へと柏島歓喜は誘導していく。

「それで、タイチさん。またユノさんに相談したい案件があると仰っておりますけれど」

「ああそうだな。ま、そういうことなんで、またしても押しかける形になってしまったもんなんだが、超人協会を助けるためだと思ってここは一つ、相談に乗ってくれないだろうか葉山さん」

タイチと目が合う葉山ユノ。デスクに乗せていた脚を下ろして腕を組み、タイチへと歩み寄るように彼女はそれを訊ね掛ける。

「それで、要件は？ また行方調査？」

「お、鋭いね。さすがですよ葉山さん」

そう答えて、タイチは胸ポケットから一枚の写真を取り出している。そして彼女へと写真を手渡して見せていくと、そこに写された一人の美しい貴族の女性に葉山ユノは見惚れていきながらも、同時にして掛けられたタイチの言葉へと耳を傾けていった。

「今回は人間の行方を探ってもらいたいもんなんだが、これまた厄介な事情を抱えた問題と直面してしまっておりましてね。しかも、以前にも接触を控えるよう上からの圧力があつたモンスター討伐に俺が一枚噛んでしまったもんですから、俺は今回の件、謹慎しなければならぬんです。ね、これだけでもなかなか厄介なもんでしよう。そこで、我が葉山さんの出番、ということですよ。そんなわけで一つ、お願いしますよ——」